

博士論文

インドネシアの大学生における障害者イメージ
—イメージの内容・構造・適用に焦点をあてて—

Image towards Disabled People by College Students in Indonesia
-Focused on the Contents, Structures and Application-

平成26年度

200830349 大部令絵

筑波大学

目 次

第 I 部 序章	1
第 1 章 はじめに	2
1 インドネシアにおける障害者に対する偏見の問題	2
2 イメージに関する先行研究	7
第 2 章 インドネシアの障害者を取りまく環境	16
1 インドネシア事情	16
2 インドネシアの障害者を取りまく現状	17
1) 障害者の定義および診断	17
2) 障害者の人口	18
3 障害者の教育と生活	19
第 3 章 本研究の目的	27
1 本研究の目的	27
2 本研究における用語の定義	28
3 倫理的配慮	29
第 II 部：本論 インドネシアの大学生における障害者イメージ	30
第 4 章 インドネシアの大学生における障害者イメージの内容（第 1 研究）	31
1 目的	31
2 方法	31
3 分析	32
4 結果	32
1) 視覚障害者イメージの内容	33
2) 聴覚障害者イメージの内容	36
3) 知的障害者イメージの内容	39
4) 運動障害者イメージの内容	42
5 考察	45
6 まとめ	47
第 5 章 インドネシアの大学生における障害者イメージの構造（第 2 研究）	48

1	目的	4 8
2	方法	4 8
3	分析	4 8
4	結果	5 1
1)	視覚障害者イメージの構造	5 1
2)	聴覚障害者イメージの構造	5 3
3)	知的障害者イメージの構造	5 5
4)	運動障害者イメージの構造	5 7
5	考察	5 9
1)	インドネシアにおける障害者イメージの構造と障害者との接触経験	5 9
2)	障害者イメージの構造を特徴づけた表現語群	6 1
6)	まとめ	6 5
第6章	インドネシアの大学生における障害者イメージの適用 (第3研究)	6 6
1	目的	6 7
2	方法	6 9
3	分析	7 2
4	結果	7 2
1)	障害者との接触経験のある男子学生による障害者イメージの適用	7 2
(1)	視覚障害者イメージの適用	7 2
(2)	聴覚障害者イメージの適用	7 7
(3)	知的障害者イメージの適用	8 1
(4)	運動障害者イメージの適用	8 7
2)	障害者との接触経験のない男子学生による障害者イメージの適用	9 2
(1)	視覚障害者イメージの適用	9 2
(2)	聴覚障害者イメージの適用	9 6
(3)	知的障害者イメージの適用	1 0 1
(4)	運動障害者イメージの適用	1 0 7
3)	障害者との接触経験のある女子学生による障害者イメージの適用	1 1 1
(1)	視覚障害者イメージの適用	1 1 1

(2)	聴覚障害者イメージの適用	1 1 5
(3)	知的障害者イメージの適用	1 2 0
(4)	運動障害者イメージの適用	1 2 6
4)	障害者との接触経験のない女子学生による障害者イメージの適用	1 3 2
(1)	視覚障害者イメージの適用	1 3 2
(2)	聴覚障害者イメージの適用	1 3 6
(3)	知的障害者イメージの適用	1 4 2
(4)	運動障害者イメージの適用	1 4 7
5)	障害者イメージの適用に影響を与える情報源	1 5 1
(1)	接触経験のある男子学生の障害者イメージ適用に影響する情報源	1 5 1
(2)	接触経験のない男子学生の障害者イメージ適用に影響する情報源	1 5 6
(3)	接触経験のある女子学生の障害者イメージ適用に影響する情報源	1 6 1
(4)	接触経験のない女子学生の障害者イメージ適用に影響する情報源	1 6 6
6	考察	1 7 1
1)	具体的障害者と単語刺激『障害者』に対するイメージとの構造上の違い	1 7 1
2)	障害者に関する情報源がイメージ適用に及ぼす影響	1 7 1
7	今後の課題	1 7 4
第Ⅲ部：結論		1 7 6
第7章	本研究のまとめ	1 7 7
第8章	総合考察	1 7 8
第9章	今後の課題	1 8 1
文献		1 8 3
資料1-1	第1・第2研究 質問紙	1 9 1
資料1-2	第1・第2研究 質問紙 日本語訳	1 9 8
資料2-1	第3研究 質問紙	2 0 5
資料2-2	第3研究 質問紙 日本語訳	2 1 3
謝辞		2 2 1

序論

第1章 はじめに

1 インドネシアにおける障害者に対する偏見の問題

インドネシアは、国連の「障害者の権利に関する条約」に2007年5月に署名、2011年に批准した（United Nations, 2014）。この世界的な潮流に乗って、1990年代後半から、インドネシアの障害者を取り巻く教育・福祉施策は大きな変化をみせている。社会制度においては、障害者に関する法律である1997年法律第4号が制定され、障害者が健常者と同じ地位、権利、義務を有することが明文化された。教育の分野では、各種特殊学校および障害のある児童生徒数の増加、特殊教育教員資格に関する法律の改正、海外政府からの援助を受けたインクルーシブ教育の推進（Rahardja, 2006 ; Sujarwanto, 2003）などが展開されている。Table 1に、国民教育省（Departmen pendidikan nasional）が公開した2007/2008年度、および2008/2009年度の特殊学校数および在籍児童生徒数を示す。全人口の6割が居住するジャワ島の特殊学校数および在籍児童生徒数と、インドネシア全土の特殊学校数および在籍児童生徒数をまとめたものであるが、単一障害種の特殊学校数、児童生徒数にはほとんど変化がないものの、複数の障害種別を対象とした特殊学校と児童生徒数は地域ごとに増加している様子が見られる。また、福祉の分野では、地域社会の人的・物的資源を用いて、障害者とその家族を含む地域社会全体が参加して行われるリハビリテーション活動（Community-based rehabilitation）が実践されている（石渡, 1996）。

インドネシアではこのように積極的に幅広い障害者関連施策が展開され、例えば障害児の特殊学校就学者数の増加といった成果があがる一方、様々な問題も指摘されている。インドネシアにおける特殊教育や障害者の社会参加についての課題は複数あげられるが、そのうちの一つとして挙げられるのは、障害者の教育参加、社会参加に悪影響を及ぼしている偏見（prejudice）が存在するという問題である（Semiawan, 1994）。例えば、自閉症児教育やインクルーシブ教育において「障害のある子どもに教育を受けさせることは無意味である」という保護者の認識が障害児就学の妨げになっていること（大部・鄭・野呂, 2010 ; Sujarwanto, 2004）、聴覚障害児・者が自宅の外で補聴器を装用しない理由として「補聴器をつけることで聴覚障害者であることを知られることが恥ずかしい」という認識があること（大竹, 2004 ; スクマラ, 2003）が指摘されている。

Table 1 ジャワ島およびインドネシア全体の特殊学校数・就学者数

		特殊学校数		就学者数	
		2007/2008	2008/2009	2007/2008	2008/2009
ジャカルタ	視覚	2	2	119	102
	聴覚	14	14	1,006	892
	知的	25	25	1,158	1152
	運動	0	0	0	0
	複数	44	47	2,696	2,696
	全体	91	94	5,006	5,006
西ジャワ州	視覚	7	7	208	200
	聴覚	15	15	879	865
	知的	6	6	272	272
	運動	0	0	0	0
	複数	230	337	11,314	12,176
	全体	261	368	12,789	13,639
バンテン州	視覚	0	0	0	0
	聴覚	3	3	215	180
	知的	2	2	0	275
	運動	0	0	0	0
	複数	25	25	1,566	1,687
	全体	31	31	2,317	2,297
中央ジャワ州	視覚	4	4	87	82
	聴覚	19	19	1159	999
	知的	20	20	845	775
	運動	2	2	106	99
	複数	94	103	9,636	7,760
	全体	141	150	7,283	9,861
ジョグジャカルタ	視覚	1	1	32	35
	聴覚	2	2	164	176
	知的	3	3	134	146
	運動	0	0	0	0
	複数	46	51	2,679	2,809
	全体	57	62	3,090	3,255
東ジャワ州	視覚	6	6	131	131
	聴覚	32	32	1,119	1,096
	知的	28	28	748	743
	運動	6	6	50	50
	複数	289	328	10,241	10,486
	全体	367	406	12,437	12,654
国内全体	視覚	36	36	1,105	1,044
	聴覚	101	101	5,610	5,235
	知的	96	97	4,235	4,030
	運動	10	11	229	215
	複数	1,181	1,410	58,008	61,247
	全体	1,455	1,686	70,501	73,013

Departmen pendidikan nasional(2009;2010)をもとに筆者が作成した。

偏見や差別 (discrimination) は、社会的な問題として社会的認知研究の分野で 1990 年代ごろから研究がなされてきた (工藤, 2004)。また、障害者に対する否定的な認識はスティグマ (stigma) という言葉でも表現される。スティグマとは「烙印」の意味で、付与された対象にとって否定的な意味を含む表象を指すものであるが、障害者に対するスティグマの研究も、心理学的な手法を用いてこれまで複数行われてきている (Arbour, Latimer, Ginis, & Jung, 2007 ; Pararette & Scherer, 2004)。偏見や差別、スティグマは、いずれも対象に対する否定的な要素を含む。それに対し、内容の肯定性・否定性を問わず、特定の集団に対して固定的に付与された観念をステレオタイプ (stereotype) という。ステレオタイプには、特定の対象に対して集団内で共有された認識、実態を確実に捉えていない認識、集団の属性を区別するための認識といった様々な定義がなされており (Stroebe, & Insko, 1989 ; Vinacke, 1957 ; Allport, 1954)、ステレオタイプ以外の個人特性に目が向けられずに一方的な認識がなされてしまうという危険性や、個人が自集団に対する固定観念を認識し、その観念に沿った行動をとってしまう可能性 (ステレオタイプ脅威 stereotype threat) も指摘されている (唐沢, 2010)。

ステレオタイプは、認識の固定性に特徴が見出されているが、固定性を問わない、さらに広範な概念として、特定の事物に対する認識を意味するものとして、「イメージ」「態度」「スキーマ」といった言葉が使われ、これまでに研究が重ねられてきている。イメージや態度については、社会心理学分野において特定の事物に対する認識という点では、同じ意味として用いられているとされるが、本研究においては、イメージという言葉を使用することとする。

ところで、冒頭のような障害者に対する偏見の問題に対して、これまでインドネシアでは主にマスメディアによる障害者の啓発活動が行われてきた (ニノミヤ, 1999)。聴覚障害の分野を例として挙げると、聴覚障害のある夫婦が国内を自転車で一周する活動が新聞で紹介されたり (Kompas, 2009)、テレビのニュース番組に手話をつける上での課題がインターネット上の市民メディアで論じられたりしている (Sido, 2011)。しかし、こうした取り組みが続けられているにも関わらず、現在も、障害者に対する否定的な見解や偏見に起因する問題は多く指摘されている (Obu, 2011 ; 大部・鄭・野呂, 2010 ; Rahardja, 2006 ; 大竹, 2004 ; Sujarwanto, 2004 ; スクマラ, 2003)。貧富の差の大きいインドネシアであるが、人口センサスを含む統計情報を扱う統計局 (Badan pusat statistics) による、10 歳以上の国民のうちラジオ、テレビ、新聞に接する人数の割合をみると、国民が確かに情報

メディアに接しており、先述のメディアを介した啓発活動が国民に対して届いていないとは考え難い (Table 2)。

先行研究では、偏見の付与されている集団に属する者と個人的に接触したとしても、短時間かつ一度きりの接触の場合にはイメージは抑制されないと指摘されており (Allport, 1954)、さらに障害者に関する研究では、そうした接触経験だけでは障害者に対する認識を否定的なものにしようという知見も存在する (上瀬, 2002, 2001)。そのため、これまで障害者に関する啓発活動が行われてきたにも関わらず偏見の問題が解消されないという課題を解決するためには、啓発活動としてどのようなメッセージを人々に伝えるべきか、内容そのものに言及する必要がある、そのためにはまず、偏見も含め、インドネシア人の障害者に対するイメージの様相を関連要因も含めて明らかにすることは重要であると思われる。

Table 2 インドネシアの10歳以上の人がラジオ、テレビ、新聞に接する割合(%)

	2003年	2006年	2009年	2012年
ラジオ	50.29	40.26	23.50	18.57
テレビ	84.94	85.86	90.27	91.68
新聞	23.70	23.46	18.94	17.66

(Badan Pusat Statistics, 2014)

2 イメージに関する先行研究

先述の通り、社会心理学分野では、イメージ、スキーマ、態度といった言葉が、同様に既有知識として扱われることがある(澤江・齊藤, 2010; 大久保・金崎・藤木・糸山, 1996)。本研究では、イメージを、態度、スキーマ、ステレオタイプ、偏見、スティグマ、差別といった様々な名称で研究されるものの包括概念と位置付け、以下、スキーマやステレオタイプに関する先行研究も含め、知見を概観することとする。

イメージが固定された状態を指すステレオタイプに関して、現実場面での適用に関する先行研究では、ステレオタイプが付与された対象集団や個人を刺激として回答者に提示し、その特徴に関する言語表現を求め、得られた言語表現の抽象度を測定するとともに、回答者のステレオタイプの適用程度を抽出する「言語カテゴリーモデル」が活用されている(菅・唐沢, 2006; Semin & Fielder, 1988)。言語カテゴリーモデルは、抽象度の低い順から、行動の客観的記述である「記述行為動詞」、一般的な行動の記述である「解釈行為動詞」、情動的状態や精神状態の記述である「状態動詞」、抽象的な傾性の記述である「形容詞」の4カテゴリーから成り立つ。言語カテゴリーモデルでは、言語的抽象度が高いほどステレオタイプの対象に安定してみられる性格をはじめとする、長期にわたり観察できる行為者の傾性が推論されやすくなり、反証事例の持つ影響、すなわち、その対象が行うとは思えない行動はほとんど知覚されなくなり、また抽象度の低い記述は、状況に関する情報を多く得ることで知覚される。

また、これまで、人や集団を判断する際に使われる基本的次元として、“温かさ(warmth)”と“有能さ(competence)”の2つの次元の重要性が指摘されてきている(Fiske, Cuddy, & Glick, 2006; Peeters, 2002; Rosenberg, Nelson & Vivekananthan, 1968)。この2次元の相補性について、社会的地位と社会的関係によって規定されるステレオタイプの内容と関連付けたのが、ステレオタイプ内容モデル(stereotype content model)である。Fiske, Cuddy, Glick, & Xu (2002)は、自分自身が所属する内集団については、“温かさ”と“有能さ”共に高い状態と判断され、賞賛や誇りといった感情に結びつきやすいことを指摘している。他方、“温かさ”と“有能さ”が共に低い状態であると判断された集団に対しては、軽蔑的イメージが持たれやすいとされる。しかし、現代社会においては、先述のように“温かさ”と“有能さ”が共に高い、あるいは共に低い状態であると判断される対象は少ないとされ、多くの集団は、どちらか一方が高ければ他方は低く判断される、という両面価値的になりやすいということが指摘されている。このステレオタイプ

内容モデルにおいて、障害者は「温かいが有能でない」という評価を受ける集団として示されている。このような集団は、判断者からみると競争相手にはならず、保護の対象となり憐みや共感の感情が向けられやすいとされている。

一度ステレオタイプが形成されると、ステレオタイプはその対象となる集団成員の認知に様々な影響を与える。その影響とは、①ステレオタイプに一致しない情報よりも、一致する情報の方がより注目される、②ステレオタイプに一致する個人の情報は記憶されやすい、③ステレオタイプにもとづく予測が当たる方向に、実際の情報の解釈がゆがめられる、④ステレオタイプが適用されることにより行動に影響を受け、結果的にイメージを裏付けるような結果をもたらす、というものである。ステレオタイプの付与された集団に属する者に④の現象が起こっている状態が、先に述べたステレオタイプ脅威である。

こうしたステレオタイプの適用が起こらないようにするためのアプローチとして、カテゴリー化の変容と、ステレオタイプの適用を意識的に抑制するように動機付けることが挙げられる（久保田，2004）。

カテゴリー化の変容に関しては、特に認知者の所属する内集団－被認知者の所属する外集団のカテゴリー化と関係がある（久保田，2004）。カテゴリー化変容の方策としては、①集団間の境界を心理的になくす『脱カテゴリー化（*decategorization*）』、②各集団を含み入れる上位のカテゴリーを新たに作り出す『再カテゴリー化（*recategorization*）』、③元の集団間の境界はそのままに、各集団を含む弱いカテゴリーを作る『下位カテゴリー化（*subcategorization*）』、④一度に複数のカテゴリーを意識させることで、内集団－外集団の区別を困難にさせる『交差カテゴリー化（*crossed categorization*）』があげられる。

また、ステレオタイプの適用を意識的に抑制するための動機付けに、良心の呵責や罪悪感の感情を利用する方法が検討されている（塚本，1998；Devine, Monteith, Zuwerink, & Elliot, 1991）（Table 3）。

Table 3 カテゴリー化の変容方策とその問題点

方策	内容	方法	問題
脱カテゴリー化 (deategorization)	集団間の境界を心理的に感じなくさせる。	外集団成員との個人的接触により、外集団成員が個別に異なる性質をもつことに注意させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・単純な接触ではステレオタイプ化が抑制されない。 ・特定の外集団成員と友好関係が成立しても認知の変容はその個人に対するものにとどまり、イメージ自体は変化しない可能性がある。
再カテゴリー化 (recategorization)	各集団を包含するような上位のカテゴリーを新たに作り出す。	2 集団で 1 つの目標の達成に向けて協力関係を深めるなかで生じる。	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの集団の評価が高い場合、高い評価を維持するために、ステレオタイプが強まる可能性がある。
下位カテゴリー化 (subcategorization)	もとの集団間の境界はそのままに、各集団を上位カテゴリーに含める。	2 集団で 1 つの目標達成に向けて協力する。その際、各集団が各々の社会的アイデンティティを保つため、別個の役割を担うようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・上位カテゴリーがあまりに弱い場合、集団間関係やステレオタイプの改善にはいたらない可能性がある。
交差カテゴリー化 (crossed categorization)	複数の社会的カテゴリーを意識させることで、内集団と外集団の区別を複雑に認知させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・内集団と外集団が共有している社会的カテゴリーを意識させる。 ・内集団成員内で社会的カテゴリーが必ずしも一致しないことを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現実的に、2 集団間で社会的カテゴリーが交差しない可能性がある。 ・2 集団の社会的カテゴリーの重要性が等価でない場合、価値の低い社会的カテゴリーは無視させる可能性がある。

※久保田（2004）をもとに筆者が作成

以上の先行研究から、イメージ、特にステレオタイプに関する研究においては、言語表現に着目した研究が行われ、特に人物の傾性に関する研究では動詞と形容詞が扱われてきていることが示唆される。

さらに、障害者の社会参加、教育参加に不利益をもたらさうるイメージの抑制方策に関しては、情報提示や共同作業など、ミクロな方法は異なるが、イメージを作成された集団成員を個人として意識させるという共通点がみられる。インドネシアにおける障害者イメージの適用を探るにあたっては、文献からの知見を整理すると同時に、フィールドワークによる研究を通して、現代インドネシアに生活する障害者の日常生活を示す必要があると考える。

なお、社会心理学の分野では、例えばアメリカで示された研究成果が、ヨーロッパやアジア諸国による追試では同じ結果が得られなかったことから、近年、文化的視点の重要性が論じられるようになった。文化の違いを視野に入れた心理学研究の立場としては、基本的な心理プロセスは普遍的なものであることを前提に、歴史や宗教による固有の規範や価値観が認知や行動の違いをもたらすとする『比較文化心理学』という立場での研究が行われるようになったが、西欧諸国の個人主義と南米、アジアの国々のもつ集団主義、に代表されるような二元論に対する限界や、比較文化心理学が文化を独立変数としてとらえ、文化的価値観の違いによる人の認知や行動を説明しようとするという一方向的な解釈をしてきたことに対する問題が指摘されていることから、心理プロセスや構造そのものが文化によって多様であるという『文化心理学』が提唱されている（遠藤，1998）

こうした、人の認知や行動に対して文化が影響しているという視点は、本研究の考察の視点としても不可欠である。以下に、人物の傾性と言語に関連した先行研究を示す。

Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan (2001) は、社会的認知と文化との相互関連性に関して、「分析的認知」と「包括的認知」による理論モデルを見出している。分析的認知とは、観察される現象を細分化された要素の性質によって理解しようとする傾向であり、文脈や状況から独立した本質的要素の理解、全体よりも個別の対象物に向けられる注意、といった認知的傾向によって特徴づけられ、おもに西欧型の文化、特に北米文化圏で典型的に見られるとされる。これに対して、包括的認知は、個々の要素の性質よりも、相互の関連性や全体的な「場」の持つ影響力によって現象を理解しようとする傾向をもち、文脈や状況全体への注意、具体的で経験的な知識の重視、表面的には矛盾するよう見える現象も統一的に理解しようとする思考様式によって特徴づけられ、東アジアをはじめ「東洋」

と呼ばれる文化圏で優勢な認知様式であるとされる（唐沢，2010）。

記述によって人物表象を求め、回答における品詞の相違について調べた研究（Maass, Karasawa, Politi, & Suga, 2006）によると、西欧言語圏における人物属性の表象では、対象に安定してみられる特徴を示す形容詞が用いられやすいのに対し、東アジア言語圏では、文脈に多く依存した動詞が用いられやすいことが報告されている。

人がものごとをどのように知覚し、記憶し、推論するかは、その人のもつ文化的カテゴリーによって決まるとする仮説は、言語相対性仮説と呼ばれる。特定の言語に特徴的な性質が、特定の領域での認知様式に強い影響を与えることがあり、人物の属性に関する表象の形成過程においても、言語相対性仮説による議論がなされている。人の性格特性を表す語彙は、言語間で共通したものも多い反面、ある言語では単純に1語で多くの性質を効率よく表現できるにもかかわらず、これを直訳できる特性語が他の言語では見当たらない場合がある。中国語と英語をとりあげた研究では、「世故（shin gu）」という語が「人生経験が豊富」「家族思い」「社会的スキルに優れる」といった意味を持つ言葉であるが、類似した意味をもつとされる“liberal”は「社会問題や政治については進歩的」「多様性に対して寛容」「人道主義的」といった意味を含み、中国語への直訳は難しいことが明らかとなっている（Hoffman, Lau, & Johnson, 1986）。

文化心理学的視点によるこれらのイメージに関連する研究の知見から、アジア圏であるインドネシアにおいても、障害者イメージは包括的認知によって多く表現がなされる可能性がある。また、インドネシア語を扱った言語相対性仮説に基づく研究は見当たらないが、インドネシア語が言語としてインドネシア国内に定着したのは第二次世界大戦中のことであり、比較的歴史の浅い言語である。そのため、翻訳を通じて研究を行うにあたっては、インドネシア語・日本語双方に精通した複数の協力者に依頼し単語の意味を確認するといった工夫が必要となるであろう。

次に、近年の障害者イメージ（スキーマ、ステレオタイプ、態度、偏見、スティグマを含む）に関する研究を概観する。

坂本（1999）は、大学生に対し、「精神病」に対するイメージについて、SD法により調査した。因子分析の結果、「精神病」イメージは、第1因子が「精神病」を有する人の社会対人イメージ、第2因子が「精神病」を有する人の精神内界イメージであり、2因子構造であることが明らかになった。また、SD法の質問項目とあわせて、「精神病」についての情報の見聞や体験についての質問を行っている。具体的には情報の見聞について、①専

門書や新聞、②事件報道、③ドキュメント報道、④フィクション作品、の4種から「精神病」の情報を得たことがあるかを尋ねた。また、接触経験については、①身の回りに精神科に入院もしくは通院した人がいるか否か、②見舞いや見学を含め精神科に行ったことがあるか否かについて尋ねた。イメージと情報の見聞との関連について、②事件報道から情報を得た対象者は、第1因子「精神病」を有する人の社会対人イメージが否定的であり、偏見が強いことが示された。他方、③ドキュメント報道から情報を得た対象者は、第2因子である「精神病」を有する人の精神内界イメージが同情的な内容となることが明らかになった。また、接触経験に関して、①身の回りに精神科に入院もしくは通院した人がいるか否かはイメージに影響を及ぼさなかった。対して、②見舞いや見学を含め精神科に行ったことがあるか否かについては、「ある」と答えた対象者の抱く「精神病」イメージは比較的肯定的な内容であることが示され、精神科施設と接する機会が、「精神病」に対する偏見の低減にあたって重要であることが示唆されている。

河内（2001）は、視覚障害学生と聴覚障害学生に対して大学生が想起するイメージの意味構造を明らかにするために、体育学系の男子学生108名、教育・社会学系の男女学生137名を対象に、6つの刺激対象を示して想起されたイメージを形容詞で記述するイメージ連想テストを実施した。得られた形容詞を意味内容の同一性、類似性に基づき、8つのカテゴリー（困難、意力、性格、賞賛、知力、外見、関係、その他）に分類した。この分類された記述語について、出現頻度10以上を示した43の記述語を分析対象として、刺激対象[6]×学生群[3]×記述語[43]の多層クロス集計表に対して数量化Ⅲ類を実施した。その結果、記述語の意味構造は主に4成分で構成されており、それぞれ「痛ましき・好ましき」因子、「スチューデント・アパシー」因子、「妬み賞賛・忍耐力」因子、「性別属性」因子と命名されること、障害学生に対し想起される情緒的意味について、障害種別、性別、専攻学科別の意味構造は類似度が高いものの構成要素（記述語）のレベルでは違いもみられることが示唆された。

また、毛呂・島谷（2010）は、精神障害に関するイメージを調べるために、大学生96名、大学院生19名、社会人198名に、『精神障害に対する知識尺度』、精神障害者との接触経験を問う『精神障害に関する経験尺度』、『精神障害者に対する社会的距離尺度』、『「精神病」イメージ調査質問項目（SD法）』で構成される質問紙調査を実施した。「精神病」イメージの20の質問項目に対する回答について因子分析を行った結果、4因子17項目が抽出された（「社会的許容」因子、「明るさ」因子、「活発さ」因子、「複雑さ」因子）。

栗田・楠見（2012）は障害者ステレオタイプの両面価値性に着目し、態度の現れ方と態度の内容という 2 つの視点から検討を行うために、大学生・大学院生 35 名に対し、視覚障害者、聴覚障害者、運動障害者を刺激対象として、Implicit Association Test（IAT）を行った。結果として、表明次元に関わらず、障害者に対しては能力の低さを示すネガティブな能力ステレオタイプと、人柄の良さを示すポジティブなステレオタイプが共存していた。また、顕在的にはポジティブなステレオタイプが、潜在的にはポジティブ・ネガティブなイメージが存在していたのである。この、顕在的ステレオタイプ、潜在的ステレオタイプとの違いは、単純にポジティブな障害者イメージを付与するだけでは、偏見の解消にはつながらないことを示している。この研究では今後の課題として、態度と行動の整合性、参加者の対象範囲の限定、態度に及ぼす個人差要因の検討が必要であることが示唆されている。

このように、これまでの障害者イメージに関する研究では、いずれも障害者イメージが複数の次元により構成されていること、イメージの内容は、障害者の能力の低さや性格の悪さを示すような内容だけでなく、活動性の高さや人物的温かさを示す内容も含まれることが共通の結果として示されている。

障害者イメージの内容や構造、適用に影響する要因としては、性別、障害者との接触経験があり、また障害者に関する情報源とイメージとの関連（坂本，1999）に関しては、インドネシアで行われてきたマスメディアを介した啓発活動の効果を検討する上で参考となる知見と言えよう。性差に関しては、ジェンダー・ステレオタイプが身体特性、社会的役割や職業、性格特性など多方面に存在し、人々の期待や認知に影響を及ぼすとされている（青野，1994）。接触経験によるイメージ変容に関しては、Allport（1954）の偏見に関する研究が大きく影響を受けた「接触仮説」がかつて存在していた。接触仮説とは、異なる集団間の成員が接触することにより、両者の関係が改善されるという考えであるが、後続の研究において接触効果の不一致がみられたことなどから仮説に対する疑問が投げかけられるようになり、その後、先述のようなカテゴリー化の変容に関する研究知見が示された（上瀬，1999）。また、イメージに影響を与える要因としての情報源については、上記の他に、学校現場の場合には、授業を通じて障害に対する理解を図る取り組みがなされている。例えば、理学療法学を専攻する大学生が、対麻痺について学ぶ際に Barthel Index という、日常生活動作（ADL）評価表を用いて授業の前後に「対麻痺者の日常生活活動」に関するイメージを検討した。結果として、移動に介助を要するイメージ、及び整容につい

て自立しているイメージを授業以前からもっていること、また授業後には、食事、移乗、トイレ動作、入浴、更衣、排せつなど多くの日常場面における自立のイメージが形成されたことが示された（佐藤・高橋・加藤，2001）。

障害者イメージに関する先行研究を Table 4 に示した。

先述のようにインドネシアにおいては否定的な障害者イメージが存在し、その影響も危惧される場所である。しかしながら、インドネシアにおける障害者イメージの研究はみられていないため、これまでの障害者イメージに関する先行研究の結果を踏まえつつ、まずは基礎的知見を得る必要がある。先述のような、インドネシア国内において障害者の社会参加を阻むような障害者イメージの事例をふまえつつ、イメージが人々に持たれ、何らかの外的刺激により適用されるにあたって、どのような内容であるのか、人々の持つ障害者イメージの構造はどのようなものであるのか、ということから明らかにしていく必要がある。

Table 4 障害者に対するイメージに関連する研究と主な結果（一部）

著者	年	障害種	対象者	主な結果
山内	1984	視覚	小学生	低学年は高学年よりもポジティブなイメージをもつことが明らかになった。
坂本	1999	「精神病」	大学生	「精神病」患者の社会対人イメージと、精神内界イメージの2因子構造であった。また、「精神病」の情報源、および接触経験の影響を調査したところ、事件報道から情報を得た者は社会対人イメージが否定的であったが、ドキュメント報道から情報を得た者は精神内界イメージが同情的であった。さらに接触経験について、精神科を訪れた経験が「ある」者は「精神病」患者に比較的肯定的であり、精神科施設と接する機会が、「精神病」への偏見の低減に重要であることが示された。
河内	2001	視覚、聴覚	教育学専攻学生（男女）、体育学専攻学生（男）	障害学生に対し想起される情緒的意味は、障害種別、性別、専攻学科別の意味構造で類似するが、構成要素（記述語）は異なる。視覚、聴覚いずれにおいても、賞賛的内容と痛ましさを示す記述語が示された。
Kurzban & Leary	2001	身体障害者		病気は身体障害の原因となりうることから、身体障害者が潜在的に病気をもっていると示唆され、身体障害者との接触を避ける心的メカニズムが人間に備わっている可能性が示された。
Fiske, Cuddy Glick, & Xu	2002	障害者	大学生およびその保護者、大学近隣住民	ステレオタイプ内容モデルは“有能さ”と“温かさ”の2次元で構成されており、障害者ステレオタイプは“有能ではないが温かい”という内容であることが示された。
豊村・菊池	2007	視覚、聴覚	高校生、大学生	視覚、聴覚という障害種別が異なっても、次元構成は類似していた。内容としては、相対的に視覚障害者イメージの方に好意的内容が若干多くみられた。
McEwan , Taylor , Casswell , Entwistle , Jacoby , Gorry , Jacoby , Baker	2007	てんかん患者	てんかん患者の介護者	「てんかん患者は他者と同等の知的レベルである」をはじめ、てんかん患者に対する態度は概ねポジティブな内容であった。年齢、性別、患者との関係性による態度の違いは見られなかったが、対象者の学歴に有意差があり、4年制大学卒業の方が、学歴を有さない者よりも好意的な態度を示した。
松本・田引	2009	知的	障害者スポーツイベントのボランティア参加者（コーチおよびイベント当日スタッフ）	知的障害者イメージとして5因子を抽出。「活動」因子、「性格」因子、「行動」因子、「親和性」因子、「感受性」因子が見いだされた。知的障害者に対する日常場面での意識・態度から3因子を抽出。「実践態度」因子、「社会的受容」因子、「否定的印象」因子が見いだされた。日常的に知的障害者に接しているコーチは、イベントスタッフよりも知的障害者の社会的受容を肯定的に捉えており、実践的態度ももっていた。
栗田・楠見	2010	身体障害者	大学生、大学院生	3因子を抽出。「社会的不利」因子、「尊敬」因子、「同情」因子が見いだされた。
毛呂・島谷	2010	精神	大学生、大学院生、社会人	精神障害に関する知識や経験が豊富であるほど、精神障害者に対する社会的距離が近くなり、ポジティブな態度をもっていた。

※上記の論文をもとに筆者が表を作成

第2章 インドネシアの障害者を取りまく環境

1 インドネシア事情

インドネシア共和国 (Republic of Indonesia) は、東南アジアの太平洋上に位置する、世界最大の島嶼国家である。インドネシア統計庁によると、2010年の人口は237,641,326人であり、人口数で世界第4位となっている。そのうち136,610,590人が、首都ジャカルタを有するジャワ島の人口である。

国是であるパンチャシラ (建国5原則) において、国民はイスラム教、キリスト教、ヒンズー教、仏教、儒教のいずれかを信仰することが定められている。宗教省 (Kementerian agama) によると、国民の宗教は、イスラム教88.1%、キリスト教9.3%、ヒンズー教1.8%、仏教0.6%、儒教0.1%、その他0.1%となっている。また、宗教とは別に、各地域における慣習 (adat) や、ジャワ語やスダ語をはじめとする種族固有の言語も残っている。こうした、地理的にも広大、かつ民族、言語、慣習が多様でありながら、1国家として独立した経緯があるため、国家スローガンとして “Bineka tunggal ika (多様性の中の統一)” が掲げられている (外務省, 2011)。

国是であるパンチャシラは、インドネシアが独立する際に、初代大統領であるスカルノが1945年に制定したものである。パンチャシラに定められているのは、①唯一神の信仰、②人道主義、③インドネシアの統一、④民主主義、⑤社会的公正の5原則である。パンチャシラは『インドネシア国民教育』という必修科目の中で、義務教育段階から児童生徒が学ぶことになる。その他、必修科目となっているものには『インドネシア語』がある。先述の通り、インドネシアにおいては第一言語が種族固有の言語である場合が多く、インドネシア語は小学校段階から学ぶこととなっている。社会生活においてはインドネシア語の能力は不可欠なものである一方、障害の状態によっては、第二言語を習得するということが困難な場合があることから、特殊学校においては教員が個々の児童の言語能力を判断し、適宜地方語による授業が行われる。



Fig.1 インドネシアの白地図
(世界地図

http://www.sekaichizu.jp/atlas/eastern_asia/country/indonesia.htmlより)

2 インドネシアの障害者を取りまく現状

1) 障害者の定義および診断

インドネシアにおいて障害者を定義した法律に、1997年法律第4号がある。それによると、障害者とは、「身体及び／または精神の障害があり、そのために人間らしい生活を送ることが困難になったり、それが人間らしい生活を送ることの妨げになっているような人」とある（ソロ身体障害者リハビリテーションセンタープロジェクト、1998）。

具体的には、障害者には下記のカテゴリーが含まれる（国際協力事業団 企画・評価部、2002）。

- ・身体障害者
- ・知的障害者
- ・身体および知的障害者

身体障害とは運動障害者、視覚障害者、聴覚障害者、言語障害者である。視覚障害者は全盲と弱視の2つに分類される。全盲は両目が全く見えない状態を指し、弱視は矯正をした両目で、十分な明りのもとで1メートル以内の動いている指が数えられない状態のことを指す。聴覚障害者は補聴器を利用しても1メートル以内で発せられている言葉がはっきり聞こえなかったり、理解できない人のことである。言語障害者は全く話せない人あるいは話しても理解されず、他人とのコミュニケーションにおいて困難あるいは障害を持つ人のことを指す。知的障害者は、先天あるいは疾病による知的障害や行動障害を持つ人のことである。また、知的障害は通常かつ適切な成長を妨げる内在的および外在的な要因によって引き起こされる状況であり、これらの要因は知的能力、意思、感覚、社会適応その他の困難さを生じさせるものを指す。

インドネシアにおける法律上の障害者の定義は上述の通りであるが、障害者の教育に関するカテゴリーは別途、教育に関する法律で定められており、下記の項目が存在する。

- ・視覚障害：A
- ・聴覚障害：B
- ・軽度および中度知的障害：C
- ・運動障害：D
- ・情緒障害：E

上記は視覚障害から順番にA～Eのアルファベットが割り振られており、障害種別をそのアルファベットで示す。例えば、視覚障害特殊学校はSekolah Luar Biasa A（略称：

SLB-A、Sekolah Luar Biasa は特殊学校の意) と示される。

障害者が就学するにあたっては、多くの特殊学校で入学前に医師の診断が必要となるが、医師の診断はその多くが WHO の ICD-10 をはじめとする海外の診断基準を利用している。

なお、1977 年に WHO の協力のもとインドネシア健康調査開発研究所が実施した調査 (Manton, Dowd & Woodbury, 1986) では、ICIDH に基づいて、障害者の impairment、disability、handicap の 3 つの側面について検討している。対象者となった障害者を年齢別で分類し、45 歳以上の者 876 名について調査したところ、年齢に伴い身体障害の数は増えているものの、セルフケアが制限されることによる特定の障害との関連はあまりみられないことが示された。この傾向は、例えば特定の医療問題と特定の機能制限との関連が加齢に伴い不明確になっていく、といった、一般的な高齢者と類似した傾向であるが、この関連は年齢に伴いより顕著にみられ、さらに女性の方が顕著であった。また、男性は、障害の多くは特定の心臓病と肺疾患と関連していた。女性は、多くの障害は (身体的感覚障害による) コミュニケーションスキルの障害の増加によって発生していた。

2) 障害者の人口

前述の 1997 年法律第 4 号による障害者の定義はあるが、障害者の人口統計資料については明確なものが存在しないという実態がある。

東方 (2008) は、インドネシア統計庁による Survei Sosial Ekonomi Nasional (人口センサス。以下 Susenas)、および Sensus Potensi Desa (インドネシアの行政村を対象とした人口センサス。以下 Podes) について障害者統計の情報比較と、農村地域における Podes 情報と実態との比較を行っている。その結果、障害者統計の情報比較からは、焦点化している障害種別および地域が異なっており、全体像をつかむためには複数の統計情報を用いる必要があることが指摘されている。また、農村地域における Podes 情報と実態との比較においては、Podes が可視性の重度障害者をカウントしていること、誰に対して調査を実施したのかが不明である点を明らかにしている。

2006 年現在で、インドネシア全人口に占める障害者数は、530,359 名とされており、当時の人口のうち 0.25% の人が障害者であると推察される (東方, 2008)。

上記のデータは社会福祉に関係する統計調査を扱っているが、教育の分野においては、国民教育省が、特殊学校就学者数をはじめ、特殊教育に関連した統計データを扱っている。このデータは、全国の特殊学校が国民教育省に自校の生徒数を報告したものを集約すると

いう方法で作成されている。

3 障害者の教育と生活

インドネシアは世界最大の島嶼国家であり、現在の国内にはおよそ 300 種類の民族と、それぞれの民族に対応した言語が存在する。もともと貨幣価値がなかった時代には、障害のある人々は、狩猟のような与えられた役割をこなすことで集団生活に参加していたことが、文化人類学の研究から明らかとなっている (Ingstad, 2006)。バリ島北部においては、聴覚障害者が他地域よりも多く生活している地域が存在し、地域の中では地方語の手話を聴覚障害の有無に関係なく人々が使いこなし、聴覚障害者は墓掘りをはじめとする固定の職を有していたことが明らかになっている (Branson, Miller, I Gede Marsaja & I Wayan Negara, 1996)。

インドネシアにおける特殊教育の始まりは、当時インドネシアを植民地としていたオランダ人の慈善家による活動だった。バンドゥン (Bandung) で、1901 年に視覚障害特殊学校が、1927 年に知的障害特殊学校が設立され、1930 年には聴覚障害特殊学校が設立された。これらの教育は、その後の第二次世界大戦においてオランダが日本に敗れた際に閉鎖されている (河合, 2007)。インドネシアが日本占領下にあったのは 3 年間であったが、この際、それまで愚民政策をとってきたオランダに代わり、日本軍はインドネシア人に教育を行うことで軍事力強化を図る方針であったため、インドネシア人の多くが教育を受けることとなり、またそのためにインドネシア語の整備・普及がなされた (百瀬, 2003)

終戦・独立後に特殊教育は再開され、またこのころから教員養成も開始されている。1954 年にはバンドゥンに 2 年間の高等専門学校 (Sekolah guru pendidikan luar biasa: SGPLB) が設立された。1984 年には小学校が、1994 年には中学校が義務化され、特殊教育分野においても小学部、中学部は義務教育とされている (河合, 2004)。

2006 年には特殊教育において児童生徒に習得させるべき能力と、その評価に関する基準『Standar kompetensi dan kompetensi dasar』の改良が進められた (Rahardja, 2006)。

また、インドネシア国内の特殊教育において大きな関心が寄せられている発達障害への対応にも変化がみられている。従来の教育分野における障害分類に、新たに『H autis (自閉症)』が加わり、小・中・高の各教育における指導要領も、初等中等教育局から示されるようになった。

なお、インドネシア国内における特殊学校の数は、2008/2009年度の国民教育省統計によると、全国1,686校のうち、国立学校412校、私立学校1,274校であり、私立学校の数は国立学校のおよそ3倍となっている。この私立学校の多くは、富裕層の人々が個人で設立した財団が運営している。また、同年のジャワ島内における特殊学校数は1,111校、うち国立学校144校、私立学校967校となっており、インドネシア国内の特殊学校が集中している。

現代のインドネシアにおける障害者の生活を理解する一助として、以下では、教育、リハビリテーション関連の情報を整理する。なお、以下は、先行研究などの各種文献から情報を得るとともに、筆者が2006年7月～2014年3月に、学校・施設の見学や障害者、特殊教育を専門とする大学教員、特殊学校教職員に聞き取りを行い得られた情報も含む。情報を整理するにあたり、本研究では、教育における障害種別である、『視覚障害者』『聴覚障害者』『知的障害者』『運動障害者』の4障害に関する、情報を整理した。

視覚障害者の教育・生活について、石崎（2004）は、ジャカルタ、バンドゥン、スラバヤの3都市における視覚障害特殊学校を訪問し、視覚障害特殊学校の教育の実態を報告している。それによると、近隣の道路整備はあまりなされておらず、自立活動における歩行訓練にあたっては、日本と同様の方法では行えないこと、中学部から職業教育が始まり、内容としては電話交換手、タイピストの養成であったこと、職業教育のニーズとしてあんま・マッサージ・鍼灸の教育実施が挙げられたことが報告されている。また、最も大きな問題としては教員の質の向上が挙げられ、そのほかにも、教科教育の充実、早期教育の実施、視力測定・視野測定の実施、職業教育『あんま・マッサージ』の新設、コンピュータや点字プリンタといった教材の充実、寄宿舎の設置も課題として挙げられた。

アジア医療按摩指導者ネットワークによると、職業教育に関して、リハビリテーションの分野では、1933年に日本人によって日本式指圧が、1959年にドイツ人によりドイツ式スポーツマッサージがインドネシアに紹介され、これら2つの方法がその後ジャワ島のリ

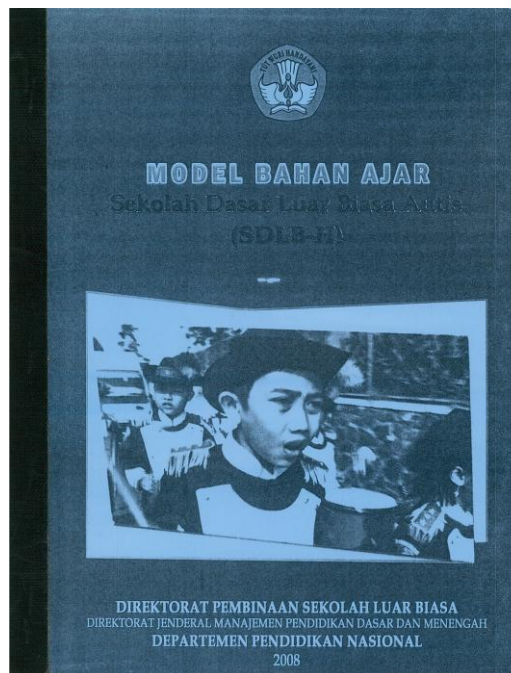


Fig.2 自閉症児教育の指導要領

ハビリテーションセンターの訓練にとりいれられている。訓練後は、ジャカルタやバンドゥンといった大都市や、バリ島をはじめとする観光地で開業するケースが一般的である。

また、2014年3月に、筆者はジャカルタ郊外の視覚障害特殊学校を訪問した。ジャカルタの中心地からは車で2時間ほど移動したところにあり、あんま・マッサージを学ぶことのできる職業訓練施設兼診療所、寄宿舎を併設しており、職業訓練施設には、かつてJICAから指導員が派遣されていた。校内の設備として、音楽室、コンピュータ室を見学した。音楽室にはギターやキーボードといった現代楽器に加え、アングルン（竹を組み合わせた楽器）というジャワ島の伝統楽器も置かれており、児童生徒はグループで定期的に演奏の練習をしていた。また、コンピュータ室には点字プリンタも設置されており、学生は自由にそれらを利用することができる。見学当日は、全学年による歩行訓練が行われており、児童生徒は各々白杖をもち、学校の周囲を全員で一周するという活動をしていた。その際、教員は見守るのみであり、歩行の際に指示出しは行われていなかった。また、この視覚障害特殊学校の卒業生の中には、ジャカルタ市内の大学に進学する者も数名いるとのことであった。

視覚障害者に限らず、インドネシアにおいては、障害のある学生が大学に進学する場合、インドネシア教育大学をはじめとして、主に特殊教育学科をもつ大学に進学している。2010年6月、2013年12月、2014年3月に、筆者は視覚障害者を受け入れる国立大学2校を訪れ、視覚障害学生支援の状況を、支援室の見学、大学教員および視覚障害学生へのインタビューを行い調査した。結果として、2つの大学に共通している点は、視覚障害学生の正確な人数は把握していなかったものの、少なくとも10名以上の視覚障害学生が在籍していること、日本財団からパソコンや点字プリンタの提供を受け、視覚障害学生支援室を設置していたこと、いずれの学生も就職先としては、地元の視覚障害特殊学校を希望していることが挙げられる。A校とB校のそれぞれの特徴的な点としては、A校では視覚障害の大学教員が障害学生支援を担当しており、学内のバリアフリー施設、設備の拡充を推進していたこと、B校の学生は2010年時点では点字とパソコンを併用し勉強をしていたが、2014年時点ではインタビューに協力した13名の学生全員が、授業担当教員からパワーポイントデータを受け取りパソコンの音声読み上げソフトで内容を理解するという方法で授業に参加していた点が挙げられる。(Table 5 参照)

Table 5 視覚障害学生が在籍する大学の状況

	A 大学	B 大学
1. 訪問時期	2013 年 12 月	2010 年 6 月 2014 年 3 月
2. 地域	バンドゥン	ジャカルタ
3. 視覚障害学生の数	50 名以上	不明
4. インタビューに協力した視覚障害学生の数	1 名	13 名
5. 視覚障害学生支援室	あり（日本財団からのパソコン、点字プリンタ提供）	あり（日本財団からパソコン、点字プリンタ提供）
6. 人的支援	学生ボランティア（組織化されているわけではなく、個人的な支援） 支援担当教員配置（視覚障害教員）	学生ボランティア（組織化されているわけではなく、個人的な支援）
7. 学習ツール	点字およびパソコン	点字およびパソコン パソコン（教員のパワーポイントデータを音声で読み上げる）
8. 就職希望先	視覚障害特殊学校教員	視覚障害特殊学校教員

※1. ～4. は大学教員からの聞き取りおよび学内見学、5. ～8. は、視覚障害学生へのインタビュー調査による

聴覚障害者の教育および生活について、インドネシア人聴覚障害者であるスクマラ（2003）は、インドネシアにおいては聴覚障害者であることが知られることは恥ずかしいという認識がある点を問題点として挙げ、日本でダスキンの研修を受けた経験を活かし、帰国後に聴覚障害者支援グループを立ちあげた経験を述べている。スクマラの指摘した、「聴覚障害者であることは恥ずかしい」という意識は、他の文献からもみられる指摘である（大部，2011；大竹，2004）。

インドネシアにおいて聴覚障害児は、教育の障害種別上で最も就学者数が多い（Table 1）。インドネシアにおいては聴覚障害の原因のひとつである真珠腫性中耳炎が近隣の国々よりも多いこと、耳鼻咽喉科医師が不足しているということが報告されており（村上，1999）、こうした要因が当該国の聴覚障害者を増加させている可能性がある。

大竹（2004）は、ジャワ島の都市ジャカルタ、バンドゥン、スラバヤにある聴覚障害特殊学校を訪問し、聴覚障害児教育の状況を当学校の見学と教員に対する聞き取りにより明らかにしている。結果として、ジャカルタの SLB Santi rama 聴覚障害特殊学校においては、平均聴力レベルを測り、補聴器装用を義務付け、発音指導に力を入れるなどの聴覚活用を行っていること、また洋裁や印刷といった職業教育に力を入れていることが明らかとなった。しかし、そのほかの聴覚障害特殊学校においては、在籍児童生徒のなかで補聴器を使用している者はみられず、その理由として経済的問題とあわせて、補聴器の装用を「恥ずかしい」と感じる事が挙げられた。訪問した学校は、聴力レベルは比較的高く、口話によるコミュニケーションが可能であった。以上のことから、①早期教育拡充、②補聴器装用に係る費用と意識、③発音、言語指導のための教員研修、④教科教育および読み書き教育の充実、⑤教員の聴覚障害児教育に対する専門性の向上、といった課題が挙げられている。

筆者は、2010年にジャカルタの学校2校（主に聴覚口話法による学校1校、トータルコミュニケーションの考えによる学校1校）、バンジャルマシ（Banjarmasin ボルネオ島の都市）の学校1校の、聴覚障害特殊学校3校を訪問し、大竹（2004）の研究に示された、教育・コミュニケーション状況と課題の追跡調査を行った。結果として、聴覚口話法に基づく学校は、補聴器の装用を学内で義務付け、医師により聴覚障害の単一障害であるという診断を受けた者のみを入学対象とし、発音や聴覚の活用に力を入れていた。また、補聴器会社と提携し、定期的に学内で補聴器フィッティングを行うほか、補聴器の購入に関しては、補助金の制度を設けていた。トータルコミュニケーションの考えに基づく学校

では、補聴器を装用している児童生徒とそうでない生徒が共に学んでおり、生徒の一部は、国民教育省が編纂した『インドネシア語対応手話システム辞典』を活用しながら、インドネシア語対応手話を使用していた。また、バンジャルマシンの聴覚障害特殊学校でも、トータルコミュニケーションの考えをとり入れており、児童生徒は手話と口話を併用して互いにコミュニケーションをとっていた。トータルコミュニケーションを行う学校 2 校に関しては、補聴器装用は任意であるが、実際に補聴器を持っている児童生徒は学校全体としてわずか 2, 3 名ずつしかみられなかった。教員に対するインタビューで補聴器を装用する児童生徒が少ない理由を尋ねたところ、2 校とも、補聴器会社との提携はあるが、補聴器購入後に誤って壊してしまうことや、電池やフィッティングに必要なランニングコストが支払えないために、補聴器を使用しない児童生徒は多いとのことであった。また、バンジャルマシンでは、補聴器会社は製品を他の島から輸送しているためジャワ島で購入するよりも高価となること、伝統的な呪術が聴覚障害を治すという考え方により聴覚障害児が特殊学校に進学しない場合があることが明らかとなった。進学や就学に関して、聴覚口話法に基づく学校では、進学と就職の比率は半々であるが、トータルコミュニケーションの考え方に基づいて教育を行う学校に関しては、高等部卒業後に進学する生徒は稀であった。就職先としては、会社の総務係、家業の手伝い、屋台主として働くとのことであった。

このように、大竹（2004）の調査の追跡調査により、補聴器の装用の問題に関して、費用の側面は学校と補聴器会社が連携して安価で補聴器を児童生徒に提供する仕組みをつくることで解決しようとしていることが明らかとなった。他方、補聴器を「恥ずかしい」と思い使用しないという意識の問題がその後も存在し続けていることや、聴覚障害児に対する学校教育を妨げる要因として新たに文化的な認識の問題がみとめられた。補聴器装用有無の現状に伴い、コミュニケーション手段の一つとして手話が使用されていた。インドネシアでは、国民教育省初等中等教育局が『インドネシア語対応手話システム辞典』を開発し、毎年改訂している。インドネシア語対応手話は、1978年にアメリカ手話(American sign language)をインドネシア語にあてはめる形で、教育の場での活用が始まった。この辞典の中で、初等中等教育局の見解としては、児童生徒が将来的に社会参加を果たすためには聴覚口話法によるコミュニケーションが理想とされるが、聴覚口話による指導を専門とする教員がほとんどいないことから、手話を活用するトータルコミュニケーションは現実的なコミュニケーションの手段であることが示されている。

次に、インドネシアにおける知的障害者の教育および生活について、北村（2004）は、2003年にジャカルタ、バンドゥン、スラバヤの3都市において、知的障害児の就学している学校を訪問し、①知的障害を伴う幼児、児童、生徒は、言葉によるコミュニケーションが良好な非常に軽度の障害であること、②施設が狭く、設備が老朽化しており、教材や教具が少なく、限られていること、③指導方法が一斉指導の座学中心で、指示的かつ説明的であることを報告書の中で指摘している。

Komardjaja（2005）は、バンドゥンの知的障害特殊学校の児童生徒の数や、立地の状況を概観し、特殊学校を『障害者の居場所』と表現している。社会的スティグマによる生きづらさから、西欧における“脱施設化”の概念はインドネシアには合わず、金銭的にある程度余裕のある家庭の障害者が特殊学校卒業後に特殊学校に居場所を求めて職業訓練コースに戻る様子を伝えている。筆者は、2006年にバンドゥンの知的障害特殊学校を訪れ、当学校の見学および教員へのインタビューを実施した。幼稚部から高等部、高等部卒業後に参加可能な職業訓練コースが設けられており、また敷地内に寄宿舎もあるため、遠方の児童生徒も入学していた。児童生徒の中には、長期休みになっても帰省しない者や、身寄りのない者もいた。職業訓練コースには年限が定められておらず、Komardjaja（2005）の報告した状況と同じく、年齢を重ねても在籍している生徒がみられた。また、卒業生の1名は、学校の掃除係として就職していた。

最後に、運動障害者に対する教育と生活について述べる。インドネシアにおける障害者を対象としたリハビリテーションは、第二次世界大戦が終結しインドネシアが独立した直後の1946年、中央ジャワのソロにおいて、スハルソ医学博士によって独立戦争の傷痍軍人を対象としてはじめられ、その後一般の身体障害者にも普及した（Soeharso, 1983）。開発途上国における有効なリハビリテーションの戦略として、1980年代から地域社会に根ざしたリハビリテーション（Community-based Rehabilitation、以下 CBR）が世界約100か国で実践されるようになった。インドネシアの中央ジャワにおける CBR は、1994年に非政府組織である CBR 開発訓練センター（Community-based Rehabilitation Development and Training Centre、以下 CBRDTC）の支援を受けて実施されたことから世界的に注目された事例である。久野（1996）は、CBR 開発訓練センターにおいてポリオによる障害のある女性が職員として CBR に取り組む様子を取りあげ、CBR の目標は「障害者がいきいき生きる社会」の実現であることを指摘している。しかし、CBRDTC が1998年に介入を終了すると、CBR 活動は徐々に衰退し、一部活動を除いて停止してしまう。そ

の要因としては、①CBR 委員会の運営困難、②地域社会の資源不足、③CBRDTC の介入方法、④経済危機の影響、が挙げられている（大澤，2007）。

教育の分野では、Table 1 に示した通り、インドネシアにおいては、運動障害のみを対象とした特殊学校は全国で 11 校と地理や人口を考慮すると非常に少ない状況である。実態として運動障害者は、リハビリテーションを受けながら、通常学校に通うケースも存在する（Soeharso, 1083）。佐藤（2004）は、2003 年にジャカルタおよびスラバヤの運動障害特殊学校を訪問し、①運動障害教育を受ける児童生徒の障害の程度は自力移動が可能な軽度の障害児であること、②教育上の課題として、日本の「通常学校に準ずる教育」の指導方法や進路指導がある、という 2 点を指摘している。

運動障害のあるインドネシア人であるサイダ（2003）は、当事者の立場から、障害を恥だとする、障害者に対する人々の理解の低さから、障害者を家の外に出さないという問題を指摘し、また日本への渡航経験から 2 国間を比較し、インドネシアにはバリアフリーに関係する法律がなく、建物や街のバリアが改善されないことを指摘している。

第3章 本研究の目的

1 本研究の目的

これまでに述べた通り、インドネシアにおいては障害者の社会参加に向けて、教育および福祉の分野を中心としてハード面、ソフト面でのサービス拡充が進められてきた中で、障害者イメージが障害者の社会参加を阻む要因として問題視されており、これらの問題に対して、新聞やテレビといったメディアを利用した障害者啓発活動が行われてきた

そもそも、インドネシアにおける障害児・者の教育・社会参加を阻む要因は障害者イメージに係る問題のみならず、複数存在する。例えば 1990 年代においては、障害児の教育参加に対して、次の 5 つの課題が挙げられていた (Semiawan, 1994)。

- ① 特殊教育の存在そのものが一般に周知されていないこと。
- ② 障害児に対する偏見。公共の場や他者、またインクルーシブ教育を念頭に置いた場合には他児からも、当事者を無視する態度がみられること。
- ③ 教育に係る資源の不足。資金不足はもちろん、例えば、知能検査を実施可能な心理職をはじめ、障害者を発見することのできる専門職の不足もみられること。
- ④ 障害児の実態に照らしたカリキュラム整備の必要性。
- ⑤ インクルーシブ教育からつながる障害者の社会参加の機会獲得。

第 1 章、第 2 章で述べてきたとおり、これらの問題に対して、複数の障害種別を対象とした特殊学校の増加、学校単位による補聴器装用のための奨学金支援、2006 年度以降の特殊教育カリキュラムの改訂など、様々な対策が講じられてきた。冒頭の障害者イメージに関する問題と、それに対する啓発活動も、インドネシアにおける障害児・者の教育参加に対する対策の一部であるが、先述の通り、問題解決には至っていないのが現状である。

障害者イメージの研究においては、言語による人物表象からイメージの内容、構造、対象への適用に影響する要因の研究がなされてきているが、分析的認知や包括的認知にみられる地域による人物表象の違いを考慮すると、インドネシアにおける障害者イメージの抑制や解消を目指すにあたっては、当該国をフィールドとした知見が必要となるであろう。また、イメージの適用に対しては、カテゴリー化をはじめとする方策が検討されており、インドネシアにおけるこれらの方策の活用を最終的には検討し、障害者啓発活動に対する具体的な示唆を得ることが重要である。本研究は、インドネシアにおける障害者イメージに起因する社会参加の阻害という問題を解決するために行われる。本研究の遂行により、インドネシアにおける障害者イメージによる偏見や差別を軽減ないしは解消する基礎的示

唆を得ることで、将来的には、インドネシア人の社会的文脈に合わせた障害者啓発活動の計画、実施に寄与することを目指す。

そこで本研究では、インドネシアにおける障害者イメージの様相を明らかにすることを目的とする。具体的には、インドネシアの大学生が抱くイメージの内容と構造を明らかにし、その障害者イメージの適用に対して影響する要因として、マルチメディアを含む情報源を検討した。

各研究の細部は以下のとおりである。

インドネシアにおける障害者イメージの内容：インドネシアにおける障害者イメージに対する言語表現を検討し、障害者イメージの内容を明らかにする。(第 1 研究；第 4 章)

インドネシアにおける障害者イメージの構造：インドネシアにおける障害者イメージがどのような構造を有しているのかを、統計的手法により明らかにする。(第 2 研究；第 5 章)

インドネシアにおける障害者イメージの適用：インドネシアの障害のある個人に対する障害者イメージの適用に情報源がどのような影響を与えるのかについて検討する。(第 3 研究；第 6 章)

なお、本研究の対象者は、インドネシア共和国ジャワ島内の大学に在籍する大学生とする。ジャワ島は全人口の 6 割を有していること、インドネシアの大学生は社会における様々な分野の現状に関心をもっており (今中, 2000)、また将来的にインドネシア社会を牽引する中心的存在となりうる集団であると考えられるためである。

また、本研究は、インドネシア人大学教員をはじめ、多数のインドネシア人の協力を受けて行われる。本研究では言語の翻訳のみならず、文化が人物の認知や行動に影響を与える点を考慮のうえ、質問紙構成や分析においても、筆者一人ではなく、インドネシアの文化文脈を理解できるインドネシア人の協力者を得ることで、当該国に将来的に役立つな知見を得るよう留意する。同時に、本研究を行うインドネシアは、日本と比較すると、先行研究において使用された IAT で用いるようなモニターをはじめ、電化製品を含む施設設備を準備することや、安定した電力の使用が困難な状況である。そのため、本研究では質問紙調査や聞き取りといった、実現可能な研究手法を用いることとする。

2 本研究における用語の定義

本研究においては、下記の通り用語を定義することとした。

偏見：特定の個人や社会集団に対する非好意的な態度であり、感情的な意味合いが強い。

事実に基づかずに形成されていることもある（上野，1994）。

イメージ：これまでも述べてきたとおり、スキーマ、ステレオタイプ、偏見、スティグマ、差別を包括した概念として本研究では位置づけ、「対象に対する既存の表象」とする。社会心理学分野では「スキーマ」という言葉もイメージと同じ意味で扱われることがある（澤江・齊藤，2010；大久保・金崎・藤木・糸山，1996）。しかし、本研究においては、スキーマという認知的枠組みに見出されるような認知的節約の機能については扱わないため、本研究で明らかにする、障害者に対して想起される表象はイメージと呼ぶこととする。

スキーマ：概念や刺激のタイプについての体系化された既存概念である（Fiske & Taylor, 1991）。スキーマは、過去の経験や外部環境などにより形成され、対象への認知的節約に役立てられる。また関連情報などにより意識されることで適用され、それが対象についての判断、行動、予測などの様々な認知処理に影響を及ぼすとされる（坂元，2004）。

ステレオタイプ：役割スキーマの一種と位置付けられているが、集団内で共有された認識、実態を確実に捉えていない認識、集団の属性を区別するための認識といった様々な定義がなされている（Stroebe, & Insko, 1989；Vinacke, 1957；Allport, 1954）。これらの諸定義は、共有された認識（consensual beliefs）が人の行動に影響を及ぼすという点で見解の一致がみられており（Gardner, 1994）、本研究においては「共有された固定的スキーマ」と定義した。

態度：人が自分自身や他者、事物、あるいは社会問題に対して抱く一般的評価という定義が存在する（Petty & Cacioppo, 1986）。

3 倫理的配慮

本研究で質問紙調査を行うにあたり、質問紙の1枚目に研究に関する説明文書を添付し、口頭でも内容を説明し、質問紙の回収をもって同意が得られたものとした。なお、本研究は筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会において承認を受けて実施した（承認通知日 2010年1月22日、21-328）

本論

第4章 インドネシアの大学生における障害者イメージの内容（第1研究）

1 目的

インドネシアの障害者イメージの中に障害者の社会参加を妨げるものが存在することは序章で述べた。しかしその偏見となっているイメージも含め、インドネシア社会において、障害者に対して持たれているイメージの全容がどのような内容であるかについては、これまでの研究では明らかにされていない。

そこでまず、本研究では、イメージ連想テスト（河内，2001）を用いて、障害者に対するイメージの表現語を検討し、インドネシアの障害者イメージの内容を明らかにすることを目的とした。

2 方法

ジャワ島にある3つの総合大学の学生、合計244名に、各大学の教員を通じて質問紙への回答を依頼した。3大学はいずれも、インドネシア全土から学生を受け入れている国立大学である。また、いずれの大学においても障害学生の受け入れの実績はあるものの、障害学生に関する統計はなく、正確な人数、受け入れている学生の障害種別は明らかにならなかった。なお、本研究の対象者の中には、障害学生は含まれなかった。

手続きとして、3大学において自由記述によるイメージ連想テストを含む質問紙を配布し、記入次第担当者に質問紙を提出するという留め置き形式で調査を行った。

質問紙は、フェースシートとイメージ連想テストにより構成された。

フェースシートでは、性別、年齢、専攻、障害者との接触経験（家族の障害者の有無、障害のある友人の有無、障害者と会って話した経験の有無、障害者と関わるボランティア経験の有無）、障害者に関する情報を間接的に得た経験の有無について尋ねた。

視覚障害者および聴覚障害者イメージを男女で比較した研究によると、男性よりも女性の方が障害者に対するイメージが肯定的内容となっており（河内，2001）、インドネシアにおいても性差が障害者イメージに影響を与えている可能性が考えられる。

障害者との接触経験に関して焦点化した障害者イメージに関する研究では、健常者が障害者に一方的に援助する関係の接触は、障害者に対する認知を歪めるイメージの形成や強化に結び付く可能性があること（上瀬，2001）、障害者イメージの解消には、障害者と健常者が対等な立場で協同活動をするとともに、その活動を強く支える制度や体制が必要であることが指摘されている（上瀬，2002）。そのため、対象者と障害者との人間関係と接

触経験内容の違いを考慮し、接触経験として、家族の障害者の有無、障がいのある友人の有無、障害者と会って話した経験の有無、障害者と関わるボランティア経験の有無、の4項目を設定した。

イメージ連想テスト（河内，2001）では、「視覚障害者（orang tunanetra）」、「聴覚障害者（orang tunarungu）」、「知的障害者（orang tunagrahita / disabilitas intelektual）」、「運動障害者（orang tunadaksa / disabilitas motor）」という言葉でイメージ刺激を提示し、その刺激に対するイメージを動詞または形容詞で記述するように求めた。

なお、インドネシア語においては、視覚障害者を表現する語として“orang buta（盲）”、聴覚障害者を表現する語として“orang tuli（ろう）”、“orang bisu（啞）”という言葉も存在する。これらの表現について、日本語検定1級を有するインドネシア人2名に確認したところ、上記の orang tunanetra および orang tunarungu が行政用語かつ一般的な用語であり、buta、tuli、bisu は、現代においては相対的にはあまり使われない言葉であったため、先述の語を採用した。

3 分析

筆者及びインドネシア人5名の計6名により、得られた語（以下、表現語）の意味内容の類似性に基づき分類した。

なお、この5名はいずれもインドネシア人の留学生であり、うち2名は日本語検定1級を所持している。分類に際して、意見が分かれた場合には、その場で議論し、意味内容を確認したうえで、適切と判断された表現語に該当の語は含められた。

表現語を分類し、その出現頻度を集計して、各表現語の出現頻度の百分率を算出した。河内（2001）を参考に、4種の障害者イメージの内容について、出現頻度5%以上の表現語をとりあげ、10%以上の表現語を中心に考察した。

4 結果

フェースシート未記入による無効回答（14名）を除き、有効回答数は合計230名（男性83名、女性147名）となった。有効回答者の平均年齢は20.2歳であった。この平均年齢は、インドネシアの現役大学生の2～3年生に相当する。

質問紙の有効回答者230名全員が障害者に関する情報を何らかの情報源から得ており、そのうち113名（男性43名、女性70名）は障害者との接触経験を得ていた。接触した障

害者の障害種別については、4種の障害種別に加え、その他の障害者として、自閉症、言語障害が挙げられた。本研究ではこれらの属性から有効回答者を次の4群に分類した；①男性・接触経験有（以下、男・接触有）、②男性・接触経験無（以下、男・接触無）、③女性・接触経験有（以下、女・接触有）、④女性・接触経験無（以下、女・接触無）。

有効回答者のイメージ連想テスト結果から、障害種別のイメージ表現語は3,132語が得られた。インドネシア人である5名の協力者と筆者により、得られた語を意味内容の類似性に基づいて分類したところ、37種の表現語群に分けられた。さらに、表現語群の意味内容の類似性により分類したところ、「障害者の具体的特徴」、「性格」、「対人上生じる状態」と3つのカテゴリーに大別された。

次に、障害種別のイメージ内容の結果を述べる。

1) 視覚障害者イメージの内容

視覚障害者イメージは、26種の表現語群で表された（Table 6）。4群に共通して出現頻度が5%を超えたのは、『視覚障害のある』（男・接触有；男・接触無；女・接触有；女・接触無の順に、8.24%；15.91%；20.64%；14%）、『補助具を使う』（5.49%；8.33%；11.92%；8.8%）、『良い』（17.03%；9.85%；7.27%；9.6%）、『アクティブな』（6.59%；15.15%；6.98%；7.2%）、『劣等感の』（7.69%；6.06%；7.28%；12%）、『敏感な』（14.29%；

12.12%；12.21%；16.80%）であった。そのほか、男・接触無群を除く3群において『社交的でない』（11.54%；3.79%；8.43%；8.4%）、男・接触無群と女・接触有群において『利己的な』（4.95%；7.58%；6.69%；3.6%）が5%を超える頻度を示した。

全群共通で出現頻度が10%以上となったのは、『敏感な』であった。そのほか、『視覚障害のある』は男・接触有群以外の3群で、『良い』『社交的でない』は男・接触有群で、『アクティブな』は男・接触無群で、『補助具を使う』は女・接触有群で、『劣等感の』は女・接触無群で、10%以上の出現頻度となった。

各表現語群の出現頻度をTable 7に示した。

Table 6 視覚障害者イメージの内容

表現語群 (インドネシア語)	その他の語 (インドネシア語)
視覚障害のある tidak bisa melihat	全盲の buta 弱視の ada kesulitan lihat
補助具を使う menggunakan alat bantu	白杖を使う menggunakan tongkat putih 点字を使う menggunakan braille 眼鏡を使う menggunakan kacamata
第六感のある ada indera keenam	
歩くのが難しい susah berjalan	
遅い lambat	
良い baik (bagus)	良心的な baik hati 道徳的な akhlak 親しみやすい mudah berteman
アクティブな aktif	エネルギーが豊富な semangat
我慢強い sabar	
自信のある percaya diri	
丁寧な harus	
質素な sederhana	
劣等感の minder	受け身の pasif
社交的でない jarang bergaul	
利己的な egois	感情的な emosional 他人に依存する bergantung pada orang lain 甘えている manja
敏感な sensitive	傷つきやすい mudah tersinggung
自立した mandiri	
賢い pintar	上手な pandai
美しい cantik	ハンサムな ganteng
特別な special	
強い kuat	
変な aneh	自分だけの世界を持っている mempunyai dunia sendiri
かわいそうな kasihan	
鈍感な tidak tajam	
話すのが難しい susah berbicara	
よく喋る sering berbicara	
疑う curiga	

Table 7 視覚障害者イメージの表現語群ごとの出現頻度

表現語群	男・接触有		男・接触無		女・接触有		女・接触無		
	N	%	N	%	N	%	N	%	
的障害者の 特徴 の 具体	視覚障害のある	15	8.24	21	15.91	71	20.64	35	14
	補助具を使う	10	5.49	11	8.33	41	11.92	22	8.8
	第六感	7	3.85	2	1.52	6	1.74	6	2.4
	歩くのが難しい	0	0	0	0	3	0.87	2	0.8
	遅い	3	1.65	2	1.52	4	1.16	0	0
	小計	35	19.23	36	27.27	125	36.34	65	26
性格	良い	31	17.03	13	9.85	25	7.27	24	9.6
	アクティブな	12	6.59	20	15.15	24	6.98	18	7.2
	我慢強い	5	2.75	5	3.79	4	1.16	12	4.8
	自信のある	1	0.55	3	2.27	2	0.58	0	0
	丁寧な	0	0	0	0	1	0.29	1	0.4
	質素な	0	0	0	0	1	0.29	1	0.4
	劣等感の	14	7.69	8	6.06	25	7.28	30	12
	社交的でない	21	11.54	5	3.79	29	8.43	21	8.4
	利己的な	9	4.95	10	7.58	23	6.69	9	3.6
	小計	93	51.10	64	48.48	134	38.95	116	46.4
対人上 生じる 状態	敏感な	26	14.29	16	12.12	42	12.21	42	16.8
	自立した	6	3.30	5	3.79	15	4.36	8	3.2
	賢い	7	3.85	5	3.79	13	3.78	8	3.2
	美しい	6	3.30	0	0	0	0	0	0
	特別な	2	1.10	0	0	4	1.16	2	0.8
	強い	1	0.55	0	0	1	0.29	0	0
	変な	1	0.55	1	0.76	2	0.58	2	0.8
	かわいそうな	0	0	2	1.52	0	0	0	0
	鈍感な	2	1.10	2	1.52	2	0.58	2	0.8
	話すのが難しい	3	1.65	0	0	5	1.45	3	1.2
	よく喋る	0	0	1	0.76	0	0	2	0.8
	疑う	0	0	0	0	1	0.29	0	0
	小計	54	29.67	32	24.24	85	24.71	69	27.6
総計	182	100	132	100	344	100	250	100	

※網掛けは5%以上、太字は10%以上の表現語

2) 聴覚障害者イメージの内容

聴覚障害者イメージは 28 種の表現語群で表された (Table 8)。4 群に共通して出現頻度が 5%を超えたのは、『聴覚障害のある』(7.97% ; 13.86% ; 17.55% ; 14.88%)、『良い』(18.12% ; 11.88% ; 5.02% ; 15.81%)、『劣等感の』(7.97% ; 6.93% ; 6.27% ; 10.23%)、『敏感な』(8.70% ; 11.88% ; 7.21% ; 6.98%)、『話すのが難しい』(7.97% ; 10.89% ; 11.91% ; 13.02%) であった。そのほか、男・接触無群以外の 3 群で『社交的でない』(12.32% ; 3.96% ; 10.03% ; 9.30%)、男・接触有群以外の 3 群で『手話を使う』(3.62% ; 6.93% ; 7.52% ; 6.98%)、『アクティブな』では男子学生群において (7.97% ; 10.89% ; 4.08% ; 4.19%)、男女ともに接触有群では『利己的な』(7.97% ; 4.95% ; 9.40% ; 3.26%) に 5%以上の頻度がみられた。また、男・接触有群においては『変な』(5.07%) が 5%以上の出現頻度を示した。

全群共通で出現頻度が 10%以上となった表現語群はみられなかった。『聴覚障害のある』『話すのが難しい』は男・接触有群以外の 3 群で、『良い』は女・接触有群以外の 3 群において、『社交的でない』は男女ともに接触有群において、出現頻度 10%以上となった。また、『アクティブな』は男・接触無群で、『劣等感の』は女・接触無群で、10%以上の出現頻度となった。

各表現語群の出現頻度を Table 9 に示した。

Table 8 聴覚障害者イメージの内容

表現語群 (インドネシア語)	その他の後 (インドネシア語)
聴覚障害のある tidak bisa mendengar	ろうの tuli 啞 bisu
補助具を使う menggunakan alat bantu	補聴器を使う menggunakan alat bantu dengar
第六感のある ada indera keenam	感の鋭い insting kuat
歩くのが難しい susah berjalan	
遅い lambat	
良い baik (bagus)	道徳的な akhlak 寛容な lapang dada 正直な jujur
アクティブな aktif	エネルギーッシュな semangat あきらめない pantang menyerah
我慢強い sabar	
自信のある percaya diri	
質素な sederhana	
劣等感の minder	あきらめやすい mudah menyerah
社交的でない jarang bergaul	
利己的な egois	感情的な emosian 他人に依存する bergantung pada orang lain
敏感な sensitive	傷つきやすい mudah tersinggung
自立した mandiri	
賢い pintar	上手な pandai
美しい caitik	ハンサムな gantem
特別な special	
強い kuat	
変な aneh	自分だけの世界を持っている mempunyai dunia sendiri
鈍感な tidak tajam	
話すのが難しい susah berbicara	
よく喋る mudah berbicara	
手話を使う berbahasa isyarat	
疑う curiga	
有名な terkenal	
ユニークな unik	
きちんとした teliti	

Table 9 聴覚障害者イメージの表現語群ごとの出現頻度

表現語群	男・接触有		男・接触無		女・接触有		女・接触無		
	N	%	N	%	N	%	N	%	
具体的特徴	聴覚障害のある	11	7.97	14	13.86	56	17.55	32	14.88
	補助具を使う	0	0	3	2.97	18	5.64	9	4.19
	第六感のある	0	0	0	0	3	0.94	0	0
	歩くのが難しい	0	0	0	0	1	0.31	0	0
	遅い	1	0.72	0	0	1	0.31	2	0.93
	小計	12	8.70	17	16.83	79	24.76	43	20
性格	良い	25	18.12	12	11.88	16	5.02	34	15.81
	アクティブな	11	7.97	11	10.89	13	4.08	9	4.19
	我慢強い	2	1.45	4	3.96	4	1.25	6	2.79
	自信のある	0	0	3	2.97	0	0	0	0
	質素な	0	0	0	0	0	0	1	0.47
	劣等感の	11	7.97	7	6.93	20	6.27	22	10.23
	社交的でない	17	12.32	4	3.96	32	10.03	20	9.30
	利己的な	11	7.97	5	4.95	30	9.40	7	3.26
	小計	77	55.80	46	45.54	115	36.05	99	46.05
	対人上生じる状態	敏感な	12	8.70	12	11.88	23	7.21	15
自立した		1	0.72	1	0.99	9	2.82	2	0.93
賢い		4	2.90	5	4.95	6	1.88	4	1.86
美しい		4	2.90	0	0	6	1.88	0	0
特別な		1	0.72	0	0	4	1.25	0	0
強い		0	0	0	0	1	0.31	0	0
変な		7	5.07	0	0	4	1.25	3	1.40
鈍感な		2	1.45	0	0	4	1.25	0	0
話すのが難しい		11	7.97	11	10.89	38	11.91	28	13.02
よく喋る		2	1.45	2	1.98	2	0.63	2	0.93
手話を使う		5	3.62	7	6.93	24	7.52	15	6.98
疑う		0	0	0	0	1	0.31	0	0
有名な		0	0	0	0	0	0	1	0.47
ユニークな		0	0	0	0	3	0.94	1	0.47
きちんとした		0	0	0	0	0	0	2	0.93
小計		49	35.51	38	37.62	125	39.18	73	33.95
総計	138	100	101	100	319	100	215	100	

※網掛けは5%以上、太字は10%以上の表現語

3) 知的障害者イメージの内容

知的障害者イメージは 30 種の表現語群で表された (Table 10)。4 群に共通して出現頻度が 5%を超えたのは、『知的障害のある』(9.74% ; 10.00% ; 23.1% ; 12.38%)、『社交的でない』(9.09% ; 6.00% ; 10.56% ; 13.81%)、『利己的な』(22.07% ; 19.00% ; 23.76% ; 25.71%)、であった。そのほか、女・接触有群以外の 3 群で『アクティブな』(6.49% ; 8.00% ; 3.63% ; 6.66%)、『劣等感の』(9.09% ; 8.00% ; 4.62% ; 7.61%)、『変な』(5.84% ; 6.00% ; 2.97% ; 6.19%) が、女・接触無群以外の 3 群で『良い』(9.74% ; 6.00% ; 7.26% ; 4.76%) が 5%以上の出現頻度を示した。また、男女ともに接触無群では『話すのが難しい』(4.54% ; 11.00% ; 3.30% ; 5.23%) に、男・接触無群においては『敏感な』(5.00%)、『手話を使う』(7.00%) が 5%以上の出現頻度を示した。

『利己的な』は全群共通で出現頻度が 10%以上となった。『知的障害のある』は男・接触有群以外の 3 群で、『社交的でない』は女子学生の 2 群において、出現頻度 10%以上となった。また、『話すのが難しい』は男・接触無群で、10%以上の出現頻度となった。

各表現語群の出現頻度を Table 11 に示した。

Table 10 知的障害者イメージの内容

表現語群 (インドネシア語)	その他の語 (インドネシア語)
知的障害のある terbelakang mental	IQの低い IQnya rendah
補助具を使う menggunakan alat bantu	絵カードを使う menggunakan kartu gambar
第六感のある ada indera keenam	感の鋭い insting kuat
集中するのが難しい susah berkonsentrasi	
多動な hiperaktif	自閉症の autisme
歩くのが難しい susah berjalan	
顔が似ている mukanya mirip	
遅い lambat	
良い baik (bagus)	優しい penyayang 正直な jujur 道徳的な akhlak
アクティブな aktif	エネルギッシュな semangat 一生懸命の pekerja keras
我慢強い sabar	
自信のある percaya diri	
劣等感の minder	悲劇的な pesimis あきらめやすい mudah menyerah
社会的でない jarang bergaul	
利己的な egois	感情的な emosian 子どもっぽい kekanak-kanakan
敏感な sensitive	傷つきやすい mudah tersinggung
自立した mandiri	
賢い pintar	上手な pandai
美しい cantik	
特別な special	
強い kuat	
変な aneh	自分だけの世界をもっている mempunyai dunia sendiri
かわいそうな kasihan	
鈍感な tidak tajam	
話すのが難しい susah berbicara	
よく喋る mudah berbicara	
手話を使う berbahasa isyarat	
有名な terkenal	
ユニークな unik	
困っている bingung	

Table 11 知的障害者イメージの表現語群ごとの出現頻度

表現語群	男・接触有		男・接触無		女・接触有		女・接触無		
	N	%	N	%	N	%	N	%	
障害者の具体的特徴	知的障害のある	15	9.74	10	10.00	70	23.10	26	12.38
	補助具を使う	0	0	1	1.00	5	1.65	0	0
	第六感のある	0	0	0	0	1	0.33	0	0
	集中するのが難しい	4	2.59	1	1	2	0.66	1	0.47
	多動な	10	6.49	0	0	9	2.97	7	3.33
	歩くのが難しい	0	0	0	0	1	0.33	0	0
	顔が似ている	0	0	1	1	0	0	5	2.38
	遅い	1	0.64	0	0	2	0.66	1	0.47
	小計	30	19.48	13	13.00	90	29.70	40	19.04
性格	良い	15	9.74	6	6.00	22	7.26	10	4.76
	アクティブな	10	6.49	8	8.00	11	3.63	14	6.66
	我慢強い	0	0	1	1.00	0	0	3	1.42
	自信のある	0	0	1	1.00	1	0.33	1	0.47
	劣等感の	14	9.09	8	8.00	14	4.62	16	7.61
	社会的でない	14	9.09	6	6.00	32	10.56	29	13.81
	利己的な	34	22.07	19	19.00	72	23.76	54	25.71
	小計	87	56.49	49	49.00	152	50.16	127	60.47
	対人上生じる状態	敏感な	4	2.59	5	5.00	8	2.64	5
自立した		1	0.64	0	0	13	4.29	1	0.47
賢い		7	4.54	2	2.00	6	1.98	1	0.47
美しい		3	1.94	0	0	0	0	0	0
特別な		0	0	0	0	2	0.66	0	0
強い		0	0	0	0	1	0.33	0	0
変な		9	5.84	6	6.00	9	2.97	13	6.19
かわいそうな		0	0	1	1.00	0	0	1	0.47
鈍感な		5	3.24	2	2.00	8	2.64	9	4.28
話すのが難しい		7	4.54	11	11.00	10	3.3	11	5.23
よく喋る		1	0.64	2	2.00	0	0	1	0.47
手話を使う		0	0	7	7.00	0	0	0	0
有名な		0	0	0	0	0	0	1	0.47
ユニークな		0	0	0	0	4	1.32	0	0
困っている		0	0	2	2.00	0	0	0	0
小計		37	24.02	38	38.00	61	20.13	43	20.47
総計	154	100	100	100	303	100	210	100	

※網掛けは5%以上、太字は10%以上の表現語

4) 運動障害者イメージの内容

運動障害者イメージは 26 種の表現語群で表された (Table 12)。4 群に共通して出現頻度が 5%を超えたのは、『運動障害のある』(10.79% ; 14.94% ; 21.56% ; 12.57%)、『アクティブな』(12.95% ; 10.35% ; 6.71% ; 6.86%)、『劣等感の』(20.14% ; 17.24% ; 10.60% ; 24.57%)、『社交的でない』(8.63% ; 10.35% ; 7.42% ; 12.57%)、『利己的な』(11.51% ; 9.20% ; 13.07% ; 10.29%)であった。そのほか、女・接触有群以外の 3 群で『良い』(11.51% ; 8.05% ; 4.95% ; 10.86%) が 5%以上の出現頻度を示した。また、男・接触無群においては『自信のある』(5.75%)、女・接触有群においては『補助具を使う』(13.78%)、『自立した』(5.30%) が 5%以上の出現頻度を示した。

『運動障害のある』『劣等感の』は全群共通で出現頻度が 10%以上となった。『利己的な』は男・接触無群以外の 3 群で、『アクティブな』は男子学生 2 群において、『社交的でない』は男女ともに接触無群において出現頻度 10%以上となった。また、『良い』男・接触有群と女・接触無群で、『補助具を使う』は女・接触有群で、10%以上の出現頻度となった。

各表現語群の出現頻度を Table 13 に示した。

Table 12 運動障害者イメージの内容

表現語群 (インドネシア語)	その他の語 (インドネシア語)
運動障害のある fisiknya ada gangguan	手のない tidak ada tangan 足のない tidak ada kaki まひのある lumpuh
補助具を使う menggunakan alat bantu	車いすを使う menggunakan kursi roda 杖を使う menggunakan tongkat
第六感のある ada indera keenam	感の鋭い insting kuat
遅い lambat	
弱い lemah	
良い baik (bagus)	道徳的な akhlak 親しみやすい mudah berteman
アクティブな aktif	
我慢強い sabar	
自信のある percaya diri	
劣等感の minder	あきらめやすい mudah menyerah 受け身の pasif
社交的でない jarang bergaul	寡黙な pendiam 孤独な penyendiri
利己的な egois	感情的な emosian 子どもっぽい kekanak-kanakan
面白い lucu	ユーモアのある humoris
敏感な sensitive	感覚の鋭い tajam
自立した mandiri	
賢い pintar	上手な pandai 記憶力の良い daya ingat baik 創造的な kreatif
美しい cantik	ハンサムな ganten
特別な special	
強い kuat	
変な aneh	自分だけの世界をもつ mempunyai dunia sendiri
かわいそうな kasihan	
鈍感な tidak tajam	
話すのが難しい susah berbicara	
手話を使う berbahasa isyarat	
有名な terkenal	
ユニークな unik	

Table 13 運動障害者イメージの表現語群ごとの出現頻度

表現語群		男・接触有		男・接触無		女・接触有		女・接触無	
		N	%	N	%	N	%	N	%
具体的障害者の特徴	運動障害のある	15	10.79	13	14.94	61	21.56	22	12.57
	補助具を使う	4	2.88	2	2.30	39	13.78	5	2.86
	第六感のある	0	0	0	0	3	1.06	0	0
	遅い	3	2.16	1	1.15	3	1.06	5	2.86
	弱い	0	0	2	2.30	4	1.41	2	1.14
	小計	22	15.83	18	20.69	110	38.87	34	19.43
性格	良い	16	11.51	7	8.05	14	4.95	19	10.86
	アクティブな	18	12.95	9	10.35	19	6.71	12	6.86
	我慢強い	4	2.88	4	4.60	4	1.41	5	2.86
	自信のある	1	0.72	5	5.75	1	0.35	1	0.57
	劣等感の	28	20.14	15	17.24	30	10.60	43	24.57
	社交的でない	12	8.63	9	10.35	21	7.42	22	12.57
	利己的な	16	11.51	8	9.20	37	13.07	18	10.29
	面白い	0	0	0	0	1	0.35	0	0
	小計	95	68.35	57	65.52	127	44.88	120	68.57
対人上生じる状況	敏感な	4	2.88	2	2.30	9	3.18	7	4
	自立した	3	2.16	1	1.15	15	5.30	1	0.57
	賢い	4	2.88	3	3.45	8	2.83	3	1.71
	美しい	1	0.72	0	0	0	0	0	0
	特別な	0	0	0	0	3	1.06	0	0
	強い	0	0	0	0	1	0.35	0	0
	変な	2	1.44	1	1.15	3	1.06	5	2.86
	かわいそうな	0	0	1	1.15	0	0	0	0
	鈍感な	4	2.88	1	1.15	2	0.71	2	1.14
	話すのが難しい	4	2.88	2	2.30	2	0.71	2	1.14
	手話を使う	0	0	1	1.15	0	0	0	0
	有名な	0	0	0	0	0	0	1	0.57
	ユニークな	0	0	0	0	3	1.06	0	0
	小計	22	15.83	12	13.79	46	16.25	21	12
総計	139	100	87	100	283	100	175	100	

※網掛けは5%以上、太字は10%以上の表現語

5 考察

回答された表現語群の種類をみると、『(各種) 障害のある』『補助具を使う』といった具体的表現は、特に『(各種) 障害のある』という語においてすべての障害種別、対象者群において 5%以上の回答があり、一定の表現がみられている。しかしながら、障害種別を問わず、イメージとして挙げられた語の分類でもっとも多かったのは、「性格」に属する語であり、そのほとんどは形容詞であった。序章では、東洋地域においては、相互の関連性や全体的な「場」の持つ影響力によって現象を理解しようとする傾向である『包括的認知』の傾向がみられるとされていることに触れたが、本研究で回答に多く用いられているのは形容詞であり、従来の指摘 (Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001) と異なる結果である。

また、回答全体に占める各表現語群の回答数の百分率をみると、特定の対象者群のみで回答が 5%を超えるケースもみられたが、分析候補として挙がる表現語群は対象者群全体で回答が 5%を超えたものが半数であり、本研究で回答に用いられた表現は、性別や接触経験にかかわらず、比較的多くの対象者に想起されたイメージであることがうかがわれた。特に、視覚障害者イメージにおける『敏感な』、知的障害者イメージにおける『利己的な』、運動障害者イメージにおける『運動障害のある』『劣等感の』は対象者群全体で回答における出現頻度が 10%以上となっており、これらのイメージ視覚障害者、知的障害者、運動障害者に対する代表的なイメージと言えるであろう。

障害者イメージにみられる性差について、河内 (2001) の結果では、視覚障害学生イメージについて、男子学生は『かわいそうな』『暗い』という回答が多くみられたのに対し、女子学生は『穏やかな』『我慢強い』『やさしい』といった肯定的な内容の回答が多くみられた。また、聴覚障害学生イメージに関しては、視覚障害学生イメージと類似した回答傾向がみられたが、女子学生において『かわいそうな』の回答が少なく、『やさしい』の回答が多くみられたことが示された。また、男子学生については、視覚障害学生イメージの『暗い』とは対照的に、聴覚障害学生イメージとして『明るい』が、また『普通の』という回答が出現することが報告されている。

本研究では、表現語群のうち、対象者群によっては出現頻度が 5%を下回る群と 10%を上回る群がみられた。具体的には、視覚障害者イメージおよび聴覚障害者イメージにおける『社交的でない』、聴覚障害者イメージにおける『アクティブな』、知的障害者イメージにおける『話すのが難しい』、運動障害者イメージにおける『良い』および『補助具を使う』

がそれに該当する。

『社交的でない』という表現語については、男女ともに接触経験を有する対象者群が10%を超える回答を示している。視覚障害、聴覚障害ともに感覚障害であり、障害のない人が知覚していることを視覚障害者、聴覚障害者に伝え理解してもらうには、特に視覚的情報、音声に関する情報については表現に工夫が必要となる。またインドネシアにおいては特に聴覚障害について教育では口話教育はほとんどの学校で行われず手話を用いられるケースが多い（大竹，2004）。このような、障害者のコミュニケーションの実態から、障害者と実際に接したときに意思疎通に困難を感じる事が予想される。このことから、今回の結果は実際のやり取りの難しさを経験したうえでの実感であると考えられる。

『アクティブな』と『話すのが難しい』はともに男・接触無群のみ回答が10%を超える結果となった。『アクティブな』に関しては男・接触有群も5%以上の頻度を示しており、男子学生に特徴的な聴覚障害者イメージであると考えられる。聴覚障害者イメージとしてこのような肯定的な内容が男子学生から示される点は、河内（2001）の結果に類似しているといえよう。

『話すのが難しい』は、男女ともに接触無群に5%以上の頻度でみられており、接触経験のない者に共通の知的障害者イメージであると推察される。知的障害者イメージについて、接触経験を日常的に有する者は社会的受容や実践的態度が肯定的であることが先行研究で指摘されており（松本・田引，2009）、本研究においても、障害者との接触経験を有する者においては、『話すのが難しい』という否定的な実践的態度が抑制されていた可能性が考えられる。

運動障害者イメージの『補助具を使う』に関しては、女・接触有群のみ10%を超える回答を示し、他の対象者群の回答における出現頻度は5%に満たない。『補助具を使う』は視覚障害者イメージでも分析候補として挙げられているが、視覚障害者イメージにおいては、対象者群全群で5%以上の回答を示している。この、障害種による『補助具を使う』の出現頻度の違いは、インドネシアにおける視覚障害者、運動障害者の補助具の使用状況の違いがあると考えられる。視覚障害者に関しては、歩行に白杖を使用すること、学習において点字を使用することから、普及している補助具の種類、使用状況は日本とあまり違いはみられない。対して、運動障害者の生活を支える補助具としては、車いすやクラッチといった歩行に関するものが第一にあげられるが、インドネシアの屋外では歩道の舗装はあまり整備されておらず、段差も多く、建築物のエレベーターやスロープといった移動手段の

整備もされていない場合が多い。そのため外出に車いすを使用することは難しく、実際に運動障害者が車いすを使用している場面に遭遇することは、たとえ都市部であっても非常に少なく、補助具を使用する様子を見るには、ある程度運動障害者と日常的に接する機会が必要になると考えられる。

先行研究で指摘されてきた障害者イメージには「障害があることは恥ずかしい」(大竹, 2004; スクマラ, 2003) という内容が存在していた。それらの意味を含む表現語群『劣等感の』は、各種障害者イメージに含まれたものの、運動障害者イメージを除いて、対象者全群では一定以上の回答頻度には至らなかった。また、Sujarwanto (2004) の知見にみられる「障害児が教育を受けることは無意味である」といった内容に直接的に該当する語群は結果として見当たらなかった。対象者のもつ良心の呵責や罪悪感がイメージ的反応の抑制に影響したことも考えられるが、他方、『アクティブな』といった差別とは無関係と考えられる回答も一定以上の頻度で存在する。4種の障害者イメージともに、内容としては、序章で述べた障害者の社会参加を阻む要因となりうる内容ばかりではなく、インドネシアにおいて美德とされる性格を示す『良い』といったイメージもみられた。これらは、障害者イメージを記述式質問紙で明らかにした先行研究の結果とも一致しており(河内, 2001)、インドネシアにおいても、障害者イメージは障害者の社会参加を阻むような内容のみならず、一般的な人物の傾性にかかわる内容も含むものであるといえるであろう。

6 まとめ

本研究から、インドネシアの障害者イメージが『障害者の具体的特徴』『性格』『対人上生じる状況』に属する語により表現されることと、それらの語で示されるイメージが性別、接触経験で分けられるどの集団で共有されているのかを明らかにした。

障害者イメージが先述のように、偏見となりうる内容のみならず、人柄の良さを示すような、多様な内容を含むことが明らかとなった。しかし、これらの内容が、ステレオタイプ内容モデルに示されたような両面価値性をはじめとする一定の組み合わせをもつものなのか否か、その構造については、別途の手法を用いて明らかにする必要がある。

また、対象者群を意味づける「性別」「接触経験」の2要因が、各障害者イメージに与える影響については、本研究で行った、分類および頻度からのみでは詳細には明らかにすることはできず、統計的な手法を用いてさらに検討する必要がある。

第5章 インドネシアの大学生における障害者イメージの構造（第2研究）

1 目的

第1研究では、障害者イメージの内容が、従来問題としてとりあげられてきた障害者差別につながるもののみならず、人物の性格や能力を表す語、障害の具体的特徴を表す語も含むことを明らかにした。しかし、障害者イメージの内容として挙げられた表現語群が、先行研究で示されている『温かさ—有能さ』の相補性のような関係性をもつのか、その構造については明らかにされていない。また、対象者の性別、接触経験によって、イメージの内容には違いがみられていることから、その構造も、対象者の属性によって異なる可能性がある。

そこで、第1研究で得られた結果から、インドネシアにおける障害者イメージの構造と、先行研究で障害者イメージに影響を及ぼす要因としてあげられている性別及び接触経験が、障害者イメージの構造に与える影響を明らかにすることを目的とした。

性別による障害者イメージの違いは序章でも述べた通りであり、また接触経験は、ボランティアや授業のゲストスピーカーの形で、障害者の啓発活動で多く使われる手段である。本研究を遂行することにより、障害者イメージの変容、解消を目的とした啓発活動の性差によるアプローチの検討と、啓発活動の一手段としての接触経験の有効性を検討するための基礎知見を得ることを目指す。

2 方法

第1研究において全対象者群で1人以上が回答した表現語群をまず分析対象とし、対象者の属性[性別(2)×障害者との接触経験の有無(2)]を行、[表現語群]を列とした多層クロス集計表に対し、コレスポネンズ分析を適用した。その後、分析結果において外れ値と認められた表現語群があった場合、その表現語群を除外して分析を再試行した。

3 分析

コレスポネンズ分析によって得られた次元について、寄与率が高い次元から順に、累積寄与率が60%に達するまでの次元を、イメージを構成する次元として抽出した。そして、各次元について、表現語の重み係数をもとに、障害科学専門の大学教員1名、および筆者により、各次元の命名作業を行った。具体的には、コレスポネンズ分析によって、列に位置付けた表現語群ごとに得られた得点が次元内でどのように位置づいているかにより、

各次元を命名した。なお、最初に次元の解釈や命名が一致しなかった場合には、次元を表すにふさわしい命名について協議の上、修正した。次に、行に位置付けた対象者の属性ごとに得られた次元の得点の位置が第1次元、第2次元であらわされた2次元平面図上の位置により、対象者群による回答傾向の特徴を検討した (Fig.3)。

なお、コレスポンデンス分析の結果の解釈については、次元ごとのプラスの極値からマイナスの極値までの項目の変化を読み取り、解釈に利用する方法 (君山, 2002)、や重み係数が±1以上の項目のみを利用して解釈する方法 (河内, 2001) があるが、本研究では各次元において重み係数±.400以上の項目に注目して解釈を行った。

分析には、SPSS Statistics 19.0、SPSS Categories (日本 IBM 社) を使用した。

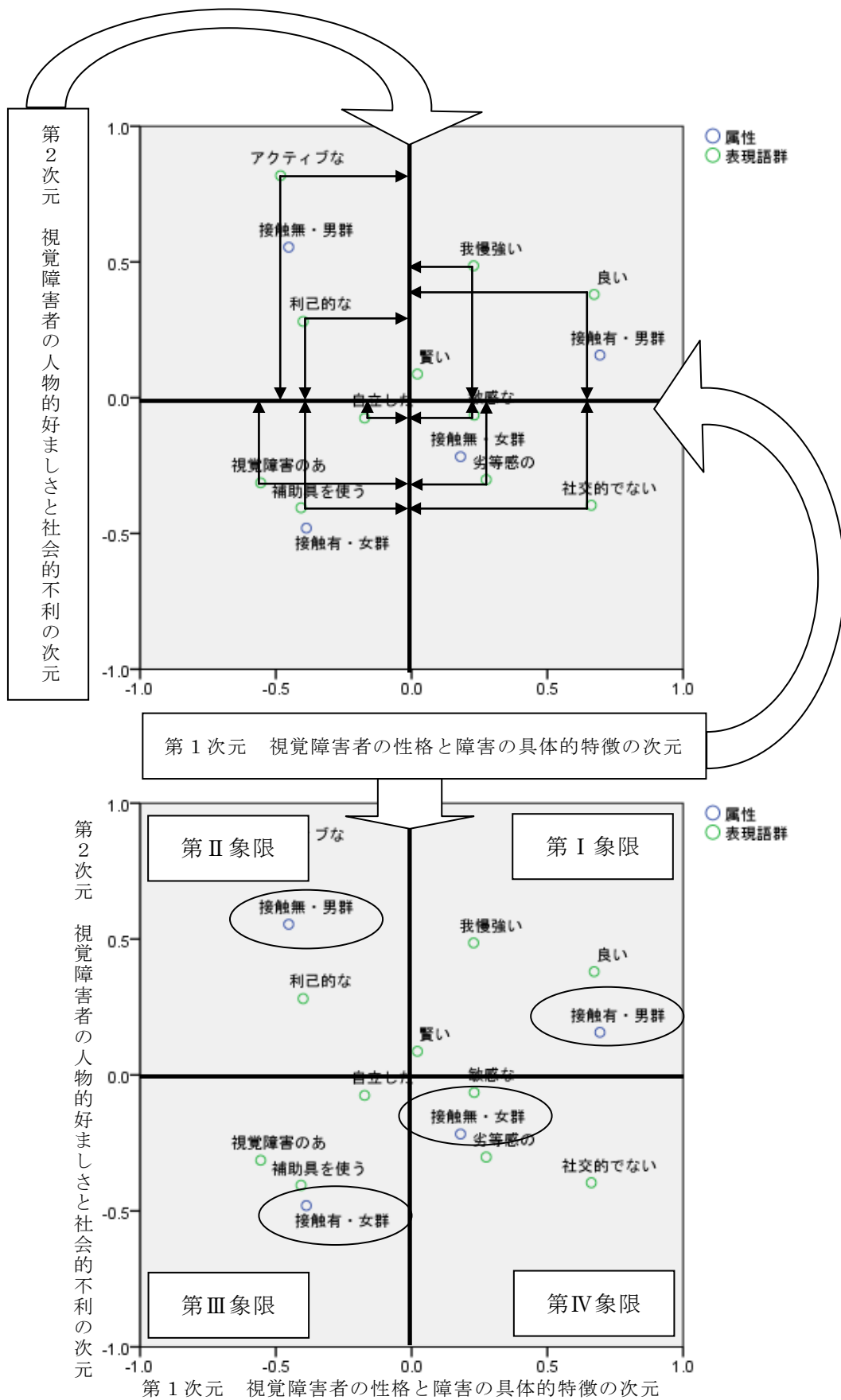


Fig.3 第2研究における分析

4 結果

1) 視覚障害者イメージの構造

最終的に 11 の表現語群を抽出した。分析の結果、視覚障害者イメージは 3 次元で構成された（寄与率 第 1 次元：55%、第 2 次元：28%、第 3 次元：17%）。第 2 次元までで累積寄与率が 80%を超えたため(83%)、本研究では第 2 次元までを採用した。

第 1 次元では、「良い」(.672)、「社会的でない」(.662)をはじめプラス側の表現語群は主に「性格」カテゴリーに属するものであったが、マイナス側には、「視覚障害のある」(-.556)、「補助具を使う」(-.407)、「活動的な」(-.483)といった、視覚障害とそれに伴う具体的な行動・手段につながる表現語群が位置した。よって、第 1 次元を「視覚障害者の性格と障害の具体的特徴の次元」と命名した。

第 2 次元では、「アクティブな」(.818)、「我慢強い」(.486)といったプラス側の表現語群は、インドネシアの好ましい人物像を示すものであった。対してマイナス側には「補助具を使う」(-.405)が位置し、また-.400に満たないものの、「社会的でない」(-.396)、「劣等感の」(-.302)、「視覚障害のある」(-.314)、とマイナス側には「障害者の具体的特徴」を意味する表現語群、及び周囲との交流に困難を抱える様子を意味する表現語群が位置した。よって、第 2 次元を「視覚障害者の人物的好ましさと交流困難の次元」と命名した。

男・接触無群は第Ⅱ象限（第 1 次元-.453、第 2 次元.555）、男・接触有群は第Ⅰ象限（第 1 次元.694、第 2 次元.157）に位置した。このことから、男子学生は、接触経験に関わらず視覚障害者に対して人物的好ましさをイメージとして抱いているが、障害者と未接触の場合は障害者の具体的特徴に着目したイメージも合わせて抱いているのに対し、接触経験を有する者は、人物的好ましさに加えて「社会的でない」や「劣等感の」といった性格もイメージとして有することが示された。

また、女・接触無群は第Ⅳ象限（第 1 次元.180、第 2 次元-.217）に属するが、第 1 次元、第 2 次元ともに絶対値は小さく原点付近であるのに対し、女・接触有群は第Ⅲ象限（第 1 次元-.388、第 2 次元-.480）に位置した。このことから、女子学生は、障害者と未接触状態では性格と交流困難に関係した視覚障害者イメージを抱く傾向にあるが、障害者との接触経験を有する者は、性格に関するイメージではなく障害者の具体的特徴に関するイメージをもつことが明らかとなった。

視覚障害者イメージの構造を Fig. 4 に、表現語群および対象者の属性別重み係数を Table14、15 に示した。

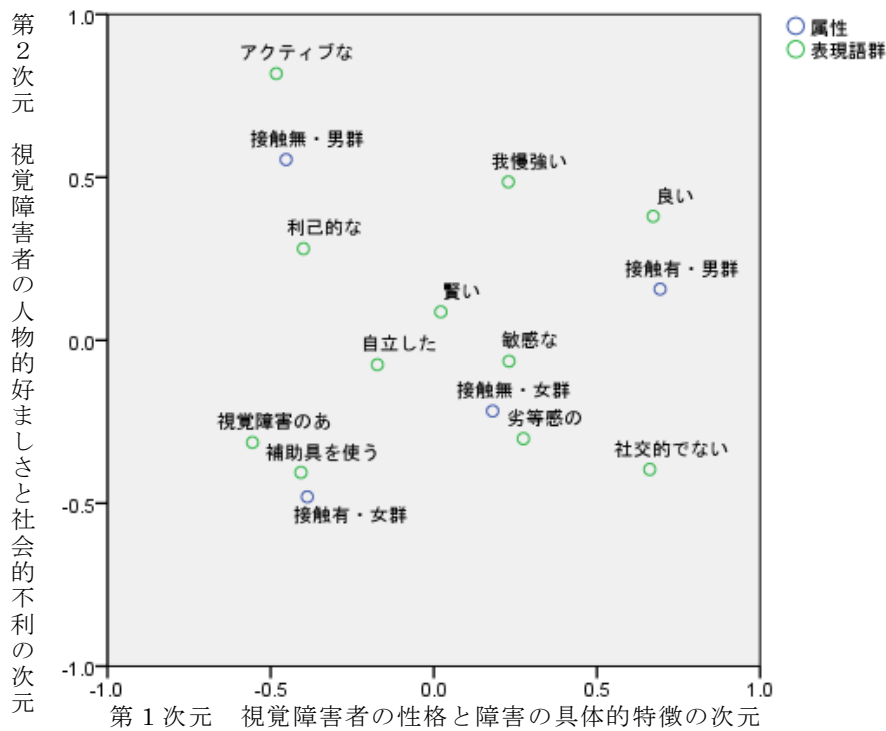


Fig.4 視覚障害者イメージの構造

Table 14 視覚障害者イメージの各次元における対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元
視覚障害のある	-.556	-.314
補助具を使う	-.407	-.405
良い	.672	.380
アクティブな	-.483	.818
我慢強い	.228	.486
劣等感の	.275	-.302
社交的でない	.662	-.396
利己的な	-.399	.281
敏感な	.231	-.064
自立した	-.173	-.075
賢い	.021	.087

Table 15 視覚障害者イメージの各次元における対象者の属性別重み係数

対象者の属性	第1次元	第2次元
男・接触有	.694	.157
男・接触無	-.453	.555
女・接触有	-.388	-.480
女・接触無	.180	-.217

2) 聴覚障害者イメージの構造

最終的に 11 の表現語群を抽出した。分析の結果、聴覚障害者イメージは 3 次元で構成された（寄与率 第 1 次元：45%、第 2 次元：35%、第 3 次元：20%）。第 2 次元までで累積寄与率が 80%を超えたため（80%）、本研究では第 2 次元までを抽出した。

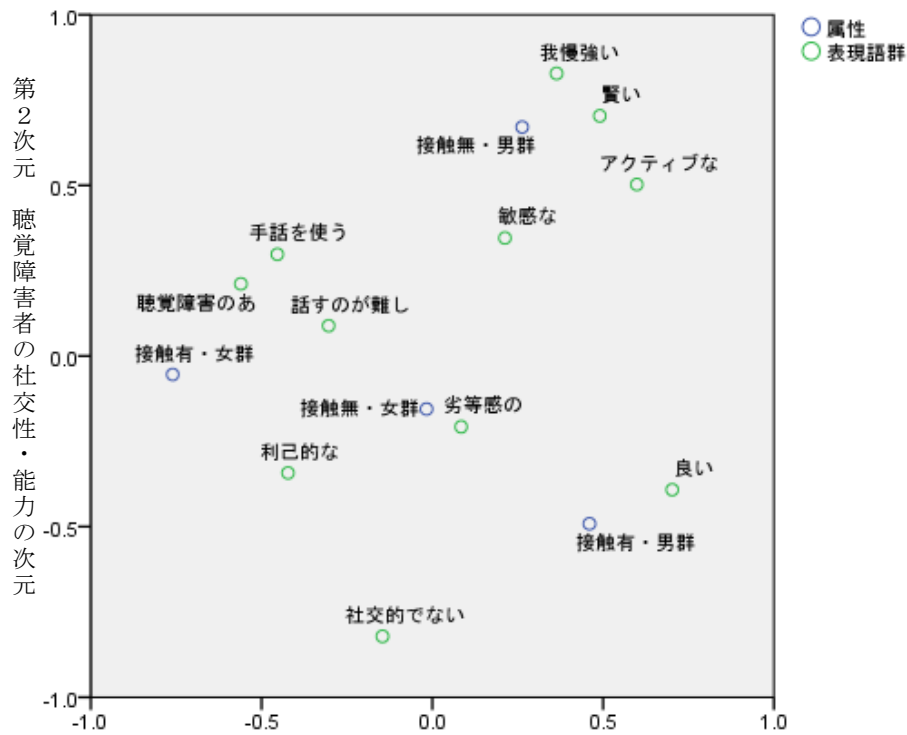
第 1 次元では、プラス側の表現語群は、「良い」(.702)、「活動的な」(.599)、「賢い」(.491) といった、人当たりのよさを示す語や積極性、能力を示す表現語群であった。対して、マイナス側の表現語群は、「聴覚障害のある」(-.561)、「手話を使う」(-.454) という、聴覚障害自体や、聴覚障害特有のコミュニケーション手段という、聴覚障害とそれに伴う具体的な状態を示している。よって、第 1 次元を「聴覚障害者の性格・能力と障害者の具体的特徴の次元」と命名した。

第 2 次元では、プラス側の表現語群は「我慢強い」(.828)、「アクティブな」(.503)、及び「賢い」(.704) という、インドネシアにおける社会性・能力の高い人物像を示した。対して、マイナス側には「社交的でない」(-.821) という交流困難に関する表現語群が位置した。よって、第 2 次元を「聴覚障害者の社交性・能力の次元」と命名した。

男・接触無群は第 I 象限（第 1 次元.263、第 2 次元.671）、男_接触有群は第 IV 象限（第 1 次元.460、第 2 次元-.492）に位置した。以上から、男子学生は、障害者と未接触の状態では、性格と、社交性の高さに着目した聴覚障害者イメージを抱き、接触経験者は社交性の高さに関連したイメージではなく交流困難に着目したイメージを有していることが示された。

また、女・接触無群、女・接触有群はともに第 III 象限であるが、女・接触無群が第 1 次元で原点付近であるのに対し（第 1 次元-.017、第 2 次元-.155）、女・接触有群は第 1 次元の値がマイナス側に移動している（第 1 次元-.760、第 2 次元-.054）。よって、女子学生は聴覚障害者に対して交流困難に関するイメージを抱いており、障害者と未接触の状態と比較すると、接触経験者は、障害者の具体的特徴に関するイメージを有していることが示唆された。

聴覚障害者イメージの構造を Fig. 5 に、各次元における表現語群および対象者の属性別重み係数を Table 16、17 に示した。



第1次元 聴覚障害者の性格・能力と障害の具体的特徴の次元

Fig. 5 聴覚障害者イメージの構造

Table 18 聴覚障害者イメージの各次元における対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元
聴覚障害のある	-.561	.211
良い	.702	-.392
アクティブな	.599	.503
我慢強い	.364	.828
劣等感の	.084	-.207
社交的でない	-.146	-.821
利己的な	-.423	-.343
敏感な	.212	.346
賢い	.491	.704
話すのが難しい	-.304	.089
手話を使う	-.454	.298

Table 19 聴覚障害者イメージの各次元における対象者の属性別重み係数

対象者の属性	第1次元	第2次元
男・接触有	.460	-.492
男・接触無	.263	.671
女・接触有	-.760	-.054
女・接触無	-.017	-.155

3) 知的障害者イメージの構造

最終的に 10 の表現語群を抽出した。分析の結果、知的障害者イメージは 3 次元で構成された（寄与率 第 1 次元：64%、第 2 次元 24%、第 3 次元 12%）。第 2 次元までで累積寄与率が 80%を超えたため（88%）、本研究では第 2 次元までを抽出した。

第 1 次元では、プラス側の表現語群は、「話すのが難しい」(.938)、「敏感な」(.563)、「アクティブな」(.561) という、全体的に他者との交流困難を示した。対して、マイナス側では「知的障害のある」(-.713) が、他の表現語群よりも原点を大きく離れた。このことから、第 1 次元を「知的障害者の交流困難と障害者の具体的特徴の次元」と命名した。

第 2 次元では、プラス側の表現語群は主に「話すのが難しい」(.642)、「敏感な」(.675)、「知的障害のある」(.507) であり、第 1 次元と類似しているが、「敏感な」という表現語群はインドネシア語において「空気を読む」という意味を持つ。対して、「鈍感な」(-.607)、「社会的でない」(-.428) といったマイナス側の表現語群は他者の意図を汲まない様子を示した。したがって、第 2 次元を「他者理解・状況理解能力に関する次元」と命名した。

男・接触無群は第 I 象限（第 1 次元.647、第 2 次元.420）にあり、男・接触有群は第 IV 象限（第 1 次元.140、第 2 次元-.341）に位置することから、男子学生は、障害者と未接触状態では知的障害者の交流困難と、他者や状況の理解に着目したイメージをもち、接触経験者は交流困難イメージは少なく、他者や状況の理解困難に着目したイメージをより多くもつことが示された。

女・接触無群は第 III 象限（第 1 次元-.056、第 2 次元-.388）、特に第 1 次では原点付近であるが、女・接触有群は第 II 象限（第 1 次元-.698、第 2 次元-.339）に位置した。よって、女子学生は、障害者と未接触の状態では他者理解・状況理解の困難に関係した知的障害者イメージを抱くが、接触経験者は、知的障害者の具体的特徴に関するイメージが多くなり、他者理解・状況理解の困難に関するイメージよりも周囲の状況に敏感なイメージをもつことが示唆された。

知的障害者イメージの構造を Fig. 6 に、各次元における表現語群および対象者の属性別重み係数を Table 18、19 に示した。

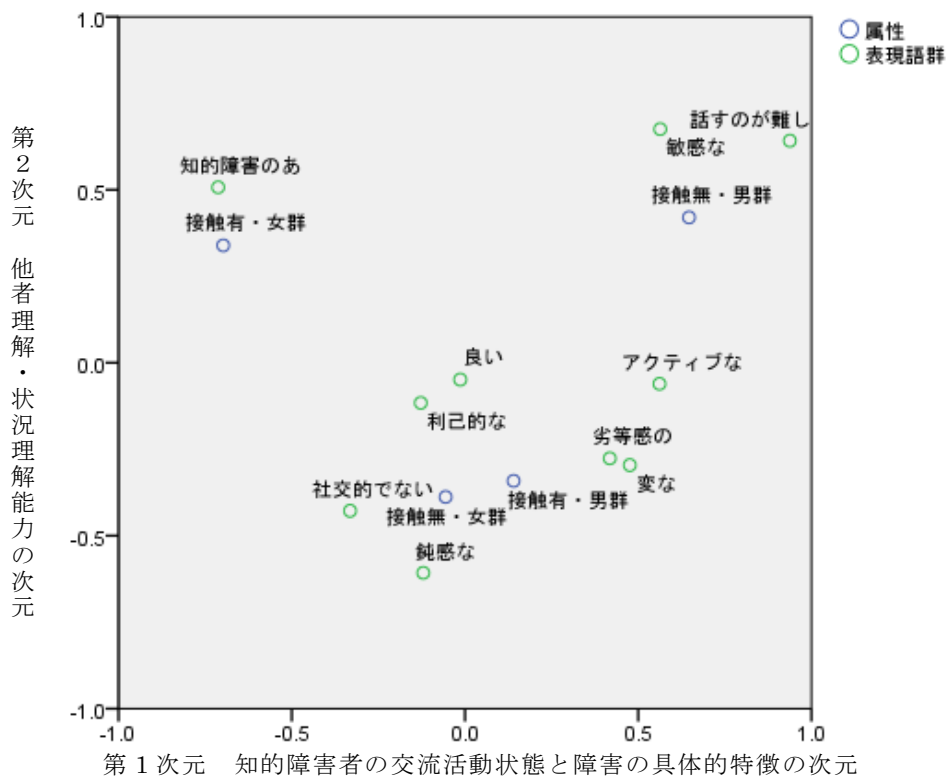


Fig.6 知的障害者イメージの構造

Table 18 知的障害者イメージの各次元における対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元
知的障害のある	-.713	.507
良い	-.014	-.049
アクティブな	.561	-.061
劣等感の	.418	-.276
社交的でない	-.332	-.428
利己的な	-.128	-.116
敏感な	.568	.675
変な	.476	-.296
鈍感な	-.121	-.607
話すのが難しい	.938	.642

Table 19 知的障害者イメージの各次元における対象者の属性別重み係数

対象者の属性	第1次元	第2次元
男・接触有	.140	-.341
男・接触無	.647	.420
女・接触有	-.698	.339
女・接触無	-.056	-.388

4) 運動障害者イメージの構造

最終的に9の表現語群を抽出した。分析の結果、運動障害者イメージは3次元で構成された(寄与率 第1次元:86%、第2次元10%、第3次元4%)。第3次元は寄与率が10%を下回ったため、本研究では第2次元までを抽出した。累積寄与率は第2次元までで96%となった。

第1次元では、プラス側には、「良い」(.495)、「劣等感の」(.479)といった表現語群が位置した。「補助具を使う」(-1.462)、「運動障害のある」(-.405)という表現語群がマイナスを示し、中でも「自立した」(-1.276)の表現語群が大きくマイナスの値を示した。このことから、第1次元を「運動障害者の具体的特徴と性格の次元」と命名した。

第2次元では、+.400以上の次元得点を示す表現語群は存在しなかったが、「社会的でない」(.377)、「劣等感の」(.206)という、主に他者との交流を避ける内容を意味する表現語群が位置し、対して「アクティブな」(-.751)、「自立した」(-.579)といったマイナス側の表現語群は他者と積極的に交流する様子を示した。したがって、第2次元を「他者との交流の積極性の次元」と命名した。

男・接触無群は第IV象限(第1次元.251、第2次元-.050)にあり、男・接触有群も第IV象限(第1次元.326、第2次元-.464)にあるが、男・接触経験と比較すると第2次元の値がマイナス側に位置している。よって、男子学生は、障害者と接触後に、運動障害者に対して他者と積極的に交流する様子に着目したイメージをもつことが示された。

女・接触無群は第I象限(第1次元.428、第2次元.466)、女・接触有群は第II象限(第1次元-.953、第2次元.039)に位置した。よって、女子学生は、障害者と未接触の状態では運動障害者に対し、性格に関するイメージ、及び他者との交流を避けるイメージを抱くが、接触経験者は、運動障害者の具体的特徴に関係したイメージ、及び他者と積極的に交流するイメージを抱くことが明らかとなった。

運動障害者イメージの構造をFig. 7に、各次元における表現語群および対象者の属性別重み係数をTable 20、21に示した。

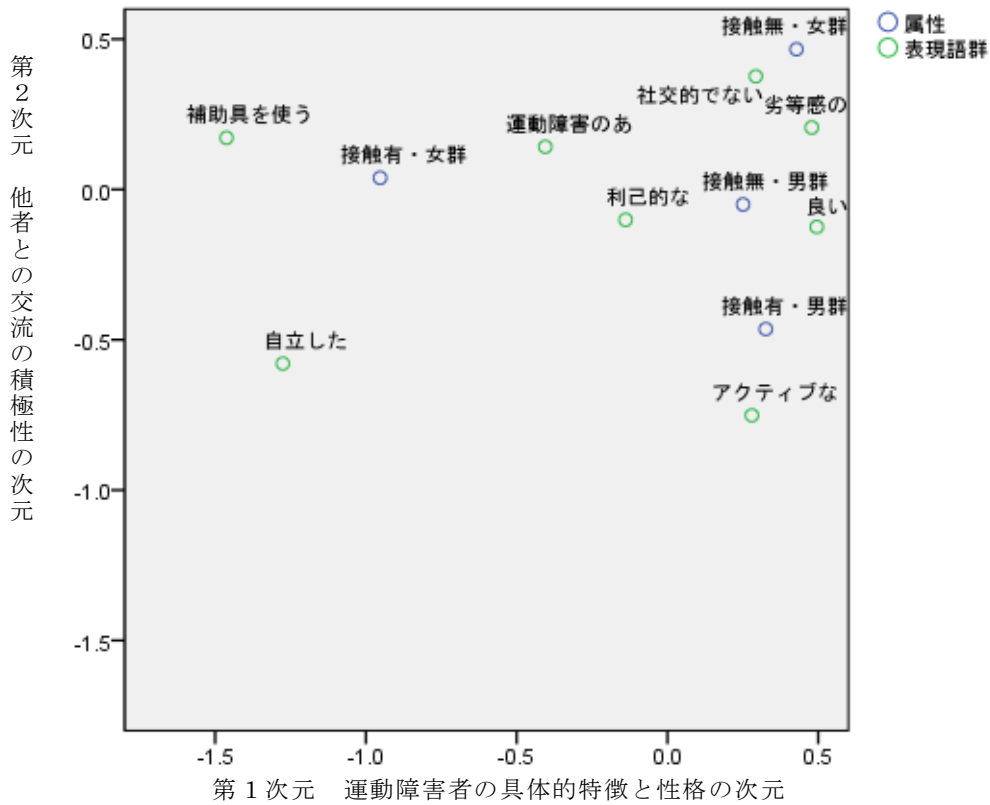


Fig.7 運動障害者イメージの構造

Table 20 運動障害者イメージの各次元における表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元
運動障害のある	.405	.142
補助具を使う	-1.462	.172
良い	.495	-.125
アクティブな	.280	-.751
劣等感の	.479	.206
社会的でない	.293	.377
利己的な	-.139	-.102
自立した	-1.276	-.579

Table 21 運動障害者イメージの各次元における対象者の属性別重み係数

対象者の属性	第1次元	第2次元
男・接触有	.326	-.464
男・接触無	.251	-.050
女・接触有	-.953	.039
女・接触無	.428	.466

5 考察

1) インドネシアにおける障害者イメージの構造と障害者との接触経験

4種の障害種別の意味構造は、いずれも主に第2次元までで寄与率が60%を越え、第1次元に関しては、障害の具体的特徴と性格が対極に位置する構造であった。この対極性は、ステレオタイプ内容モデルの『温かさ』『有能さ』とは異なる組み合わせであるが、障害の具体的特徴と対極に示された性格を示す表現語は、人物の傾性を示す抽象性の高い語であることから、言語カテゴリーモデルに示されるような、人物の傾性に関する具体性・抽象性が障害者イメージの構造を形成するものであると考えられる。

性別がイメージ構造に与える影響に関して、男子学生の抱く視覚障害者イメージに関しては、接触経験のある者はない者と比較すると、障害の具体的特徴に関するイメージは少なく、性格に関するイメージが多くを占めることをコレスポンデンス分析から明らかにしている。この結果は、言語カテゴリーモデルの観点からは、接触経験の中で、特定の視覚障害者に接することで、その人物に恒常的に安定してみられる性格をイメージとして得ていると考えられる。こうした人物の傾性は、本来であれば『視覚障害者』全体に当てはまる内容であるか否かは、集団名からでは判断できないものであるにもかかわらず回答されている。抽象的言語表現による人物の傾性は反証する事例は知覚されにくい(唐沢, 2010)ことをふまえると、こうしたイメージは現実場面において視覚障害を有する個人と接した際に、例えば Fig.5 の第1次元上で男・接触有群と近い数値を示した「良い」「社交的でない」といったイメージに当てはまらない個人の性格や能力を認識されない可能性が考えられる。

聴覚障害者イメージに関しては、社交性の高さ—交流困難という、「交流」というキーワードで未接触群と接触経験を有する群とで違いがみられた。交流困難という状態は、聴覚障害者に予想されやすい特別なニーズの一つとして考えられるため、接触経験を経て、聴覚障害者の障害に関する状態を知り、それがイメージに反映されている可能性が考えられる。

知的障害者イメージに関しては、接触経験のない者は抽象度が高い表現で知的障害者の困難をとらえているのに対し、接触経験のある者は、障害者の具体的な状態を示す表現で知的障害をイメージとしてあげている。この結果の違いは、接触経験により、知的障害という状態に関する実際的な情報が得られたことで、ネガティブなイメージのもととなりうる困難さよりも具体的特徴として知覚されやすくなったことが示唆される。

運動障害者イメージに関しては、接触経験のない者が性格に関するイメージを抱くのに対し、接触経験のある者が活動性の高さや能力の高さに関するイメージを抱いている。ステレオタイプ内容モデルにおいては、障害者イメージは“温かいが有能でない”という表現で示されるといわれるが、性格面においてはかならずしも温かさを示す表現語群で示されなかったが、有能さを示す表現語群は接触経験のある群の回答にみられている。したがって、接触経験を経て、運動障害者の“できること”に目が向けられ、それがイメージとして定着していることが考えられる。

以上の、男子学生の接触経験による障害者イメージの違いを俯瞰すると、男子学生において視覚障害者に関しては、接触経験を有する者は性格に関するイメージを抱くが、聴覚障害者、知的障害者、運動障害者に関しては、障害の具体的特徴や能力、活動性についてのイメージを抱いている。性格は主に形容詞で表現されるが、形容詞は言語カテゴリーモデルにおいては最も抽象度が高く、抽象度の高い人物傾性は、対象に安定してみられる状態に着目するものである。別の視点で考察すると、視覚障害者イメージについては分析的認知が、聴覚障害者、知的障害者、運動障害者に関しては、包括的認知の傾向がみられたことになる。すなわち、接触経験によって得られた情報が、視覚障害者に関しては接した人物個人に対して注意が向けられ、その場の状況とは関係なく人物の性格が情報として認知されたのに対し、その他の障害種別に関しては、接した障害者個人の性格ではなく、接した障害者を通して、『障害の状態』という、障害者集団に共通する障害の状態に注意が向けられたと解釈できる。インドネシアを含むアジア圏では、包括的認知が優勢であるといわれるが（唐沢，2010）、視覚障害者イメージの認知に関しては例外的な結果となった。

女子学生の抱く障害者イメージに関して、接触経験のある者はない者と比較して、障害種別にかかわらず、障害者に対する具体的特徴に着目することが示された。これは、言語カテゴリーモデルが示す記述的行為動詞という言語的抽象度が最も低い状態を示しており、こうした傾性は、イメージの対象集団に関する情報を多く得ることで知覚される（唐沢，2010）。このことから、障害者との接触経験をもつ女子学生は、その経験から障害者の行動傾向に関する情報を多く得ることにより、障害者に対する具体的特徴に着目するに至る可能性が考えられる。この点、先の男子学生の抱く障害者イメージは視覚障害者イメージのみ分析的認知とみられる結果であったが、女子学生に関しては、いずれの障害種別においても、包括的認知がなされているととらえられ、文化的認知傾向とも一致すると考えられる。

これらのことから、障害者との接触経験を有する者の障害者イメージは「障害の具体的特徴」という言語カテゴリーモデルにおける具体性の高い状態であったが、男子学生の視覚障害者イメージに関しては、接触経験を有する群においても、「性格」に属する抽象性の高い形容詞によるイメージが示されており、さらに内容としては、「社会的でない」「劣等感の」といった、交流困難や能力の低さを示す表現語群が含まれていることから、障害者イメージの抑制、解消のためには、男子学生の視覚障害者イメージに関しては、接触経験が有効でない可能性がある。

また、いずれの障害者イメージにおいても、未接触の者は交流困難や交流を避ける様子といった、対人交流上の問題に着目しているが、聴覚障害者イメージ以外の3種に関しては、接触経験のある者の抱くイメージの中に対人交流上の問題への着目傾向はみられない。これは、接触経験を通じて、当該障害者とのやりとりの方法を具体的に身に付け、障害者と調査対象者が相補的に交流困難を解消しているからであると考えられる。ただ、聴覚障害者に関しては、インドネシアにおいては、補聴器の普及やインドネシア語対応手話の整備は途上であり（大部，2011）、接触経験の質によっては解決できない可能性がある。こうした国内の状況がイメージにも反映されていることが考えられる。

2) 障害者イメージの構造を特徴づけた表現語群

本研究において、4種の障害種別中、2種以上の障害者イメージにおいて構造を特徴づけた表現語群は、以下の12種であった。各表現語群の意味について、文献及び協力者からの聞き取りをもとに以下にまとめた。

障害のある

視覚障害のある tidak bisa melihat

聴覚障害のある tidak bisa mendengar

知的障害のある ada cacat intelektual

運動障害のある ada gangguan fisiknya

すべての障害種別において、イメージ構造の第1次元に関与する表現語群であった。具体的な状態として、障害があると認められている状態を指す。『目の見えない』『耳の聞こえない』『IQの低い』『腕のない』『歩くことのできない』といった表現が含まれた。

補助具を使う menggunakan alat bantu

視覚障害者、運動障害者イメージにおいて、構造に関与した。具体的に、障害によって出来ないこと、困難なことに対して専用の福祉用具を用いている状態を指す。例えば、『白杖を使う』『点字を利用する』『補聴器を使う』『絵カードを使う』『車いすに乗る』という語が含まれた。

良い baik

すべての障害種別において、イメージ構造に関与した。この表現語群で最も多く含まれた baik というインドネシア語は、日本語訳では『良い』という言葉になるが、この言葉の意味としては、人あたりの良さ、優しさといった意味を含む。また、この表現語群には、交流能力の高さを示す単語（『親しみやすい・友達になりやすい mudah berteman』）、道徳的行動をとることを表す単語（道徳的な akhlak）、寛容さを表す単語（寛容な lapang dada）も分類された。第1研究において、baik の出現頻度は、知的障害者イメージに対する女・接触無群の回答と、運動障害者イメージに対する女・接触有群の回答を除き、5%を超える結果となっているため、障害者イメージとしては、障害種別を超えて『障害者』に対して比較的多くの人を抱くイメージであると考えられる。特に、寛容さに関しては、後述の sabar（我慢強い）と合わせて、国民にとって、またジャワにおいても美德とされる人物の傾性である。例えば、教育課程において必修とされている『インドネシア国民教育』の中では、小学部前期という入門の段階で、性別、宗教、種族の違いを理解したうえで他者と仲良く生きることを学ぶ（大部，2008）。これは、インドネシアが独立する際に提唱された国家スローガン『多様性の中の統一』にかかる教育内容である。また、他の側面として、ジャワ地方においては、どのような思想に対しても、自らのそれとの違いを尊重しつつも寛大に接する概念があり Kejawen と呼ばれる（Reksohadiprojo, 1973）。こうした意味を含む、インドネシア語の表現としても特徴的な baik は、言語相対性仮説を踏まえ、国内で人物の傾性として特徴的な認知傾向である可能性を検討する必要がある。

アクティブな aktif

すべての障害種別において、イメージ構造に関与した。この言葉はインドネシア語としては、英語をもとにした外来語であるが、意味としては英語の active と同じ意味の形容詞となる。

我慢強い sabar

視覚障害者、聴覚障害者イメージにおいて、構造に関与した。ジャワの生活哲学のもととなっている8原則のうちの1つである(Dipoyono, 1972)。sabarは、どのような状態にあっても忍耐の態度をもつことであり、たとえ要求があっても焦ることなく時期を待つことを示す。また、感情の起伏を表出することを慎む意味も含む(ベイ, 1975)。同じく人物の美德として認識されている先述の baik との違いは、第1研究における各障害イメージにおける出現頻度が少ない点であり、sabarは[障害種別]×[対象者群]のほとんどの項目において回答における出現頻度は5%を下回っている。また、baikがすべての障害種別においてイメージ構造に関与したが、sabarは感覚障害に属する障害種別のみにおいてイメージ構造に関与している。そのため、感覚障害を有する集団のイメージであるという特徴が挙げられる。

劣等感の minder

すべての障害種別においてイメージ構造に関与した。障害者自身が、障害のない人々と比較して自己の能力を低くとらえていることを表現するものとして用いられた単語である。問題の所在で示された、障害者の能力を低くみるイメージと、ここで示された障害者自身が自己評価を低くみる結果は、他集団から付与されたイメージに沿った行動をとってしまうステレオタイプ脅威の状態を示すものであると考えられ、第1研究においてこの『劣等感の』という単語が単純なパーセンテージの点からは、いずれの障害者イメージにおいても存在していた点、また比較的運動障害者イメージに多くみられた点については、イメージを抱く人々の個人要因との関連からも検討する必要があるであろう。

社交的でない jarang bergaul

すべての障害種別においてイメージ構造に関与した。交流の頻度が少ない、意図的に他者とあまり交流をしない、交流を好まないことを示す言葉である。『寡黙な pendiam』『孤独な penyendiri』『冷たい dingin』といった語も含まれた。

利己的な egois

すべての障害種別においてイメージ構造に関与した。この単語は aktif と同様、英語か

らの外来語であるが、本研究におけるこの表現語群には、『子どもっぽい kekanak-kanakan』といった言葉や、『甘える manja』『他者に依存している bergantung pada orang lain』といった意味も含まれた。こうした、“甘え”に関して、ベイ(1975)は、インドネシアにおいては、一般的に他者の持ち物をもらう方が、同じものを買うよりも価値があるとする考え方を挙げ、直接的に甘えを意味する manja を、強者に依存する弱者の権利、裕福な人たちに依存する貧者の権利としている。こうした意味をもつ表現語を障害者イメージとして共有されていることは、障害者を社会的弱者として認識することを正当化すると考えられる。同時に、序章で触れた、インドネシアの障害者にとって、就学期間終了後に行き場がなくなることから脱施設化という西欧の概念が適さないという指摘(Komardjaja, 2005)についても、現状当該国内の特殊学校の多くが、富裕層が設立する個人の財団が運営する私立学校であることを考慮すると、egois に含まれるこうした障害者イメージを当事者やその家族に対してステレオタイプ脅威がはたらき、結果として障害者は自らの居場所を、特殊学校をはじめとする障害者を受け入れ可能な施設においている可能性が考えられる。

敏感な sensitif

視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者イメージにおいて、構造に関与した。英語からの外来語である。この表現語群においてこの言葉が最も多く用いられたが、意味としては、『(精神的に) 傷つきやすい mudah tersinggung』という内容も含まれた。

自立した mandiri

視覚障害者、運動障害者イメージにおいて、構造に関与した。インドネシア語においては、もともと独立を示す単語である。障害者に対して『自立』という場合、世界的には社会保障や介護サービスの使用も含め自らの生活を管理することを指すが、インドネシアにおいて単語の意味としては、自分ひとりで物事を成し遂げられることを意味するとのことであった。

賢い pintar

視覚障害者、聴覚障害者イメージにおいて、構造に関与した。インドネシア語における pintar は、知的能力の高さのみならず、手先の器用さ、技術の高さといった意味も含むと

のことであった。『上手な pandai』『記憶力の良い daya ingat baik』『創造的な kreatif』もこの表現語群に含まれた。

話すのが難しい susah bicara

聴覚障害者、知的障害者イメージにおいて、構造に関与した。会話の困難を示す。先の jarang bergaul が、心理的な状態に起因して他者と交流しない状態を示すのに対し、この表現語群に含まれる意味は、聴覚や構音の問題から他者との会話が困難な状態を示す。

6 まとめ

第 1、第 2 研究において、インドネシアにおける障害者イメージがどのような内容で示され、またイメージの構造がどのようなものであるのかを明らかにした。

第 2 研究の結果の中で、男子学生による視覚障害者イメージの認知傾向が他と異なり、接触経験を有する者は分析的認知をしており、視覚障害者集団に対するイメージに影響を及ぼしていることが示された。この認知の違いに対して何が影響しているのかを探ることは、視覚障害者の認知を固定的な性格に落とし込まないようにするための手がかりとなるであろう。また、接触経験が必ずしも障害者イメージの解消、抑制に効果的であるとは言えないという点は、考察でも示した通りだが、障害者に対する啓発活動への寄与という展望に向かうためには、障害者に関する情報をどういった手段で人々に伝えるべきかを探る必要があると考えられる。

同時に、先述の、実際に起こっている障害者イメージの問題の解決法を探るためには、栗田・楠見（2012）も指摘しているように、抱いているイメージと行動の整合性という視点を持ち、イメージの適用に関する研究を行う必要があるであろう。

第6章 インドネシアの大学生における障害者イメージの適用（第3研究）

これまで、第1研究の結果から、障害者イメージには従来問題とされてきた内容を含め、障害者の具体的特徴や性格を含め、内容の種類は多様であり、割合としては性格の表現が多いことが明らかとなっている。

また、第2研究までの結果から、障害者イメージの構造に、「障害者の具体的特徴」という具体性と、「性格」という抽象性が一次元を構成していること、さらに、対象者の障害者に対する接触経験が、障害者イメージ構造上の具体性—抽象性に関与するが、特に男性による視覚障害者の認知に関しては、女性や、他の障害種別に対する認知の傾向とは異なることが明らかとなっている。

しかし、対象者群内で、各次元を構成する表現語群がイメージとしてどのように、具体的な人物や集団に対して適用されているのかは明らかにされていない。また、第2研究では性差に加えて、接触経験という手段で障害者に関する情報を得ることが障害者イメージにどのような影響を及ぼすかを明らかにしているが、直接的な接触経験が必ずしも障害者イメージの抑制、解消に効果的であるとは言えず、障害者の啓発にあたっては、別途の手段で情報を伝えることも検討すべきであろう。そのため、従来インドネシアにおいて障害者啓発活動の一手段として用いられてきたメディアを含む情報源が、どのような障害者イメージの適用に対して影響を与えているのかについて、まずは検討し、これまでにインドネシアにおいてみられていた障害者イメージに起因する問題と照らし合わせることで、障害者啓発に関する有用な示唆を得られると考えられる。

以上より、本研究では、障害者イメージの適用について明らかにすることを目的とし、以下の調査を実施した。

1 目的

インドネシア人大学生である対象者によって、各次元を構成する表現語群のうちどのような内容のイメージが具体的障害者である人物や集団に適用されているのか、また、障害者啓発活動の一手段として用いられてきたメディアを含む情報源が、どのような障害者イメージの適用に対して影響を与えているのかを明らかにすることを目的とした。

なお、序章でも触れた通り、イメージの適用を抑制するためのカテゴリー化変容の方策は複数検討されてきているが、インドネシアにおける障害者イメージの適用状況の変容方策を探るにあたっては、現代インドネシアに生活する障害者の日常生活を示す必要があり、

またインドネシア人の認知傾向に合わせた方策を探る必要がある。そのため本研究では、障害者イメージの適用を抑制、解消するための方策を探るうえでの基礎知見を得ることを目指した。

2 方法

ジャワ島にある3つの総合大学の学生、合計200名に、各大学の教員を通じて質問紙回答を依頼した。フェースシート未記入による無効回答(6名)を除き、有効回答数は合計194名(男性77名、女性117名)となった。有効回答者の平均年齢は19.7歳であった。この平均年齢は、インドネシアの現役大学生の1~2年生に相当する。

2013年12月、および2014年3月に、現地大学の授業終了直後の時間に質問紙を配布した。回収に関しては、各大学において回収場所を定め、記入次第提出を求める留め置き形式とした。

本研究で用いられた質問紙は、フェースシート、及び刺激に対してイメージを回答する質問8つで構成された。質問では、刺激文4種、および第2研究で用いた単語刺激4種(『視覚障害者』『聴覚障害者』『知的障害者』『運動障害者』)の計8の刺激それぞれに対して、該当するイメージを12の選択肢から3つ選んで回答するという、制限連想法により回答を求めた。選択肢には、第1研究結果により、単語刺激4種すべてに用いられた12の表現語群名を用いた。

フェースシートでは、障害者との接触経験に加えて、障害者に関する情報をどこから得ているか、情報源に関する質問項目を設けた。障害者に関する情報を間接的に得た経験についての質問項目を設定した背景としては、序章でも触れたように、障害者に対する人々の関心や認識を高めることを目的としたマスメディアによる啓発(ニノミヤ, 1999)が行われていることが挙げられる。また、インドネシアにおいても、各地に伝統的に伝わる物語の中に障害者が登場しており(大部, 2012)、現在も国内の映画や日本のドラマ放送でも、障害者が描かれている。栗田・楠見(2012)は、交流教育やボランティア活動に加え、ドラマや漫画、障害者の自叙伝をはじめ、間接的に情報に触れる機会も含めると、一度も障害者と接したことがない人は現代社会においてはほとんどいないと指摘している。こうした障害者との様々な接触の機会の増加が、特に障害者の人柄に関するイメージを形成させている可能性がある(Bailey, 1991)。そこで、間接的接触としての情報が障害者イメージに及ぼす影響を探るために、坂本(1999)を参考に、現代のマスメディアを含め、障

害者に関する情報を間接的に獲得しうる媒体、情報源として、書籍、事件報道、ドキュメンタリー番組、フィクション作品、学校での授業という5つの選択肢を設けた。

序章でも述べたとおり、イメージの適用を抑制する方策について検討した先行研究では、方策によって細部の刺激提示や適用されるイメージの内容は異なるが、方法としてはいずれもイメージの付与された集団成員である個人を刺激として用いることが共通している。そこで、障害者イメージの適用を調べるにあたり、障害者イメージの適用対象となる人物の刺激文を作成した。

刺激文作成の協力者は、日本に留学中または生活しているインドネシア人計5名であった（男性2名、女性3名）。なお、5名のうち4名が留学生であり、専門は日本語教育学、生物資源学、工学であった。また、留学生の1名および日本に生活中であった1名は日本語能力検定1級所持者であった。

なお、本研究では障害のある具体的人物に対して、障害者イメージがどのように適用されるのかを明らかにすることを目的としているが、第2研究と同様、障害のある具体的人物を図やイラストで表した場合、視覚的な好ましさがイメージに影響を与える可能性があったため、具体的人物が日常生活を送る様子を示した文章を、障害種別4種（以下、具体的視覚障害者、具体的聴覚障害者、具体的知的障害者、具体的運動障害者）ごとに作成し、刺激として示すこととした。

文章を作成するにあたっては、序章でも述べた、筆者のフィールドワーク調査による知見、インドネシア人障害者の手記や特殊教育、リハビリテーションといった関連分野の現状を示す文献（大部，2012；大部，2010；大部・鄭・野呂，2010；Rahardja，2006；大竹，2004；サイダ，2003；スクマラ，2003）を参考に、インドネシア国内において実際に見られた障害者の生活事例をベースとしながらも、文章の内容や生活の経済的レベルは4種においてなるべく同質になるよう配慮した。

同時に、第1、第2研究において、『視覚障害者』『聴覚障害者』『知的障害者』『運動障害者』という4つの単語刺激に対して用いられるイメージ表現が明らかになっており、これらの単語刺激と文章中に示された具体的人物、それぞれから得られるイメージを比較するにあたり、文章中で示される人物像はある程度同質にする必要があると考えられたため、4つの障害者を示す単語から得られた表現語を、最も具体性の高い記述的行為動詞に変換し、刺激文の中に組み込んだ。また、本研究においては、刺激の視覚的な望ましさに加え、刺激の性別がイメージに与える影響については扱わない。そのため、刺激文に登場する具

体的人物に性別を印象付けることがないように、人物名はインドネシア国内で男女共に用いられる名前4種を採用し、文章表現中にも性別を示唆する単語や表現が使われないように配慮した。

文章量に関しては、回答者が続けて文章を読み回答するにあたって負担とならないよう調整を行った。その際、4種の刺激文の文章量が同程度になるように調整した。

なお、4種の刺激文について、インドネシア国内における生活面から見た妥当性、文章校正の観点から、刺激文作成の協力者とは別途、8名のインドネシア人留学生に協力を依頼し、文章構成の検討、文章内容の確認、修正作業が行われた。第1研究により明らかになった、障害者イメージの内容である表現語群のうち、主に第2研究において障害者イメージの構成要素となっていた12種の表現語群を用い、Table 22に示す文章構成を協力者と共に定め、4種の具体的障害者を表す文章を作成し、質問紙における刺激として使用した。

Table 22 具体的障害者の刺激文の文章構成

文章内容	使用する表現語群				
	共通	視覚	聴覚	知的	運動
第一段落 具体的人物の障害の状態 自立生活	『障害がある』 『補助具を使う』 『自立した』 『話すのが難しい』		『手話を使う』		
第二段落 性格に基づく日常の行動	『良い』 『アクティブな』 『我慢強い』 『劣等感の』 『社交的でない』 『利己的な』 『敏感な』 『賢い』			『鈍感な』	

具体的障害者を表現した文章を以下に示す。

具体的視覚障害者について、下記の文章を作成した。

ダニは目が見えない。彼/彼女は点字を使用する。彼/彼女はスラウェシ出身だが、今はバリで観光客相手のマッサージ師をしている。外国人に、彼/彼女は流暢な英語を話す。

彼/彼女は、近所の貧しい人に無料でマッサージをする。お店では、彼/彼女は客とあまり話さない。観光客の中には、お金を払わず逃げてしまう者もいる。彼らはそのことで悲しむが、彼/彼女は怒らない。彼/彼女は、施術が十分でなかったから客は支払わなかったのでは、と考えている。

彼/彼女は、両親に、家と店との移動と、家事のすべてをお願いしている。

具体的聴覚障害者について、下記の文章を作成した。

ディナは耳が聞こえない。コミュニケーションの際、彼/彼女は喋らないが、手話を使う。

彼/彼女は、小学校の前の屋台で揚げ物を売る。彼/彼女は、小学校の下校時間に売るが、2日に1日は売り切れる。来月には別の学校の前でも売ろうと考えている。彼/彼女は今の屋台の商売を兄弟に手伝わせようとしている。

彼/彼女は、売れ残りを貧しい人に無料であげる。売り買いに必要なこと以外は誰かとほとんど話さない。客の中には、彼/彼女がコミュニケーションできないため支払いを減らす者もいるが、彼/彼女は言い返さない。自分が勘定を間違えたかもしれないと思うからだ。

具体的知的障害者について、下記の文章を作成した。

エリは知的障害がある。コミュニケーションの際、彼/彼女は喋らず、絵カードを使う。彼/彼女は掃除者として特殊学校で働いている。

彼/彼女は、両親が道を渡るのを見つけると、手を引いて一緒に歩くが、道を渡り終わると何も言わずに行ってしまう。

彼/彼女は、職場の休み時間に魚の絵を描くが、誰かがその絵をのぞくと隠す。彼/彼女は自分の絵は上手でないと考えるからだ。絵が描き終わるまで掃除をはじめない。そのことで先生は時々彼/彼女を怒る。彼/彼女は悲しくなるが、怒られた理由には気づかない。

具体的運動障害者について、下記の文章を作成した。

アリは右足がない。彼/彼女は、歩くときには杖を使用している。彼/彼女はスマトラ出身だが、今はジャカルタでコンピュータープログラミングの仕事をしている。

彼/彼女は、給料から、弟/妹の学費を支払っている。彼/彼女はあまり他人と話さない。彼/彼女は、自分がより多くの給料を会社からもらえるように、新しいプロジェクトを提案したいと思っているが、自分の計画は未熟だと考えているので、まだ提案していない。

3 分析

計 8 種の障害者イメージとして選択された表現語を集計した。集計後、回答数全体の 5% に満たない表現語については、分析から除外した。

上記の手続きを経て残った表現語について、回答をしている場合を 1、回答していない場合を 0 とした 01 データに置き換え、[回答者の回答]×[表現語]のクロス集計表を作成し、コレスポネンズ分析を行った。

コレスポネンズ分析により得られた次元に対して、命名作業を行った。なお、命名にあたっては、次元を構成する表現語のもつ意味、および先行研究を参考とした。

分析には、SPSS Statistics 21.0、SPSS Categories（日本 IBM 社）を使用した。

4 結果

1) 障害者との接触経験のある男子学生によるイメージの適用

(1) 視覚障害者イメージの適用

具体的視覚障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table23 の通りとなった。12 の表現語のうち、『補助具を使う』『劣等感の』『利己的な』『敏感な』『賢い』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポネンズ分析の結果、イメージを構成する次元が 5 つ得られた。このうち、第 1 次元 (32.6%)、第 2 次元 (27.4%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 60.0%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 2 次元までを抽出した。各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『自立した』(.530) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『社交的でない』(-2.254)、『アクティブな』(-1.916) という表現語であった。『自

立した『アクティブな』はいずれも行動性を示した表現語であるが、マイナスの側では『社交的でない』という、他者との交流活動の少なさを示す語が高い値を示していることが、両極の違いとして挙げられることから、第1次元を『自立と交流性の次元』と命名した。

第2次元は、『社交的でない』(2.102)、『自立した』(.691)がプラスの値を示したのに対し、『アクティブな』(-1.829)という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側で高い値を示した『社交的でない』は刺激文に登場した人物の、他者との交流活動の少なさを示す語である。対して、『アクティブな』は活動性の高さを表す語であることから、第2次元を『交流意欲の低下と活動性の次元』と命名した。

男・接触有群による具体的視覚障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 24 に示した。

Table 23 男・接触有群の具体的視覚障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
視覚障害のある	24	20.34	23.53
補助具を使う	5	4.237	0
良い	22	18.64	21.57
アクティブな	7	5.932	6.86
我慢強い	30	25.42	29.41
劣等感の	1	0.847	0
社交的でない	6	5.085	5.88
利己的な	0	0	0
敏感な	3	2.542	0
自立した	13	11.02	12.75
賢い	3	2.542	0
話すのが難しい	3	2.542	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 24 男・接触有群の具体的視覚障害者に対するイメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元
視覚障害のある	.154	-.418
良い	.210	-.045
アクティブな	-1.916	-1.829
我慢強い	.391	.075
社交的でない	-2.254	2.102
自立した	.530	.691

単語刺激『視覚障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table25 の通りとなった。12 の表現語のうち、『アクティブな』『利己的な』『賢い』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5%に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポネンス分析の結果、イメージを構成する次元が 7 得られた。第 1 次元(29.6%)、第 2 次元 (19.3%)、第 3 次元 (16.9%) までで累積寄与率が 60%に達したため (累積寄与率 65.8%)、イメージの構成次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『敏感な』(.904) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『良い』(-2.054)、『社交的でない』(-1.511)、『我慢強い』(-.599) という表現語であった。『敏感な』という表現語は『傷つきやすい』という意味も含む。対極には道徳的な人物評価や人当たりの良さといった意味を含む『良い』という言葉や、他者との交流自体が少ないことを示す『社交的でない』、困難に耐える様子を示す『我慢強い』と、いずれも対人的な困難に対応しうる状況を示す語が含まれる。したがって第 1 次元を『他者との交流ストレスの対応に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『社交的でない』(1.345)、『劣等感の』(.653) がプラスの値を示したのに対し、『自立した』(-1.377)、『我慢強い』(-1.084) という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側には他者との交流の少なさを示す『社交的でない』という言葉に加え、刺激文内の人物に対する評価の低さを示す語である『劣等感の』という言葉が+.400 を超える値を示している。マイナスの側にある『自立した』や『我慢強い』は、いずれも生活能力やストレスに対応する能力の高さを示す語である。能力に言及する表現語によりこの次元が校正されていることから、第 2 次元を『視覚障害者の能力評価に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『良い』(1.158)、『視覚障害のある』(.643)、『敏感な』(-.543) がプラスの値を示し、『劣等感の』(-1.531)、『社交的でない』(-1.042)、『自立した』(-.753) がマイナスに位置した。プラスの側では、道徳的であり他者との交流能力の高いことを示す語、障害の具体的な状態を示す語、感覚に敏感であることを示す語が+.400 以上の値を示している。対してマイナスに位置したのは、交流性の少なさや人物評価の低さを示す語である。したがって第 3 次元を『視覚障害者の交流能力に関する次元』と命名した。

男・接触有群による単語刺激『視覚障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 26 に示した。

Table 25 男・接触有群の単語刺激『視覚障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
視覚障害のある	20	16.95	18.35
補助具を使う	22	18.64	20.18
良い	7	5.93	7.34
アクティブな	2	1.70	0
我慢強い	16	13.56	14.68
劣等感の	9	7.63	8.26
社交的でない	7	5.93	7.34
利己的な	1	0.85	0
敏感な	15	12.71	13.76
自立した	11	9.32	10.09
賢い	3	2.54	0
話すのが難しい	2	1.70	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 26 男・接触有群の単語刺激『視覚障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
視覚障害のある	.345	.447	.643
補助具を使う	.449	.318	.131
良い	-2.054	-.165	1.158
我慢強い	-.599	-1.084	-.173
劣等感の	.356	.653	-1.531
社交的でない	-1.511	1.345	-1.042
敏感な	.904	.083	.543
自立した	.415	-1.377	-.753

(2) 聴覚障害者イメージの適用

具体的聴覚障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 27 の通りとなった。12 の表現語のうち、『補助具を使う』『アクティブな』『社会的でない』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 7 得られた。第 1 次元(23.9%)、第 2 次元 (23.1%)、第 3 次元 (16.2%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 63.2%)、イメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『話すのが難しい』(2.132)、『良い』(1.105)、『自立した』(.800) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『聴覚障害のある』(-.758)、『劣等感の』(-.548) という表現語であった。『話すのが難しい』『聴覚障害のある』はいずれも、刺激文中の人物が口話による交流に困難を示していることを表した語である。しかし、プラスの側には対人能力の高さを示す語や自立を表す語が、対してマイナス側には能力評価の低さを示す語が一定の値を示していることから、第 1 次元を『聴覚障害者の交流能力評価に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『利己的な』(1.730)、『話すのが難しい』(.958) がプラスの値を示したのに対し、『我慢強い』(-1.320)、『良い』(-.816) という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側に示されたのは、他者に依存し、自己の利益を優先する様を表す語や、他者とのコミュニケーションに困難を示す語である。対してマイナスの側に示されたのは、インドネシアにおいていずれも美德とされる人物像であり、人当たりの良さを示す語である。したがって、第 2 次元を『人当たりの良さに関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『話すのが難しい』(1.676)、『劣等感の』(1.056) がプラスの位置にあるのに対し、『利己的な』(-1.144)、『良い』(-.990) がマイナスに位置した。プラス側に示されているのは、能力の状態や評価に関する表現語である。それに対してマイナス側にあるのは、意味は異なるが、いずれも人の性格を表す形容詞である。したがって第 3 次元を、『対人能力と性格に関する次元』と命名した。

男・接触有群による具体的聴覚障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 28 に示した。

Table 27 男・接触有群の具体的聴覚障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
聴覚障害のある	21	17.95	19.81
補助具を使う	1	0.85	0
良い	11	9.40	10.38
アクティブな	5	4.27	0
我慢強い	13	11.11	12.26
劣等感の	12	10.26	11.32
社交的でない	4	3.42	0
利己的な	9	7.69	8.49
敏感な	19	16.24	17.92
自立した	15	12.82	14.15
賢い	1	0.85	0
話すのが難しい	6	5.13	5.66

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 28 男・接触有群の具体的聴覚障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
聴覚障害のある	-.758	-.290	.382
良い	1.105	-.816	-.990
我慢強い	-.326	-1.320	-.021
劣等感の	-.548	.301	1.056
利己的な	-.372	1.730	-1.144
敏感な	-.362	.481	-.324
自立した	.800	-.123	-.209
話すのが難しい	2.132	.958	1.676

単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 29 の通りとなった。12 の表現語のうち、『良い』『自立した』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 8 得られた。このうち、第 1 次元 (26.2%)、第 2 次元 (20.3%)、第 3 次元 (15.5%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 62.0%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『我慢強い』(2.364)、『アクティブな』(2.055) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『利己的な』(-.886)、『話すのが難しい』(-.634) という表現語であった。プラス側に示された表現語は、他者との交流上のストレス耐性や、活動の積極性を示すものであり、マイナス側に示された表現語は他者との交流で自己を押し通そうとする態度や、交流に積極的でない様子を示すものであることから、第 1 次元を『交流態度に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『社交的でない』(1.837)、『劣等感の』(1.247)、『利己的な』(.941)、『我慢強い』(.836) がプラスの値を示したのに対し、『アクティブな』(-.702)、『聴覚障害のある』(-.376)、『補助具を使う』(-.566) という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側の表現語群は、他者との交流困難に関係したものや、交流態度に関連したものという、聴覚障害者の他者との交流上の性格に関する表現語である。対してマイナス側の表現語群は、活動性の高さを示す語とあわせて、障害の具体的な状態が示されている。したがって第 2 次元を『聴覚障害者の交流上の性格と障害の具体的特徴に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『社交的でない』(1.620) がプラスの値を示し、『利己的な』(-1.491)、『劣等感の』(-.929)、『敏感な』(-.868) がマイナスに位置した。プラスの側の表現語は、他者との交流をあまり積極的に行わない様子や、他者に依存し自分の理を優先させる様子、マイナスの側は聴覚障害者の能力が低く評価されることを示す語、対人上の心的な傷つきやすさを示す語である。いずれも、他者との交流を前提として、様々な困難さを示していることから、第 3 次元を『交流困難の次元』と命名した。

男・接触有群による単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 30 に示した。

Table 29 男・接触有群の単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
聴覚障害のある	18	15.13	15.13
補助具のある	22	18.49	18.49
良い	3	2.521	0
アクティブな	4	3.361	5.04
我慢強い	5	4.202	5.04
劣等感の	10	8.403	8.40
社交的でない	8	6.723	6.72
利己的な	6	5.042	5.04
敏感な	14	11.76	11.76
自立した	2	1.681	0
賢い	3	2.521	0
話すのが難しい	20	16.81	16.81

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 30 男・接触有群の単語刺激『聴覚障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
聴覚障害のある	.083	-.576	.496
補助具を使う	-.472	-.566	.042
アクティブな	2.055	-.702	-.375
我慢強い	2.364	.836	.201
劣等感の	-.498	1.247	-.929
社交的でない	-.048	1.837	1.620
利己的な	-.886	.941	-1.491
敏感な	.411	-.215	-.868
話すのが難しい	-.634	-.388	.431

(3) 知的障害者イメージの適用

具体的知的障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 31 の通りとなった。12 の表現語のうち、『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 10 得られた。このうち、第 1 次元 (19.3%)、第 2 次元 (15.4%)、第 3 次元 (13.5%)、第 4 次元 (11.5%)、第 5 次元 (10.5%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 70.5%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 5 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『利己的な』(1.290)、『知的障害のある』(1.021)、『劣等感の』(.667) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『アクティブな』(-1.674)、『敏感な』(-1.236)、『補助具を使う』(-1.137) という表現語であった。プラスの側の表現語からは、知的障害という具体的特徴と、利己的な態度や他人に依存する傾向がうかがえる。対して、マイナスの側からは、活動性の高さに加え、対人上敏感な様子や補助具を用いて課題解決をすることを示す語がみられた。このことから、第 1 次元を『障害の状態と課題への対処方法に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『敏感な』(1.541)、『利己的な』(1.214)、『我慢強い』(1.184)、『社交的でない』(.948) がプラスの値を示したのに対し、『自立した』(-1.489) という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側の表現語はいずれも対人上の性格を示す語である。そのため、第 2 次元を『対人上の性格と自立の次元』と命名した。

第 3 次元は、『我慢強い』(-2.421)、『良い』(.680) という単語がプラスの値を示した。対して、-.400 を超える重み係数を示したのは、『アクティブな』(-1.165)、『社交的でない』(-.743)、『知的障害のある』(-.657) であった。プラス側の 2 つの表現語はインドネシアにおいて美德とされる対人上模範的な態度である。他方、マイナスの側にある表現語は行動的な特徴と具体的な障害を示す。このことから、第 3 次元を『模範的対人態度と行動特徴の次元』と命名した。

第 4 次元では、『社交的でない』(1.448)、『良い』(.670)、『自立した』(.505) がプラスの値を示したのに対し、『話すのが難しい』(-1.482)、『知的障害のある』(-.644) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側には示されたのは、ひとりで課題解決をする様

子を示す『自立した』を含めて、いずれも何らかの他者との交流の状態を示す語であるが、マイナスの側に示されたのは、具体的な障害の状態やそれに伴う能力である。したがって第4次元を『交流状況と障害の具体的特徴に関する次元』と命名した。

第5次元は、『社交的でない』(1.481)、『アクティブな』(1.165)、『我慢強い』(.699)がプラスの値を示したのに対し、『敏感な』(-1.292)、『劣等感の』(-.871)という表現語がマイナスの値を示した。プラス側では、何らかの活動性に関する表現語が示され、マイナス側では、他者との交流上感じる刺激や劣等感といった、ストレスに関する表現語が示されている。そのため、第5次元を『活動状態と対人ストレスに関する次元』と命名した。

男・接触有群による具体的知的障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 32 に示した。

Table 31 男・接触有群の具体的知的障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
知的障害のある	10	8.48	8.62
補助具を使う	12	10.17	10.34
良い	18	15.25	15.52
アクティブな	7	5.93	6.03
我慢強い	4	3.39	5.17
劣等感の	18	15.25	15.52
社交的でない	6	5.09	6.03
利己的な	5	4.24	6.03
敏感な	8	6.78	6.90
自立した	10	8.48	8.62
賢い	2	1.70	0
話すのが難しい	13	11.02	11.21

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 32 男・接触有群の具体的知的障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元	第5次元
知的障害のある	1.021	-.275	-.657	-.644	.160
補助具を使う	-1.137	-.285	-.330	-.449	-.365
良い	.095	-.498	.680	.670	-.226
アクティブな	-1.674	.118	-1.165	-.111	1.165
我慢強い	-.117	1.184	2.421	-.368	.699
劣等感の	.667	-.203	-.429	.312	-.871
社交的でない	.437	.948	-.743	1.448	1.481
利己的な	1.290	1.214	-.226	-.032	.181
敏感な	-1.236	1.541	-.017	.178	-1.292
自立した	-.427	-1.489	.496	.505	.456
話すのが難しい	.324	-.132	.122	-1.482	.329

単語刺激『知的障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 33 の通りとなった。12 の表現語のうち、『賢い』は、全体の回答数の 5%に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 10 得られた。このうち、第 1 次元 (17.9%)、第 2 次元 (17.0%)、第 3 次元 (12.9%)、第 4 次元 (10.9%)、第 5 次元 (10.4%) までで累積寄与率が 60%に達したため (累積寄与率 69.2%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 5 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『劣等感の』(1.177)、『社交的でない』(.979)、『我慢強い』(.937) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『自立した』(-1.973)、『アクティブな』(-1.173)、『話すのが難しい』(-.528)、『利己的な』(-.526) という表現語であった。プラス側の表現語は他者との交流に関連しているが、いずれも受け身の様子を示しているのに対し、マイナスの側では、能力の観点から交流困難に関連した語はあるが、-1 を下回る語としては、自立や積極的な行動、能動性を示す語がみられている。このことから、第 1 次元を『知的障害者の受動性・能動性に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『補助具を使う』(1.631)、『知的障害のある』(.612)、『話すのが難しい』(.552) がプラスの値を示したのに対し、『利己的な』(-1.718)、『社交的でない』(-1.244)、『良い』(-.807) という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側に示された語は、障害による具体的な状態や、障害に起因する困難を表現するものである。対してマイナスの側には、他者との交流上の性格を表した語が示されている。したがって、第 2 次元を『知的障害者の具体的特徴と交流上の性格に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『利己的な』(1.215)、『劣等感の』(.774)、『補助具を使う』(.603) がプラスの値を示し、『我慢強い』(-1.861)、『良い』(-1.322) がマイナスに位置した。プラスの側に位置したのは、対人上問題のある状態や、低い評価を示す語である。他方、マイナス側には、対人上模範となる態度が示されている。したがって第 3 次元を『能力評価と模範的態度に関する次元』と命名した。

第 4 次元は、『自立した』(1.424)、『我慢強い』(1.223) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『良い』(-1.598)、『話すのが難しい』(-.796) という表現語であった。プラス側に位置した表現語は、日常生活やストレといった課題を

個人の能力で対処していることを示しているが、マイナス側に位置した表現語は、人当たりの良さや、他者とのコミュニケーション困難といった、『他者とのやりとり』に関連している。このことから、第4次元を『独立性と交流性に関する次元』と命名した。

第5次元は、『劣等感の』(1.567)、『アクティブな』(1.404)、『社交的でない』(.610)がプラスの値を示したのに対し、『利己的な』(-1.023)、『知的障害のある』(-.536)という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側に示された表現語をみると、行動としては能動性がある一方で他者とのやりとりが少なく、低い評価を受ける様子うかがえる。対してマイナス側の表現語は自身の主張を押し通す『利己的な』という語が+1を超える値を示していることから、第5次元を『知的障害者の自己主張に関する次元』と命名した。

男・接触有群による単語刺激『知的障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 34 に示した。

Table 33 男・接触有群の単語刺激『知的障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
知的障害のある	19	16.00	16.38
補助具を使う	8	6.72	6.90
良い	8	6.72	6.90
アクティブな	9	7.56	7.76
我慢強い	8	6.72	6.90
劣等感の	8	6.72	6.90
社交的でない	9	7.56	7.76
利己的な	8	6.72	6.90
敏感な	17	14.29	14.66
自立した	7	5.88	6.03
賢い	0	0	0
話すのが難しい	15	12.61	12.93

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 34 男・接触有群の単語刺激『知的障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元	第5次元
知的障害のある	.277	.612	-.124	.241	-.536
補助具を使う	.148	1.631	.603	.426	-.024
良い	-.440	-.807	-1.322	-1.598	-.412
アクティブな	-1.173	.086	-.547	-.091	1.404
我慢強い	.937	-.221	-1.861	1.223	-.217
劣等感の	1.177	-.218	.774	-.205	1.567
社交的でない	-.886	-1.244	.217	.177	.610
利己的な	-.526	-1.718	1.215	.358	-1.023
敏感な	.461	.171	.349	-.294	-.479
自立した	-1.973	-.246	.118	1.424	.226
話すのが難しい	-.528	.552	.219	-.796	-.035

(4) 運動障害者イメージの適用

具体的運動障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 35 の通りとなった。12 の表現語のうち、『我慢強い』『利己的な』『敏感な』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 7 得られた。このうち、第 1 次元 (26.5%)、第 2 次元 (20.3%)、第 3 次元 (18.6%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 65.4%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『社交的でない』(1.313)、『賢い』(1.218)、『アクティブな』(.638) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『良い』(-1.601)、『運動障害のある』(-1.081) という表現語であった。プラス側の表現語群は、刺激文中の人物の能力や活動性に着目した内容であるのに対し、マイナス側の表現語は、人物の性格や身体的特徴を示すものであった。したがって第 1 次元を、『能力と人物の性格的・身体的特徴に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『アクティブな』(1.091)、『補助具を使う』(.772) がプラスの値を示したのに対し、『良い』(-2.022)、『賢い』(-.901)、『自立した』(-.598) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置したのは、行動の能動性や、具体的な行動特徴を含む、行動特徴に関連する表現語であった。他方、マイナス側には、能力の高さを示す語が位置している。このことから第 2 次元を『行動特徴と能力に関する次元』と命名した。

第 3 次元では、+.400 を超える重み係数を示したのは『賢い』(.694)、『補助具を使う』(.654) であった。対して、マイナスの重み係数を示したのは『アクティブな』(-2.608)、『良い』(-.504) であった。プラスの側には、器用さも意味として含む“能力の高さ”を示す語と、具体的に補助具を使用する状態を示す語が位置している。対してマイナス側には、活動の多さや他者と交流するうえでの人の良さを示す語が位置している。そのため、第 3 次元を『補助具の使用と対人活動性に関する次元』と命名した。

男・接触有群による具体的運動障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 36 に示した。

Table 35 男・接触有群の具体的運動障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
運動障害のある	15	12.4	13.39
補助具を使う	18	14.88	16.07
良い	6	4.96	5.36
アクティブな	6	4.96	5.36
我慢強い	1	0.83	0
劣等感の	24	19.83	21.43
社交的でない	12	9.92	10.71
利己的な	4	3.31	0
敏感な	2	1.65	0
自立した	20	16.53	17.86
賢い	11	9.09	9.82
話すのが難しい	2	1.65	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 36 男・接触有群の具体的運動障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
運動障害のある	-1.081	.401	-.056
補助具を使う	-.325	.772	.654
良い	-1.601	-2.022	-.504
アクティブな	.636	1.091	-2.608
劣等感の	.079	.415	.416
社交的でない	1.313	-.203	-.206
自立した	-.160	-.598	-.370
賢い	1.218	-.901	.694

単語刺激『運動障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 37 の通りとなった。12 の表現語のうち、『利己的な』『賢い』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 8 得られた。このうち、第 1 次元 (24.4%)、第 2 次元 (18.0%)、第 3 次元 (14.9%)、第 4 次元 (11.8%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 69.1%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『アクティブな』(2.024)、『良い』(1.589)、『社交的でない』(.977)、『自立した』(.746) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『敏感な』(-1.065)、『劣等感の』(-.588) という表現語であった。プラス側の表現語群は、運動障害者の性格や行動特徴を示しているのに対し、マイナスの値を示したのは、他者からの反応にストレスを受ける様子を表す語である。したがって第 1 次元を『行動とストレスに関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『アクティブな』(1.127)、『社交的でない』(.741)、『補助具を使う』(.608) がプラスの値を示したのに対し、『我慢強い』(-2.135)、『自立した』(-1.134) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側、マイナス側それぞれに、『社交的でない』『自立した』という単独での行動を示す語が位置しているが、プラス側では行動の能動性を示す語『アクティブな』が、マイナス側では外界からのストレスに対して耐えるという受け身の姿勢を示す語『我慢強い』が示されている。そのため、第 2 次元を『行動における能動性・受動性に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『社交的でない』(1.768)、『我慢強い』(1.038) がプラスの値を示し、『良い』(-1.895) がマイナスに位置した。プラス側に位置しているのは他者との交流の少なさや、ストレスに耐えることを示す語が位置しているが、マイナス側には他者との交流能力の高さを示す語が位置している。このことから、第 3 次元を『対人交流上の特徴に関する次元』と命名した。

第 4 次元は、『アクティブな』(1.164)、『劣等感の』(1.089) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『自立した』(-.856)、『補助具を使う』(-.696)、『敏感な』(-.661)、『良い』(-.644) という表現語であった。プラス側には、運

動障害者の活力を示す語と合わせて、他者との比較による評価の低さが示されている。対して、マイナスに位置したのは、補助具の活用も含め単独で課題を行い生活する行動特徴を示す語と、外界からの様々な刺激を感じ取る特徴を示す語である。これらに伴い、第 4 次元を『行動評価と行動特徴に関する次元』と命名した。

男・接触有群による単語刺激『運動障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 38 に示した。

Table 37 男・接触有群の単語刺激『運動障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
運動障害のある	26	21.49	23.01
補助具を使う	20	16.53	17.70
良い	6	4.96	5.31
アクティブな	6	4.96	5.31
我慢強い	7	5.79	6.19
劣等感の	18	14.88	15.93
社交的でない	9	7.44	7.96
利己的な	2	1.65	0
敏感な	12	9.92	10.62
自立した	9	7.44	7.96
賢い	3	2.48	0
話すのが難しい	3	2.48	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 38 男・接触有群の単語刺激『運動障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
運動障害のある	-.420	.091	-.324	.226
補助具を使う	-.218	.608	.151	-.696
良い	1.589	-.406	-1.895	-.644
アクティブな	2.024	1.127	-.374	1.164
我慢強い	.208	-2.135	1.038	.126
劣等感の	-.588	-.275	-.144	1.089
社交的でない	.977	.741	1.768	.009
敏感な	-1.065	.382	-.105	-.661
自立した	.746	-1.134	-.032	-.856

2) 障害者との接触経験のない男子学生による障害者イメージの適用

(1) 視覚障害者イメージの適用

具体的視覚障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 39 の通りとなった。12 の表現語のうち、『補助具を使う』『アクティブな』『劣等感の』『社交的でない』『利己的な』『敏感な』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 4 つ得られた。このうち、第 1 次元 (40.3%)、第 2 次元 (35.4%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 75.7%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 2 次元までを抽出した。

各次元の表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、第 1 次元は、『良い』(.554) がプラスの値を示し、マイナスの値を示したのは、『賢い』(-2.785)、『自立した』(-.693) であった。このように、一方に人間的な温かさ、対極に能力の高さに関連する語を置く配置は、Fiske ら (2002) が示したステレオタイプ内容モデルの温かさと有能さの相補性との共通性がみられる。そのため第 1 次元を『温かさと有能さの次元』と命名した。

第 2 次元は、『自立した』(1.921) がプラスの値を示したのに対し、『賢い』(-1.285)、という表現語がマイナスの値を示した。両極ともに、有能さを示す語が位置しているが、プラス側の『自立した』は能力を活かして単独で課題を解決する様子を示す語であるのに対し、マイナス側の『賢い』は知性の高さや器用さといった能力の高さそのものに着目して評価する語である。したがって、第 2 次元を『能力の活用と評価の次元』と命名した。

男・接触無群による具体的視覚障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 40 に示した。

Table 39 男・接触無群の具体的視覚障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
視覚障害のある	28	22.95	26.42
補助具を使う	1	0.82	0
良い	25	20.49	23.58
アクティブな	3	2.46	0
我慢強い	36	29.51	33.96
劣等感の	1	0.82	0
社会的でない	4	3.28	0
利己的な	0	0	0
敏感な	5	4.10	0
自立した	11	9.02	10.38
賢い	6	4.92	5.66
話すのが難しい	2	1.64	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 40 男・接触無群の具体的視覚障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元
視覚障害のある		
良い		
我慢強い		
自立した		
賢い		

単語刺激『視覚障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 41 の通りとなった。12 の表現語のうち、『アクティブな』『利己的な』『敏感な』『賢い』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 6 得られた。このうち、第 1 次元 (29.1%)、第 2 次元 (22.0%)、第 3 次元 (18.3%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 69.4%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『劣等感の』(1.807)、『補助具を使う』(.803) という表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『良い』(-1.352)、『我慢強い』(-.816) という表現語であった。プラス側の語は、他者との相対的な能力評価の低さや、個人の抱える課題に対して補助具を用いて対応する工夫が示されているのに対して、マイナス側に示されたのは、インドネシアにおける模範的な態度である。したがって、第 1 次元を『能力評価と模範的態度に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『社交的でない』(2.538) がプラスの値を示したのに対し、『良い』(-1.017)、『自立した』(-.680) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に示されたのは、他者との交流に積極的でない様子である。対して、マイナス側に示されたのは、交流能力の高さや、単独の課題解決能力の高さを示す語である。そのため、第 2 次元を『交流抵抗感と個人の能力の高さに関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『自立した』(1.813) がプラスの値を示し、『良い』(-1.072) がマイナスに位置した。プラスに位置した『自立した』は単独で改題解決を行う能力の高さを示す語であり、マイナスに位置した『良い』は、道徳心の高さや人当たりの良さという、対人能力の高さを示す語である。プラス側、マイナス側に示された語の共通性としては、優秀な能力、すなわち特性であることから、第 3 次元を『能力特性に関する次元』と命名した。

男・接触無群による単語刺激『視覚障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 42 に示した。

Table 41 男・接触無群の単語刺激『視覚障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目の除外後の%
視覚障害のある	27	22.13	26.47
補助具を使う	16	13.11	15.69
良い	9	7.38	8.82
アクティブな	3	2.46	0
我慢強い	22	18.03	21.57
劣等感の	9	7.38	8.82
社交的でない	7	5.74	6.86
利己的な	2	1.64	0
敏感な	5	4.10	0
自立した	12	9.84	11.76
賢い	5	4.10	0
話すのが難しい	5	4.10	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 42 男・接触無群の単語刺激『視覚障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
視覚障害のある	.007	-.093	-.156
補助具を使う	.803	-.045	-.473
良い	-1.352	-1.017	-1.072
我慢強い	-.816	.228	.132
劣等感の	1.807	-.251	-.469
社交的でない	-.135	2.538	.142
自立した	.146	-.680	1.813

(2) 聴覚障害者イメージの適用

具体的聴覚障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 43 の通りとなった。12 の表現語のうち、『補助具を使う』『アクティブな』『社会的でない』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージの次元が 7 得られた。このうち、第 1 次元 (28.5%)、第 2 次元 (19.5%)、第 3 次元 (14.2%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 62.2%)、本研究では第 3 次元までを抽出した。

各次元の表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。

第 1 次元は、『我慢強い』(1.301)、『自立した』(.978)、『良い』(.810) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『劣等感の』(-1.264)、『敏感な』(-.658) という表現語であった。プラス側に示されたのは、ストレスに耐える能力や、課題解決能力、対人能力の高さである。対して、マイナス側に示されたのは、相対的な評価の低さや、ストレスを受ける様子である。したがって第 1 次元を『能力の高さとストレスに関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『我慢強い』(.790)、『話すのが難しい』(.669) がプラスの値を示したのに対し、『利己的な』(-1.973)、『自立した』(-.688) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に示された表現語は、外界からのストレスに耐える様子、他者とのコミュニケーションに困難がある様子を示し、マイナス側に示された表現語は、他者に依存し我を通す態度、独自に課題解決を行っていく様子を示している。いずれも、他者との交流が少ない状態、あるいは問題がある状態を示しているが、プラス側の語と比較して、マイナス側に位置した語は何らかの能動性を含む。このことから、第 2 次元を『交流における課題と活動能動性に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『劣等感の』(2.112) が単独で+2 を超える位置にあるのに対し、『話すのが難しい』(-1.010)、『利己的な』(-.556) がマイナスに位置した。プラス側に位置したのは、相対的に能力評価の低さを示す語であり、マイナス側に位置したのは、コミュニケーション困難と、対人交流上の問題を表す語である。そのため、第 3 次元を『対人交流上の劣等感と困難に関する次元』と命名した。

男・接触無群による具体的聴覚障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 44 に示した。

Table 43 男・接触無群の具体的聴覚障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目削除後の%
聴覚障害のある	23	18.85	19.66
補助具を使う	1	0.82	0
良い	18	14.75	15.38
アクティブな	3	2.46	0
我慢強い	12	9.84	10.26
劣等感の	8	6.56	6.84
社会的でない	2	1.64	0
利己的な	11	9.02	9.40
敏感な	18	14.75	15.38
自立した	14	11.48	11.97
賢い	0	0	0
話すのが難しい	12	9.84	10.26

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 44 男・接触無群の具体的聴覚障害者イメージの各次元の表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
聴覚障害のある	-.391	.317	-.273
良い	.810	.313	.361
我慢強い	1.301	.790	-.173
劣等感の	-1.264	.017	2.112
利己的な	-.163	-1.973	-.556
敏感な	-.658	.044	-.029
自立した	.978	-.688	.269
話すのが難しい	-.930	.669	-1.015

単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 45 の通りとなった。12 の表現語のうち、『アクティブな』『利己的な』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 8 得られた。このうち、第 1 次元 (20.8%)、第 2 次元 (17.0%)、第 3 次元 (15.7%)、第 4 次元 (14.3%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 67.8%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元の表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。

第 1 次元は、『自立した』(1.864)、『敏感な』(1.458)、『良い』(1.211) がプラスの値を示し、マイナスの値を示したのは、『社交的でない』(-1.117)、『話すのが難しい』(-.697) であった。プラス側は様々な個人の性格・特徴を示した語であるが、マイナス側に位置したのは、他者との交流に積極的でなく、コミュニケーションに困難がある様子を示す語である。従って、第 1 次元を『性格・特徴と交流困難に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『敏感な』(1.212) がプラスの値を示したのに対し、『我慢強い』(-2.665)、『アクティブな』(-.863)、『劣等感の』(-.674) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置する表現語は、外界からの刺激に反応し、ストレスに対して精神的に傷つく様子も示されている。対してマイナス側の表現語は、ストレスに対して耐える様子や、相対的評価の低さを認識する様子、活動性の高さであり、ストレスを受けた後の行動や変化を示す。よって、第 2 次元を『ストレスとそれに対する反応に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『自立した』(1.437)、『我慢強い』(.788)、『社交的でない』(.787) がプラスの値を示し、『良い』(-2.086)、『補助具を使う』(-.784) がマイナスに位置した。プラスの値を示した表現語からは、他者と交流せずに日常生活の困難を耐えつつ、自身の力で送ることが可能である聴覚障害者像が、対してマイナスの値を示した表現語に含まれる『良い』は、人当たりの良さを意味として含んでおり、補聴器を用いて他者との交流能力の高さをみせる聴覚障害者像がうかがえる。したがって第 3 次元を『聴覚障害者の交流能力の次元』と命名した。

第 4 次元は、『劣等感の』(1.462)、『敏感な』(1.461)、『社交的でない』(.594) がプラスの値を示したのに対し、『自立した』(-1.490) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置したのは、他者と比較した上での評価の低さ、外界の様々な刺激に反応し傷つく様子、他者との交流に関して積極的でない様子を示しており、これらの語は、他者

との交流の抑制という共通性がみられる。他方、マイナス側に位置したのは、個人で課題解決を行う能力を発揮している自立の様子を示す語である。したがって、第4次元を『交流抵抗感と自立に関する次元』と命名した。

男・接触無群による単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 46 に示した。

Table 45 男・接触無群の単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
聴覚障害のある	29	23.77	25.89
補助具を使う	16	13.11	14.29
良い	4	3.28	5.36
アクティブな	2	1.64	0
我慢強い	5	4.10	5.36
劣等感の	9	7.38	8.04
社交的でない	10	8.20	8.93
利己的な	3	2.46	0
敏感な	8	6.56	7.14
自立した	6	4.92	6.25
賢い	2	1.64	0
話すのが難しい	21	17.21	18.75

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 46 男・接触無群の単語刺激『聴覚障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
聴覚障害のある	-.106	.259	.205	-.250
補助具を使う	-.335	.002	-.784	-.417
良い	1.211	-.863	-2.086	-.121
我慢強い	.145	-2.665	.788	.174
劣等感の	.156	-.674	.447	1.462
社交的でない	-1.117	.471	.787	.594
敏感な	1.458	1.212	-.287	1.461
自立した	1.864	.287	1.437	-1.490
話すのが難しい	-.697	.155	-.251	-.322

(3) 知的障害者イメージの適用

具体的知的障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 47 の通りとなった。12 の表現語のうち、『我慢強い』『自立した』は、全体の回答数の 5%に満たなかったため、分析からは除外した。

分析の結果、イメージを構成する 9 の次元が得られた。このうち、第 1 次元 (20.2%)、第 2 次元 (19.4%)、第 3 次元 (14.1%)、第 4 次元 (12.6%) までで累積寄与率が 60%に達したため (累積寄与率 66.3%)、本研究では第 4 次元までを抽出した。

各次元の表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。

第 1 次元は、『社交的でない』(1.072)、『知的障害のある』(.916)、『劣等感の』(.701)、といった表現語がプラスの値を示し、マイナスの値を示したのは、『アクティブな』(-1.841)、『賢い』(-1.614)、『敏感な』(-.810) という表現語であった。プラス側に位置する語は、他者との交流に積極的でない状態や低評価を受ける様子、障害の具体的な状態を示す語であり、いずれも他者とのやりとりに課題があり、交流に対する能動性がみられ難い状態である。他方、マイナス側の表現語は活動の能動性や能力の高さ、外界の刺激を受けやすい状態を示している。よって、第 1 次元を『対人交流上の能動性に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『話すのが難しい』(1.148)、『敏感な』(1.035)、『補助具を使う』(1.002) がプラスの値を示したのに対し、『賢い』(-1.537)、『社交的でない』(-1.175)、『アクティブな』(-.698) がマイナスの値を示した。プラス側の語は、コミュニケーション上の困難や、対人ストレスを含め外界の刺激に反応しやすい状態、また個人の状態に対応して補助具を用いる様子を示すものである。対して、マイナス側の表現語は、能力の高さや活動の能動性の高さを示す語と共に、他者との交流に対して積極的でない様子を示している。この、能力の高さと“冷たさ”の組み合わせは、Fiske ら (2002) のステレオタイプ内容モデルにおいて回答集団 (この場合は接触無・男群) から競争相手となりうる集団に対して向けられるものである。そのため、第 2 次元を『能力と競争可能性の次元』と命名した。

第 3 次元は、『補助具を使う』(.964)、『アクティブな』(.542) という単語がプラスの値を示した。対して、-.400 を超える重み係数を示したのは『利己的な』(-2.782) のみであった。プラス側の語は、障害の状態に対応する様子や、活動の能動性を示す。対して、マイナス側に示されたのは、自己の利益を優先する様子や他者に依存する様子を示す語である。プラス・マイナス側に示された語をみると、いずれも何らかの課題に対する対処行動とみることが可能であることから、第 3 次元を『課題解決方法に関する次元』と命名した。

第 4 次元では、『社交的でない』(1.319)、『話すのが難しい』(.735)、『補助具を使う』(.593)、『賢い』(.562) がプラスの値を示したのに対し、『良い』(-1.023)、『知的障害のある』(-.884) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側の、他者との交流の少なさ・むずかしさと有能さを示す表現語群と、マイナスに位置する、道徳心や優しさと障害の状態を示す表現語群という組み合わせは、Fiske ら (2002) のステレオタイプ内容モデルにおいて、社会に比較的多いとされる“有能だが冷たい”“温かいが有能でない”という、社会集団へのイメージにおける『有能さ』と『温かさ』の両面価値性にもみられる。このことから、第 4 次元を『有能さと温かさの両面価値性に関する次元』と命名した。

男・接触無群による具体的知的障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 48 に示した。

Table 47 男・接触無群の具体的知的障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目の除外後の%
知的障害のある	11	9.02	9.40
補助具を使う	13	10.66	11.11
良い	20	16.39	17.09
アクティブな	8	6.56	6.84
我慢強い	3	2.46	0
劣等感の	22	18.03	18.80
社交的でない	9	7.38	7.69
利己的な	6	4.92	5.13
敏感な	8	6.56	6.84
自立した	2	1.64	0
賢い	5	4.10	5.13
話すのが難しい	14	11.48	11.97

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 48 男・接触無群の具体的知的障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
知的障害のある	.916	-.718	.347	-.884
補助具を使う	.002	1.002	.964	.593
良い	-.241	.078	-.012	-1.023
アクティブな	-1.841	-.698	.542	.268
劣等感の	.701	-.122	.039	-.189
社交的でない	1.072	-1.175	.206	1.319
利己的な	-.178	-.496	-2.782	.406
敏感な	-.810	1.035	-.445	-.435
賢い	-1.614	-1.537	.356	.562
話すのが難しい	.114	1.148	-.361	.735

単語刺激『知的障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 49 の通りとなった。12 の表現語のうち、『我慢強い』『自立した』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 9 得られた。このうち、第 1 次元 (23.3%)、第 2 次元 (17.0%)、第 3 次元 (13.4%)、第 4 次元 (12.8%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 66.5%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元の表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。

第 1 次元は、『良い』(2.409)、『賢い』(2.035)、『アクティブな』(.743) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『話すのが難しい』(-.899)、『補助具を使う』(-.753)、『利己的な』(-.646) という表現語であった。プラス側に位置するのは、行動の多さ・質の高さを示す語であるのに対し、マイナス側に位置したのはコミュニケーション困難や、対人上の問題、何らかの困難を示す表現語である。そのため、第 1 次元を『行動の量と質に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『社交的でない』(1.033)、『話すのが難しい』(.790)、『賢い』(.573) がプラスの値を示したのに対し、『補助具を使う』(-1.947)、『利己的な』(-1.291)、『アクティブな』(-.607)、『敏感な』(-.518) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置する表現語は主に、コミュニケーションに対して消極的であり、スキルの面から見たコミュニケーション困難がある様子を示している。対してマイナス側の表現語はいずれも何らかの活動性を示す語である。このことから、第 2 次元を『コミュニケーション困難と活動性に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『利己的な』(1.186)、『劣等感の』(.918) がプラスの値を示し、『補助具を使う』(-2.012)、『賢い』(-.824)、『知的障害のある』(-.602) がマイナスに位置した。プラスに位置したのは、対人交流上、相手にストレスを与える様子や、自身が他者との比較で能力を低くみられるといった問題を示す語であり、対してマイナスに位置したのは、障害の具体的な状態と有能さを表す語である。このような両極は、河内 (2001) の示した『痛ましき・好ましき』因子と内容が類似している。そのため、第 3 次元を『対人交流上の痛ましきと障害対応に関する好ましきの次元』と命名した。

第 4 次元は、『アクティブな』(2.071)、『良い』(.761) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『敏感な』(-1.278)、『賢い』(-.672) という表現語であった。

プラス側には、活動の能動性を示す語『アクティブな』が+2を超える値を示している。対してマイナス側には、『敏感な』という刺激を受けやすく傷つきやすい様子を示す語が位置している。このことから、第4次元を『能動性と受動性の次元』と命名した。

男・接触無群による単語刺激『知的障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 50 に示した。

Table 49 男・接触無群の単語刺激『知的障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目の除外後の%
知的障害のある	19	15.83	16.96
補助具を使う	6	5	5.357
良い	6	5	5.357
アクティブな	6	5	5.357
我慢強い	3	2.5	0
劣等感の	19	15.83	16.96
社交的でない	16	13.33	14.29
利己的な	7	5.833	6.25
敏感な	14	11.67	12.5
自立した	5	4.167	0
賢い	6	5	5.357
話すのが難しい	13	10.83	11.61

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 50 男・接触無群の単語刺激『知的障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
知的障害のある	-.251	.413	-.602	-.288
補助具を使う	-.753	-1.947	-2.012	.371
良い	2.409	-.045	.327	.761
アクティブな	.743	-.607	-.117	2.071
劣等感の	-.207	-.326	.918	-.248
社交的でない	-.372	1.033	.267	.429
利己的な	-.646	-1.291	1.186	.412
敏感な	.304	-.518	.114	-1.278
賢い	2.035	.573	-.824	-.672
話すのが難しい	-.899	.790	-.339	.242

(4) 運動障害者イメージの適用

具体的運動障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 51 の通りとなった。12 の表現語のうち、『良い』『アクティブな』『我慢強い』『利己的な』『敏感な』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

分析の結果、イメージを構成する次元が 5 得られた。このうち、第 1 次元 (31.0%)、第 2 次元 (26.2%)、第 3 次元 (16.8%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 74.1%)、本研究では第 3 次元までを抽出した。

各次元の表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。

第 1 次元は、『自立した』(1.354) がプラスの値を示し、マイナスの値を示したのは、『賢い』(-1.280)、『運動障害のある』(-.801) という表現語であった。両極とも一定以上の値を示したのは、刺激文中の人物の能力に着目した表現語であるが、プラス側の『自立した』は実際に能力を活用している様子を、マイナス側に位置する表現語は能力そのものに着目していることから、第 1 次元を『能力とその活用に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『社交的でない』(1.201)、『運動障害のある』(.718) がプラスの値を示したのに対し、『賢い』(-1.120)、『自立した』(-.734) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側の表現語は何らかの能力の不足を、プラス側の表現語は能力の高い状態を示す語である。したがって第 2 次元を『能力評価に関する次元』と命名した。

第 3 次元では、+.400 を超える重み係数を示したのは『補助具を使う』(.563) であった。対して、-.400 を下回る重み係数を示したのは『劣等感の』(-1.214) であった。この 2 つの表現語で両極が示される状態は栗田・楠見 (2010) の研究において示されている、身体障害の特性による社会的不利な状態を示す『社会的不利』因子に類似性が見出される。このことから、第 3 因子を『社会的不利に関する次元』と命名した。

男・接触無群による具体的運動障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 52 に示した。

Table 51 男・接触無群の具体的運動障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
運動障害のある	16	13.01	14.81
補助具を使う	25	20.33	23.15
良い	4	3.25	0
アクティブな	4	3.25	0
我慢強い	1	0.81	0
劣等感の	22	17.89	20.37
社会的でない	16	13.01	14.81
利己的な	4	3.25	0
敏感な	2	1.63	0
自立した	16	13.01	14.81
賢い	12	9.76	12.04
話すのが難しい	1	0.81	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 52 男・接触無群の具体的運動障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
運動障害のある	-.801	.718	.328
補助具を使う	-.137	-.325	.563
劣等感の	.354	.169	-1.214
社会的でない	.212	1.201	.295
自立した	1.354	-.734	.427
賢い	-1.277	-1.120	-.321

単語刺激『運動障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 53 の通りとなった。表現語のうち、『良い』『アクティブな』『利己的な』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析から除外した。

分析の結果、イメージを構成する次元が 7 得られた。このうち、第 1 次元 (26.0%)、第 2 次元 (21.5%)、第 3 次元 (18.7%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 66.1%)、本研究では第 3 次元までを抽出した。

各次元の表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。

第 1 次元は、『社交的でない』(.784)、『補助具を使う』(.699)、『自立した』(.649) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『我慢強い』(-1.967)、『話すのが難しい』(-1.323)、『敏感な』(-1.097) という表現語であった。プラス側、マイナス側ともに、対人交流上の困難と、対処手段に関する表現語であるが、対処手段に関しては、いずれも個人の能力の範囲による対応であることから、第 1 次元を『対人交流上の困難と個人による対応手段に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『劣等感の』(1.181)、『話すのが難しい』(.573)、『敏感な』(.533) がプラスの値を示したのに対し、『我慢強い』(-1.619)、『自立した』(-1.422) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側の次元を構成する表現語の内容をみると、栗田・楠見 (2010) の見出した「同情」因子の構成内容に類似している。対して、マイナス側に示された表現語は、困難に耐える様子や自力で問題解決する様子に着目していることが示されている。そのため、第 2 次元を『同情と問題解決能力の評価に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『我慢強い』(1.330)、『社交的でない』(1.029) がプラスの値を示し、『自立した』(-1.533)、『敏感な』(-1.011) がマイナスに位置した。プラス側の表現語については、困難に対して他者と交流するのではなく耐え忍ぶという方法をとっている様子が示され、マイナス側では個人の能力により課題解決をする様子が示されている。このことから第 3 次元を『課題解決方法に関する次元』と命名した。

男・接触無群による単語刺激『運動障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 54 に示した。

Table 53 男・接触無群の単語刺激『運動障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
運動障害のある	22	18.49	21.15
補助具を使う	19	15.97	18.27
良い	3	2.52	0
アクティブな	4	3.36	0
我慢強い	5	4.20	6.73
劣等感の	15	12.61	14.42
社会的でない	13	10.92	12.50
利己的な	4	3.36	0
敏感な	10	8.40	9.62
自立した	10	8.40	9.62
賢い	3	2.52	0
話すのが難しい	7	5.88	7.69

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 54 男・接触無群の単語刺激『運動障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
運動障害のある	.285	-.097	-.059
補助具を使う	.699	-.303	.449
我慢強い	-1.967	-1.619	1.330
劣等感の	-.061	1.181	-.255
社会的でない	-.784	.449	1.029
敏感な	-1.097	.533	-1.011
自立した	.649	-1.422	-1.533
話すのが難しい	-1.323	.573	-.081

3) 障害者との接触経験のある女子学生によるイメージの適用

(1) 視覚障害者イメージの適用

具体的視覚障害者のイメージ：集計した結果、Table 55 の通りとなった。12 の表現語のうち、『補助具を使う』『アクティブな』『劣等感の』『社交的でない』『利己的な』『敏感な』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 4 得られた。このうち、第 1 次元 (46.4%)、第 2 次元 (30.7%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 77.1%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 2 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『自立した』(1.667) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『賢い』(-2.059) であった。『自立した』は能力を活用して課題を解決する様子、『賢い』は能力そのものに着目した表現語であることから、第 1 次元を『能力とその活用に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『良い』(.704) がプラスの値を示したのに対し、『賢い』(-1.478)、『自立した』(-1.443) という表現語がマイナスの値を示した。この、人物的温かさと有能さが対極に示される構造は、Fiske ら (2002) の示すステレオタイプ内容モデルにみられることから、第 2 次元を『温かさと有能さの次元』と命名した。

女・接触有群による具体的視覚障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table56 に示した。

Table 55 女・接触有群の具体的視覚障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
視覚障害のある	48	26.23	28.92
補助具を使う	3	1.64	0
良い	34	18.58	20.48
アクティブな	4	2.19	0
我慢強い	55	30.05	33.13
劣等感の	2	1.09	0
社交的でない	4	2.19	0
利己的な	0	0	0
敏感な	4	2.19	0
自立した	16	8.74	9.64
賢い	13	7.10	7.83
話すのが難しい	0	0	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 56 女・接触有群の具体的視覚障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元
視覚障害のある		-.154
良い		.009
我慢強い		.130
自立した	1.667	-1.443
賢い	-2.059	-1.478

単語刺激『視覚障害者』のイメージ：集計した結果、Table 57 の通りとなった。12 の表現語のうち、『アクティブな』『利己的な』『賢い』『話すのが難しい』は、全体の回答数の5%に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が7得られた。このうち、第1次元(24.2%)、第2次元(20.7%)、第3次元(15.6%)までで累積寄与率が60%に達したため(累積寄与率60.4%)、本研究ではイメージを構成する次元として第3次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第1次元は、『自立した』(1.388)、『我慢強い』(1.247)、『良い』(.890)がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『社交的でない』(-1.446)、『敏感な』(-.773)という表現語であった。プラス側の語は、河内(2001)の示した「痛ましき・好ましき」因子における好ましきに属すると考えられる語であり、社会生活上の好ましきを示していると考えられる。対して、マイナス側に位置したのは、対人交流において積極的でなく、傷つきやすい様子を示しており、河内(2001)の示す「痛ましき」に該当すると考えられる。そのため、第1次元を『視覚障害者の好ましき・痛ましきの次元』と命名した。

第2次元は、『自立した』(1.571)がプラスに位置したのに対し、『良い』(-2.047)、『社交的でない』(-1.022)という表現語がマイナスの値を示した。『自立した』という能力を有したイメージと、『良い』という表現語が両極に位置している状態は、ステレオタイプ内容モデル(Fiske et al., 2002)にみられるが、同時に『良い』という温かさを示す語と共に『社交的でない』という交流許否に関する表現語がマイナスに位置している。そのため、プラス側が視覚障害者の有能さに着目しているのに対し、次元のマイナス側では広く社交性について着目していると考えられる。したがって第2次元を『能力と社交性に関する次元』と命名した。

第3次元は、『劣等感の』(1.334)がプラスの値を示し、『社交的でない』(-1.816)、『自立した』(-1.242)マイナスに位置した。プラス側に示された語は視覚障害者の相対的な能力評価の低さを示すが、対してマイナス側に示された語は、より具体的な行動状態を示す内容である。このことから、第3次元を『能力評価と行動状態の次元』と命名した。

女・接触有群による単語刺激『視覚障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数をTable 58に示した。

Table 57 女・接触有群の単語刺激『視覚障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
視覚障害のある	31	16.94	18.24
補助具を使う	34	18.58	20.59
良い	13	8.33	7.65
アクティブな	4	2.56	0
我慢強い	23	14.74	13.53
劣等感の	19	12.18	11.18
社交的でない	10	6.41	5.88
利己的な	1	0.64	0
敏感な	27	17.31	15.88
自立した	12	7.69	7.06
賢い	7	4.49	0
話すのが難しい	1	0.64	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 58 女・接触有群の単語刺激『視覚障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
視覚障害のある	-.066	.395	.274
補助具を使う	-.428	.197	-.256
良い	.890	-2.047	.142
我慢強い	1.247	-.367	.010
劣等感の	-.239	.261	1.334
社交的でない	-1.446	-1.022	-1.816
敏感な	-.773	.086	.227
自立した	1.388	1.571	-1.242

(2) 聴覚障害者イメージの適用

具体的聴覚障害者に対するイメージ：集計した結果、Table 59 の通りとなった。12 の表現語のうち、『補助具を使う』『アクティブな』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 7 得られた。このうち、第 1 次元 (23.0%)、第 2 次元 (17.5%)、第 3 次元 (13.7%)、第 4 次元 (12.8%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 67.0%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『利己的な』(1.107)、『劣等感の』(.758)、『敏感な』(.615) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『我慢強い』(-1.675)、『社交的でない』(-1.326)、『良い』(-1.085)、『話すのが難しい』(-.509) という表現語であった。プラス側に示された表現語は、栗田・楠見 (2010) の見出した『社会的不利』因子に類似した内容である。対してマイナス側に示されたのは、対人交流の状態とその場面で発揮される能力を表す語である。したがって第 1 次元を、『社会的不利と対人交流状況に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『社交的でない』(1.984)、『劣等感の』(.659) がプラスの値を示したのに対し、『話すのが難しい』(-2.129) という表現語がマイナスの値を示した。両極とも、対人交流上の困難を示す語で構成されているが、プラス側は対人交流に対する意欲の低下を示しているのに対し、マイナス側はコミュニケーションスキルという観点での困難を示している。このことから、第 2 次元を『対人交流上の意欲とスキルに関する困難の次元』と命名した。

第 3 次元は、『社交的でない』(1.283)、『話すのが難しい』(.613) がプラスの位置にあるのに対し、『自立した』(-1.637)、『我慢強い』(-.502) がマイナスに位置した。プラス側に示されたのは対人交流困難に関する表現語、マイナス側に示された語は個人の能力の範囲で課題解決をする様子を示す表現語であることから、第 3 次元を『交流困難と個人の能力の次元』と命名した。

女・接触有群による具体的聴覚障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 60 に示した。

Table 59 女・接触有群の具体的聴覚障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
聴覚障害のある	41	22.4	22.65
補助具を使う	0	0	0
良い	17	9.29	9.392
アクティブな	2	1.09	0
我慢強い	13	7.1	7.182
劣等感の	21	11.5	11.6
社交的でない	9	4.92	4.972
利己的な	20	10.9	11.05
敏感な	28	15.3	15.47
自立した	19	10.4	10.5
賢い	0	0	0
話すのが難しい	13	7.1	7.182

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 60 女・接触有群の具体的聴覚障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
聴覚障害のある	-.011	-.175	.485
良い	-1.085	.032	-.439
我慢強い	-1.675	.043	-.502
劣等感の	.758	.659	-.407
社交的でない	-1.326	1.984	1.283
利己的な	1.107	-.177	.480
敏感な	.615	.288	.166
自立した	.207	-.130	-1.637
話すのが難しい	-.509	-2.129	.613

単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 61 の通りとなった。12 の表現語のうち、『良い』『アクティブな』『利己的な』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 8 得られた。このうち、第 1 次元 (23.3%)、第 2 次元 (19.7%)、第 3 次元 (13.0%)、第 4 次元 (11.6%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 67.6%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『我慢強い』(2.074)、『自立した』(1.389) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『賢い』(-1.539)、『補助具を使う』(-.707) という表現語であった。プラス側の表現語は、課題や困難に対して個人のもつ様々な能力で対応する様子を示す語である。対して、マイナス側に示された語は、個人の能力そのものの高さや、出来ないことに対して補助具を用いるという具体的な工夫を表している。そのため、第 1 次元を『課題解決と個人の能力・工夫に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『自立した』(1.639)、『補助具を使う』(1.071)、『賢い』(.907)、『我慢強い』(.696) がプラスの値を示したのに対し、『社交的でない』(-1.639)、『聴覚障害のある』(-.634) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側の表現語は、課題解決の様子や手段を表している。他方、マイナス側の表現語は交流に対する消極性や障害に対する具体的な状態を示しており、これらは栗田・楠見 (2010) の示す『社会的不利』因子の内容であると考えられることから、第 2 次元を『課題解決と社会的不利に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『劣等感の』(1.082)、『自立した』(.747) がプラスの値を示し、『賢い』(-1.768)、『聴覚障害のある』(-.789)、『我慢強い』(-.554) がマイナスに位置した。プラス側の表現語群は、相対評価的な能力の低さの指摘や、独立して能力を発揮する様子を示しており、聴覚障害者の能力評価という観点をもつと考えられる。対して、マイナス側に位置する表現語は、個人の能力そのものを示していると考えられることから、第 3 次元を『能力とその評価・活用に関する次元』と命名した。

第 4 次元は、『補助具を使う』(1.292) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『敏感な』(-1.147)、『賢い』(-.908)、『自立した』(-.627) という表現語で

あった。プラス側に示されたのが、補助具を使うという具体的な状態に関する表現語であったのに対し、マイナス側に示された表現語はいずれもイメージの対象に対する安定した形成や特徴を表す形容詞である。これらは言語カテゴリーモデル (Semin & Fielder, 1988) によれば人物描写に用いられる述語の中で最も抽象度が高い語であることから、第 4 次元を『聴覚障害者の描写における具体性・抽象性に関する次元』と命名した。

女・接触有群による単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 62 に示した。

Table 61 女・接触有群の単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
聴覚障害のある	25	14.04	14.45
補助具を使う	17	9.55	9.83
良い	3	1.69	0
アクティブな	5	2.81	0
我慢強い	13	7.30	7.51
劣等感の	21	11.80	12.14
社交的でない	11	6.18	6.36
利己的な	2	1.12	0
敏感な	28	15.73	16.18
自立した	9	5.06	5.20
賢い	10	5.62	5.78
話すのが難しい	38	21.35	22.54

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 62 女・接触有群の単語刺激『聴覚障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
聴覚障害のある	.424	-.634	-.789	.110
補助具を使う	-.707	1.071	-.348	1.292
我慢強い	2.074	.696	-.554	-.181
劣等感の	-.357	.261	1.082	.412
社交的でない	.471	-1.832	-.245	.462
敏感な	-.487	-.253	.452	-1.147
自立した	1.389	1.639	.747	-.627
賢い	-1.539	.907	-1.768	-.908
話すのが難しい	-.172	-.346	.285	.276

(3) 知的障害者イメージの適用

具体的知的障害者のイメージ：回答を集計した結果、Table 63 の通りとなった。12 の表現語のうち、『知的障害のある』『我慢強い』『利己的な』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 7 得られた。このうち、第 1 次元 (21.1%)、第 2 次元 (18.2%)、第 3 次元 (16.6%)、第 4 次元 (14.6%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 70.5%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『補助具を使う』(1.595)、『敏感な』(.967) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『アクティブな』(-2.355)、『自立した』(-.792)、『話すのが難しい』(-.618) という表現語であった。プラスの側に示された語は刺激文で示された人物の行動や日常的な心理的状况に着目しているのに対し、マイナス側の表現語は、何らかの活動性に言及する語である。したがって第 1 次元を『人物の行動的・心理的描写と活動性に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『自立した』(1.515)、『良い』(.608) がプラスの値を示したのに対し、『アクティブな』(-1.724)、『敏感な』(-1.216) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置しているのは、能力の高さや人物としての模範的な態度に着目している。河内 (2001) の研究ではこうした意味をもつ表現語を「意力」や「賞賛」というカテゴリー分類で表現し、栗田・楠見 (2010) は「尊敬」因子で扱っている。対して、マイナスの側に位置する表現語は、刺激文中の人物の行動的・心理的な特徴に着目したものである。このことから、第 2 次元を『人物に対する賞賛と人物特徴に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『補助具を使う』(1.618)、『アクティブな』(.567) という単語がプラスの値を示した。対して、-.400 を超える重み係数を示したのは『敏感な』(-1.710)、『自立した』(-.958) であった。プラス側に示された表現語は活動の特徴を示す語であるのに対し、マイナスの側に位置する語は、人物の日常的に安定してみられる状況を示すものであることから、第 3 次元を『人物の活動性と日常的状況に関する次元』と命名した。

第 4 次元では、『社交的でない』(1.221) がプラスの値を示したのに対し、『補助具を使う』(-1.805)、『アクティブな』(-1.040)、『自立した』(-.614) という表現語がマイナスの

値を示した。マイナス側に示された語は、課題解決に必要な能力を示すことから、第4次元を『交流意欲の低下と課題解決能力に関する次元』と命名した。

女・接触有群による具体的知的障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 64 に示した。

Table 63 女・接触有群の具体的知的障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
知的障害のある	6	3.26	0
補助具を使う	10	5.43	5.88
良い	37	20.11	21.76
アクティブな	8	4.35	4.71
我慢強い	1	0.54	0
劣等感の	40	21.74	23.53
社交的でない	23	12.50	13.53
利己的な	1	0.54	0
敏感な	15	8.15	8.82
自立した	15	8.15	8.82
賢い	6	3.26	0
話すのが難しい	22	11.96	12.94

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 64 女・接触有群の具体的知的障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
補助具を使う	1.595	.288	1.618	-1.805
良い	-.085	.608	-.102	.001
アクティブな	-2.355	-1.724	.567	-1.040
劣等感の	.262	-.261	.151	.289
社交的でない	.285	-.013	.334	1.221
敏感な	.967	-1.216	-1.710	-.491
自立した	-.792	1.515	-.958	-.614
話すのが難しい	-.618	-.242	.427	.148

単語刺激『知的障害者』のイメージ：回答を集計した結果、Table 65 の通りとなった。12 の表現語のうち、『補助具を使う』『自立した』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 8 得られた。このうち、第 1 次元 (21.5%)、第 2 次元 (18.7%)、第 3 次元 (17.5%)、第 4 次元 (12.0%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 69.7%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『敏感な』(.702) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『我慢強い』(-2.629)、『知的障害のある』(-1.234)、『良い』(-.918) という表現語であった。プラス側に位置したのが、心的な傷つきやすさを含めた刺激の受けやすさを示す表現語であるのに対し、マイナス側に位置したのは『我慢強い』『良い』といった、いずれもインドネシアでは尊敬の対象となる人物的特徴と、知的障害の具体的な状態である。中でももっとも絶対値の大きい『我慢強い』は、ストレスに耐える能力の高さを示す語である。したがって第 1 次元を『ストレスと人物的特徴に関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『知的障害のある』(.989)、『社交的でない』(.634)、『劣等感の』(.583)、『敏感な』(.518) がプラスの値を示したのに対し、『アクティブな』(-1.549)、『利己的な』(-1.223)、『良い』(-.737) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置した表現語は、栗田・楠見 (2010) の示した『社会的不利』因子の内容に該当する。対して、マイナス側に位置したのは、活動の能動性を示す語や、対人交流に関連する語である。これらのことから第 2 次元を『社会的不利と対人交流活動に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『知的障害のある』(1.921)、『アクティブな』(1.101) がプラスの値を示し、『良い』(-1.091)、『話すのが難しい』(-.903) がマイナスに位置した。プラス側に位置したのは、活動状態の特徴を示す語であるのに対し、マイナス側に示された語は対人交流上の特徴を示した表現語である。したがって第 3 次元を『活動特徴と対人交流特徴に関する次元』と命名した。

第 4 次元は、『利己的な』(1.411)、『我慢強い』(.593) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『良い』(-1.076)、『敏感な』(-.891)、『アクティブな』(-.634) という表現語であった。『利己的な』は他者に依存して問題解決を図

る様子も含む語であり、プラス側に位置した表現語は困難に対する何らかの対処行動を示している。対してマイナス側には、対人交流における相手からの働きかけに対する反応や、活動そのものの能動性を示す語が位置している。このことから、第4次元を『困難への対処行動と対人交流上の対処行動に関する次元』と命名した。

女・接触有群による単語刺激『知的障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数 Table 66 に示した。

Table 65 女・接触有群の単語刺激『知的障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
知的障害のある	11	6.01	6.32
補助具を使う	1	0.55	0
良い	18	11.54	10.34
アクティブな	16	10.26	9.20
我慢強い	9	5.77	5.17
劣等感の	26	16.67	14.94
社交的な	30	19.23	17.24
利己的な	17	10.90	9.77
敏感な	23	14.74	13.22
自立した	4	2.56	0
賢い	4	2.56	0
話すのが難しい	24	15.38	13.79

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 66 女・接触有群の単語刺激『知的障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
知的障害のある	-1.234	.989	1.921	-.001
良い	-.918	-.737	-1.091	-1.076
アクティブな	.415	-1.549	1.101	-.634
我慢強い	-2.629	.039	-.267	.593
劣等感の	.143	.583	.023	.108
社交的でない	.394	.634	-.269	.408
利己的な	.299	-1.223	.279	1.411
敏感な	.702	.518	.335	-.891
話すのが難しい	.430	.065	-.903	.236

(4) 運動障害者イメージの適用

具体的運動障害者のイメージ：回答を集計した結果、Table 67 の通りとなった。12 の表現語のうち、『アクティブな』『我慢強い』『利己的な』『敏感な』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 6 得られた。このうち、第 1 次元 (28.2%)、第 2 次元 (22.5%)、第 3 次元 (17.9%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 68.6%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『社交的でない』(1.647)、『賢い』(1.544)、『良い』(1.539) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『補助具を使う』(-.923)、『運動障害のある』(-.552) という表現語であった。プラス側において、『賢い』と『良い』という有能さと温かさが共存している状態は、ステレオタイプ内容モデル (Fiske et al., 2002) に照らすと、賞賛の対象となりうる存在であり、「内集団」に付与される描写である。同時に『社交的でない』という表現語が同程度の次元得点を表している、すなわち類似した回答傾向として示されていることから、本研究の対象者にとってあまり対人交流が多くはないものの近い存在として認識されている様子が推察される。対して、マイナス側に位置したのは、いずれも障害に関する具体的特徴を意味する語である。したがって、第 1 次元を『賞賛と障害の具体的特徴の次元』と命名した。

第 2 次元は、『社交的でない』(2.408) がプラスの値を示したのに対し、『賢い』(-2.153) がマイナスの値を示した。このような、対人交流に積極的でない様子と能力の高さの組み合わせについて、河内 (2001) は『妬みの賞賛』という表現を用いている。また、ステレオタイプ内容モデル (Fiske et al., 2002) においても、こうした描写がなされる外集団に対しては、妬みに起因する偏見がもたれやすいとされる。こうしたことから、第 2 次元を『妬みの賞賛の次元』と命名した。

第 3 次元では、+.400 を超える重み係数を示したのは『良い』(2.078) であった。対して、マイナスの重み係数を示したのは『賢い』(-1.376)、『社交的でない』(-1.109) であった。温かさと有能さにより両極が特徴づけられていることに加え、『賢い』の位置しているマイナス側には、『社交的でない』という冷たさの表現も含む。この構造はステレオタイ

プ内容モデル (Fiske et al., 2002) にみられるイメージの両面価値性であることから、第3次元を『両面価値的イメージの次元』と命名した。

女・接触有群による具体的運動障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 68 に示した。

Table 67 女・接触有群の具体的運動障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
運動障害のある	38	20.77	21.35
補助具を使う	25	13.66	14.04
良い	13	7.104	7.303
アクティブな	2	1.093	0
我慢強い	1	0.546	0
劣等感の	37	20.22	20.79
社交的でない	9	4.918	5.056
利己的な	0	0	0
敏感な	2	1.093	0
自立した	46	25.14	25.84
賢い	10	5.464	5.618
話すのが難しい	0	0	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 68 女・接触有群の具体的運動障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
運動障害のある	-.552	.082	.165
補助具を使う	-.923	-.169	.045
良い	1.539	-.213	2.078
劣等感の	-.103	.089	-.022
社交的でない	1.647	2.408	-1.109
自立した	-.053	.010	-.215
賢い	1.544	-2.153	-1.376

単語刺激『運動障害者』のイメージ：回答を集計した結果、Table 69 の通りとなった。12 の表現語のうち、『アクティブな』『利己的な』『話すのが難しい』は、全体の回答数の5%に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が8得られた。このうち、第1次元(22.3%)、第2次元(18.1%)、第3次元(17.2%)、第4次元(13.2%)までで累積寄与率が60%に達したため(累積寄与率70.7%)、本研究ではイメージを構成する次元として第4次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第1次元は、『自立した』(1.096)、『我慢強い』(1.036)といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、主に、『賢い』(-2.552)、『敏感な』(-1.593)といった表現語であった。『自立した』と『賢い』という有能さに関連する表現語が両極に位置している。この状況において、そのほかにプラス側で一定以上の得点を示しているのがストレスに耐える様子を示す表現語であり、対してマイナス側に位置するのはストレスを受け傷つく様子を示す表現語である。このことから、第1次元を『有能な状態におけるストレス耐性に関する次元』と命名した。

第2次元は、『劣等感の』(.677)、『補助具を使う』(.538)がプラスの値を示したのに対し、『良い』(-2.106)、『我慢強い』(-1.468)、『自立した』(-.948)、『賢い』(-.717)という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置している表現語は、相対的に能力を低く評価される様子や、障害により困難なことに対して補助具を用いて解決する様子を示すものである。こうした、障害者に対する評価の低さや辛さを表す表現を、栗田・楠見(2010)は『同情』因子と命名している。対して、マイナス側に示された表現語はいずれも賞賛される内容を含むものであることから、第2次元を『同情と賞賛の次元』と命名した。

第3次元は、『賢い』(1.176)、『良い』(.606)、『自立した』(.586)、『劣等感の』(.525)がプラスの値を示し、『社交的でない』(-2.703)、『敏感な』(-.847)がマイナスに位置した。プラス側に位置する表現語は、『劣等感の』という自身のなさを示す語も含まれるものの、人物的評価が高く賞賛の対象であることを示す語である。対して、マイナス側に位置しているのは、対人交流上問題がある様子を示す表現語である。このことから、第3次元を『人物に対する賞賛と対人交流上の問題の次元』と命名した。

第4次元は、『敏感な』(1.328)、『自立した』(1.018)、『我慢強い』(.729)がプラスの

値を示したのに対し、『良い』(-2.134)、『社交的でない』(-.872)といった表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置しているのは、困難やストレスに対する反応に関する表現語である。対して、マイナス側に位置している表現語は、対人交流に着目した内容である。このことから、第4次元を『困難への反応と対人交流への着目に関する次元』と命名した。

女・接触有群による単語刺激『運動障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 70 に示した。

Table 69 女・接触有群の単語刺激『運動障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
運動障害のある	45	24.59	25.57
補助具を使う	38	20.77	21.59
良い	8	4.37	4.55
アクティブな	2	1.09	0
我慢強い	12	6.56	6.82
劣等感の	29	15.85	16.48
社交的な	9	4.92	5.11
利己的な	1	0.55	0
敏感な	13	7.10	7.39
自立した	14	7.65	7.96
賢い	8	4.37	4.55
話すのが難しい	4	2.19	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 70 女・接触有群の単語刺激『運動障害者』イメージの各次元の表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
運動障害のある	.207	.366	-.105	-.088
補助具を使う	.256	.538	.200	-.370
良い	-.391	-2.106	.606	-2.134
我慢強い	1.036	-1.468	-.434	.729
劣等感の	-.034	.677	.525	.083
社交的でない	-.177	-.107	-2.703	-.872
敏感な	-1.593	-.164	-.847	1.328
自立した	1.096	-.948	.586	1.018
賢い	-2.552	-.717	1.176	.036

4) 障害者との接触経験のない女子学生によるイメージの適用

(1) 視覚障害者イメージの適用

具体的視覚障害者のイメージ：回答を集計した結果、Table 71 の通りとなった。12 の表現語のうち、『アクティブな』『我慢強い』『利己的な』『敏感な』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 6 得られた。このうち、第 1 次元 (27.4%)、第 2 次元 (23.5%)、第 3 次元 (22.2%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 73.1%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『補助具を使う』(1.726) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『賢い』(-2.795)、『アクティブな』(-1.100) という表現語であった。プラス側に位置したのは障害に伴う具体的な特徴に関する表現語である。対して、マイナス側に位置した表現語は、能力の高さや活動の能動性を示すものである。したがって第 1 次元を『障害の具体的特徴と有能さに関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『自立した』(2.367) がプラスの値を示したのに対し、『補助具を使う』(-1.670)、『アクティブな』(-1.594) がマイナスの値を示した。マイナス側に位置している表現語をみると、単独の能力で問題解決をするのではなく、補助具を使うといった工夫をしながら、活動性も同時に示している。インドネシア語における『自立した』という言葉は単独で課題解決をする様子を示すものであるが、障害者の自立に関しては実際はその限りではなく、障害の状態に応じたサービス活用も合わせた自立のスタイルがあることから、第 2 次元を『視覚障害者の自立の状況に関する次元』と命名した。

第 3 次元では、+4.00 を超える重み係数を示したのは『アクティブな』(2.891) であった。対して、マイナスの重み係数を示したのは『補助具を使う』(-1.638)、『賢い』(-1.517) であった。マイナス側に示された表現語は、補助具を使うという生活スキルを含めた有能さを示す語であると考えられることから、第 3 次元を『活動能動性と生活スキルの高さの次元』と命名した。

女・接触無群による具体的視覚障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 72 に示した。

Table 71 女・接触無群の具体的視覚障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
視覚障害のある	40	23.81	24.69
補助具を使う	7	4.17	4.32
良い	41	24.40	25.31
アクティブな	6	3.57	3.70
我慢強い	49	29.17	30.25
劣等感の	1	0.60	0
社会的でない	2	1.19	0
利己的な	0	0	0
敏感な	3	1.79	0
自立した	10	5.95	6.17
賢い	9	5.36	5.56
話すのが難しい	0	0	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 72 女・接触無群の具体的視覚障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
視覚障害のある	.136	-.172	-.063
補助具を使う	1.726	-1.670	-1.638
良い	.225	.034	.016
アクティブな	-1.100	-1.594	2.891
我慢強い	.101	.132	.183
自立した	.005	2.367	.071
賢い	-2.795	-.379	-1.517

単語刺激『視覚障害者』のイメージ：回答を集計した結果、Table 73 の通りとなった。12 の表現語のうち、『アクティブな』『利己的な』『賢い』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 6 得られた。このうち、第 1 次元 (24.3%)、第 2 次元 (19.3%)、第 3 次元 (16.7%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 60.3%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『良い』(1.134)、『我慢強い』(.801)、『自立した』(.679) がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『社交的でない』(-1.818)、『敏感な』(-1.384)、『劣等感の』(-.794) という表現語であった。プラス側に示されたのは、いずれも視覚障害者の賞賛されうる人物特徴である。マイナス側に位置した表現語はいずれも視覚障害者という外集団に対する否定的なイメージを示すものであり、類似した内容を示す解釈として、『同情』因子 (栗田・楠見, 2010) があげられる。このことから、第 1 次元を『賞賛と同情の次元』と命名した。

第 2 次元は、『劣等感の』(1.686) がプラスの値を示したのに対し、『社交的でない』(-1.411)、『自立した』(-1.014)、『敏感な』(-.749)、『良い』(-.640) がマイナスの値を示した。マイナス側に位置している表現語は、いずれも人物の行動特徴を表すが形容詞であり、言語カテゴリーモデル (Semin & Fiedler, 1988) に照らすともっとも言語的抽象度が高く、人物に対して安定的にみられる特徴を示すものである。したがって第 2 次元を『劣等感と人物特徴に関する次元』と命名した。

第 3 次元では、+.400 を超える重み係数を示したのは『自立した』(2.079)、『敏感な』(.687) であった。対して、マイナスの重み係数を示したのは『良い』(-1.249)、『社交的でない』(-.908) であった。プラス側に位置しているのは、個人の行動や状態の特徴を示す表現語であるのに対し、マイナス側に位置している表現語は、どちらも対人交流に着目した語である。このことから、第 3 次元を『個人の特徴と対人交流に関する次元』と命名した。

女・接触無群による単語刺激『視覚障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 74 に示した。

Table 73 女・接触無群の単語刺激『視覚障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
視覚障害のある	37	22.02	22.98
補助具を使う	36	21.43	22.36
良い	14	8.33	8.70
アクティブな	1	0.60	0
我慢強い	26	15.48	16.15
劣等感の	16	9.52	9.94
社交的でない	10	5.95	6.21
利己的な	0	0	0
敏感な	12	7.14	7.45
自立した	11	6.55	6.83
賢い	4	2.38	0
話すのが難しい	1	0.60	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 74 女・接触無群の単語刺激『視覚障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
視覚障害のある	.010	.068	-.227
補助具を使う	.081	.384	-.145
良い	1.134	-.640	-1.249
我慢強い	.801	-.004	.166
劣等感の	-.794	1.686	.295
社交的でない	-1.818	-1.411	-.908
敏感な	-1.384	-.749	.687
自立した	.679	-1.014	2.079

(2) 聴覚障害者イメージの適用

具体的聴覚障害者に対するイメージ：回答を集計した結果、Table 75 の通りとなった。12 の表現語のうち、『補助具を使う』『アクティブな』『社会的でない』『自立した』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 6 得られた。このうち、第 1 次元 (28.4%)、第 2 次元 (19.2%)、第 3 次元 (18.2%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 65.8%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『劣等感の』(1.475)、『我慢強い』(1.344)、『良い』(.743) といった形容詞がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『話すのが難しい』(-1.059)、『利己的な』(-.936) という表現語であった。プラス側に位置した表現語は、模範的な人物特徴を有しながらも、能力の低さを示している。この構造については、ステレオタイプ内容モデル (Fiske et al., 2002) で両面価値的とされる“温かいが有能でない”状態を示すものであるが、こうした描写をなされる集団は、保護の対象となりやすく、憐みや共感という感情に伴う家父長的偏見の対象となりうることが指摘されている (沼崎, 2010)。対して、マイナス側に位置したのは、交流困難に関する表現語であった。このことから、第 1 次元を『家父長的偏見と交流困難の次元』と命名した。

第 2 次元は、『劣等感の』(1.977) が単独で大きなプラスの値を示したのに対し、『我慢強い』(-1.173)、『良い』(-.662) という表現語がマイナスの値を示した。マイナス側に位置しているのは、人物的温かさを示す語であり、インドネシア国内において尊敬の対象となる人物特徴である。このことから、第 2 次元を『能力評価の低さと尊敬に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『話すのが難しい』(.654)、『我慢強い』(.515) がプラスの値を示し、『良い』(-1.540)、『利己的な』(-.997) がマイナスに位置した。プラス側に示されている表現語と、マイナス側に示された表現語を比較すると、プラス側に関しては交流行動そのものが結果的に少ない状態や、ストレスに対して耐えるという個人で実行可能な方法で対処した状態という、対人交流の少ない状態を示すのに対し、マイナス側に位置する表現語は行動の内容は異なるが他者と対人交流行動を行っている点では共通性がみられる。このこと

から、第 3 次元を、『対人交流の頻度・積極性に関する次元』と命名した。

女・接触無群による具体的聴覚障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 76 に示した。

Table 75 女・接触無群の具体的聴覚障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
聴覚障害のある	39	23.21	26.00
補助具を使う	3	1.79	0
良い	16	9.52	10.67
アクティブな	2	1.19	0
我慢強い	14	8.33	9.33
劣等感の	13	7.74	8.67
社交的でない	6	3.57	0
利己的な	22	13.10	14.67
敏感な	33	19.64	22.00
自立した	7	4.17	0
賢い	0	0	0
話すのが難しい	13	7.74	8.67

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 76 女・接触無群の具体的聴覚障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
聴覚障害のある	-.059	-.286	.473
良い	.743	-.662	-1.540
我慢強い	1.344	-1.173	.515
劣等感の	1.475	1.977	.128
利己的な	-.936	.335	-.997
敏感な	-.400	.167	.325
話すのが難しい	-1.059	-.033	.654

単語刺激『聴覚障害者』のイメージ：回答を集計した結果、Table 77 の通りとなった。12 の表現語のうち、『良い』『アクティブな』『利己的な』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 7 得られた。このうち、第 1 次元 (22.4%)、第 2 次元 (19.4%)、第 3 次元 (16.9%)、第 4 次元 (14.0%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 70.7%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『我慢強い』(2.182)、『自立した』(2.115) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、主に、『社交的でない』(-.984)、『敏感な』(-.557) といった表現語であった。プラス側に示されたのは、困難に対して何らかの対応能力を発揮している様子を表す語である。対して、マイナス側には、対人交流に対して積極的でない様子や、何らかの刺激を受けて心的に傷つく様子を示す表現語が示されている。そのため、第 1 次元を『課題解決能力と対人交流許否の次元』と命名した。

第 2 次元は、『我慢強い』(1.501)、『聴覚障害のある』(.661) がプラスの値を示したのに対し、『自立した』(-1.975)、『敏感な』(-1.144) といった表現語がマイナスの値を示した。プラス側には、耐えることで困難を解決する様子や、音声情報を受けづらい具体的な状態を示しているのに対し、マイナス側に位置しているのは、困難を独自の能力で解決している様子を示す語や、様々な刺激を受けとる様子を示す語である。したがって、第 2 次元を『困難に対する対処の受動性・能動性に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『社交的でない』(1.582)、『劣等感の』(.699)、『我慢強い』(.698) がプラスの値を示し、『話すのが難しい』(-.853)、『聴覚障害のある』(-.733) がマイナスに位置した。プラス側に示された語は、交流行動に対して積極的でない様子や評価の低さ、また困難に耐える様子を示しており、これらは河内 (2001) の示した「痛ましさ」の内容と同様と考えられる。対して、マイナスに位置している表現語は聴覚障害者の具体的な障害の状態や障害に伴う困難に着目している。そのため、第 3 次元を『痛ましさと聴覚障害の状態に関する次元』と命名した。

第 4 次元は、『敏感な』(1.384)、『劣等感の』(1.051)、『我慢強い』(.668) がプラスの値を示したのに対し、『社交的でない』(-.898)、『自立した』(-.592)、『補助具を使う』(-.526)

といった表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置する表現語群は、いずれも何らかのストレスを感じている様子を示すのに対し、マイナス側に示されたのは、何らかの困難に対して結果的にどのように対処しているかということを表す語である。したがって第4次元を『ストレスとその対処状況に関する次元』と命名した。

女・接触無群による単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 78 に示した。

Table 77 女・接触無群の単語刺激『聴覚障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
聴覚障害のある	32	18.93	21.33
補助具を使う	30	17.75	20.00
良い	5	2.96	0
アクティブな	4	2.37	0
我慢強い	9	5.33	6
劣等感の	20	11.83	13.33
社交的でない	13	7.69	8.67
利己的な	4	2.37	0
敏感な	14	8.28	9.33
自立した	7	4.14	5.33
賢い	5	2.96	0
話すのが難しい	25	14.79	16.67

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 78 女・接触無群の単語刺激『聴覚障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
聴覚障害のある	-.049	.661	-.733	-.223
補助具を使う	-.131	-.443	.214	-.526
我慢強い	2.182	1.501	.698	.668
劣等感の	-.344	.254	.699	1.051
社交的でない	-.984	.290	1.582	-.898
敏感な	-.557	-1.144	-.353	1.384
自立した	2.115	-1.975	.309	-.592
話すのが難しい	-.144	.064	-.853	-.283

(3) 知的障害者イメージの適用

具体的知的障害者のイメージ：回答を集計した結果、Table 79 の通りとなった。12 の表現語のうち、『我慢強い』『自立した』『自立した』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 8 得られた。このうち、第 1 次元 (20.3%)、第 2 次元 (18.3%)、第 3 次元 (16.7%)、第 4 次元 (13.8%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 69.1%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 4 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『話すのが難しい』(1.005)、『補助具を使う』(.983)、『社交的でない』(.725)、『アクティブな』(.676) といった形容詞がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『利己的な』(-1.685)、『知的障害のある』(-1.194)、『劣等感の』(-.531) という表現語であった。プラス側に位置している表現語は様々な単独行動状況を示す語である。それに対し、マイナス側に示されているのは、障害の状態とあわせて、刺激対象の行動問題や能力評価の低さを示す語である。松本・田引 (2009) は、こうした知的障害者に対する認識を表した因子を『否定的印象』因子と命名している。またマイナス側で最も絶対値の大きい『利己的な』は他者への依存性を示す語であることから、第 1 次元を『行動の他者への依存性と否定的印象の次元』と命名した。

第 2 次元は、『良い』(1.361)、『アクティブな』(1.248) がプラスの値を示したのに対し、『社交的でない』(-1.020)、『敏感な』(-.985)、『利己的な』(-.594) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側に位置する表現語は、人当たりの良さや道徳性を示すと同時に、活動の能動性を示すものである。こうした表現語のまとまりに対して、先行研究では「好ましさ」(河内, 2001) や「明るさ」、「活発さ」(毛呂・島谷, 2010) といった命名がなされている。それに対し、マイナス側に位置したのは何らかのコミュニケーション困難がある様子を示す表現語である。そのため、第 2 次元を『好ましさとコミュニケーション困難に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『アクティブな』(2.264) という言葉が +2 を超える値を示し、『敏感な』(.747) も +.400 を超える重み係数値となった。対して、『話すのが難しい』(-.971)、『補助具を使う』(-.825)、『知的障害のある』(-.790) がマイナスに位置した。プラス側には、活動の

能動性が相対的に高得点を示すものの、刺激を受けやすく傷つきやすい状態もあわせてしめられている。対して、マイナス側に位置した表現語は、いずれも知的障害の具体的特徴やそれに伴う困難を示している。したがって第3次元を『活発さ・傷つきやすさと障害の状態に関する次元』と命名した。

第4次元では、『良い』(.738)、『補助具を使う』(.522)がプラスの値を示したのに対し、『利己的な』(-1.455)、『話すのが難しい』(-1.450)、『アクティブな』(-1.209)という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側に示された表現語は、人物の温かさと、補助具を使うという“能力の補完”に関する語であり、いずれも独自の特性や工夫で社会生活を円滑に送る様子を表していると考えられる。対して、マイナスに示された表現語は、いずれも個人の行動特徴に関するものである。したがって第4次元を『社会生活能力の高さと行動特徴に関する次元』と命名した。

女・接触無群による具体的知的障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 80 に示した。

Table 79 女・接触無群の具体的知的障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
知的障害のある	16	9.52	10.26
補助具を使う	19	11.31	12.18
良い	22	13.1	14.10
アクティブな	8	4.76	5.13
我慢強い	0	0	0
劣等感の	29	17.26	18.59
社交的でない	18	10.71	11.54
利己的な	9	5.36	5.77
敏感な	20	11.90	12.82
自立した	6	3.57	0
賢い	6	3.57	0
話すのが難しい	15	8.93	9.62

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 80 女・接触無群の具体的知的障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元	第4次元
知的障害のある	-1.194	.213	-.790	.102
補助具を使う	.983	.087	-.825	.522
良い	-.231	1.361	.095	.738
アクティブな	.676	1.248	2.264	-1.209
劣等感の	-.531	-.246	.367	.274
社交的でない	.725	-1.020	.047	.498
利己的な	-1.685	-.594	-.418	-1.455
敏感な	.127	-.985	.747	-.008
話すのが難しい	1.005	.371	-.971	-1.450

単語刺激『知的障害者』のイメージ：回答を集計した結果、Table 81 の通りとなった。12 の表現語のうち、『良い』『我慢強い』『自立した』『賢い』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 7 得られた。このうち、第 1 次元 (24.9%)、第 2 次元 (20.0%)、第 3 次元 (16.1%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 61.0%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『利己的な』(1.386)、『話すのが難しい』(.795)、『敏感な』(.560) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『アクティブな』(-1.819)、『補助具を使う』(-1.273)、『劣等感の』(-.670) という表現語であった。プラスの側に示されたのは、いずれも対人交流上の困難を表す語である。対して、マイナス側には、活動性の高さや工夫は認められるが、同時に能力評価の低さを示す語もみられている。そのため、第 1 次元は『対人交流上の困難と能力・評価の不一致の次元』と命名した。

第 2 次元は、『アクティブな』(2.283)、『話すのが難しい』(1.171) がプラスの値を示したのに対し、『知的障害のある』(-.746)、『劣等感の』(-.672)、『補助具を使う』(-.563) という表現語がマイナスの値を示した。プラス側の表現語は、知的障害者における何らかの活動状況を示すものであるのに対し、マイナス側に位置したのは、知的障害の具体的な状態と、能力評価の低さを表す表現語であり、先行研究の「社会的不利」因子に該当するものと考えられる。したがって第 2 次元を『活動状況と社会的不利に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『利己的な』(1.241)、『劣等感の』(.806) がプラスの値を示し、『話すのが難しい』(-1.320)、『補助具を使う』(-1.080) がマイナスに位置した。プラス側に位置しているのは、いずれも知的障害者に対する否定的印象であるのに対し、マイナス側に位置したのは、障害に伴う何らかの困難を示す表現語である。したがって第 3 次元を『否定的印象と障害に伴う困難に関する次元』と命名した。

女・接触無群による単語刺激『知的障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 82 に示した。

Table 81 女・接触無群の単語刺激『知的障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目削除後の%
知的障害のある	31	18.45	19.50
補助具を使う	12	7.14	7.55
良い	1	0.60	0
アクティブな	6	3.57	5.03
我慢強い	2	1.19	0
劣等感の	20	11.9	12.58
社交的でない	29	17.26	18.24
利己的な	14	8.33	8.81
敏感な	30	17.86	18.87
自立した	2	1.19	0
賢い	4	2.38	0
話すのが難しい	15	8.93	9.43

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 82 女・接触無群の単語刺激『知的障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
知的障害のある	.227	-.746	-.326
補助具を使う	-1.273	-.563	-1.080
アクティブな	-1.819	2.283	.978
劣等感の	-.670	-.672	.806
社交的でない	-.412	-.095	-.057
利己的な	1.386	.004	1.241
敏感な	.560	.340	.108
話すのが難しい	.795	1.171	-1.321

(4) 運動障害者イメージの適用

具体的運動障害者のイメージ：回答を集計した結果、Table 83 の通りとなった。12 の表現語のうち、『良い』『アクティブな』『我慢強い』『利己的な』『敏感な』『話すのが難しい』は、全体の回答数の5%に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が5得られた。このうち、第1次元(32.5%)、第2次元(22.9%)、第3次元(22.3%)までで累積寄与率が60%に達したため(累積寄与率77.8%)、本研究ではイメージを構成する次元として第3次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第1次元は、『賢い』(2.615)がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは『補助具を使う』(-.576)、『運動障害のある』(-.552)という表現語であった。プラス側に有能さを示す表現語が位置しているのに対し、マイナス側には、障害の具体的特徴を表す語が示されている。したがって第1次元を『有能さと障害の具体的特徴に関する次元』と命名した。

第2次元は、『自立した』(1.314)、『社交的でない』(.757)がプラスの値を示したのに対し、『賢い』(-1.013)、『運動障害のある』(-.688)という表現語がマイナスの値を示した。プラスの側に示された表現語の共通性としては、個人単独での行動傾向を示す語であることが挙げられる。対して、マイナス側に示されたのは、有能さや障害の具体的特徴といった、何らかの能力について着目した表現語である。したがって第2次元を『単独での行動傾向と能力に関する次元』と命名した。

第3次元は、『社交的でない』(1.230)、『補助具を使う』(.762)がプラスの値を示し、『自立した』(-.919)がマイナスに位置した。プラス側に示されたのは、他者とあまりかわらずに補助具を用いて日常の課題を解決する様子、マイナス側に示されたのは個人の能力により課題解決をする様子であると考えられ、両極とも自立行動の状況を表すことから、第3次元を『自立行動に関する次元』と命名した。

女・接触無群による具体的運動障害者に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数をTable 84に示した。

Table 83 女・接触無群の具体的運動障害者に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
運動障害のある	31	18.45	20.26
補助具を使う	25	14.88	16.34
良い	7	4.17	0
アクティブな	0	0	0
我慢強い	0	0	0
劣等感の	41	24.40	26.80
社交的でない	24	14.29	15.69
利己的な	3	1.79	0
敏感な	2	1.19	0
自立した	21	12.50	13.73
賢い	11	6.55	7.19
話すのが難しい	3	1.79	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 84 女・接触無群の具体的運動障害者イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
運動障害のある	-.552	-.688	-.474
補助具を使う	-.576	-.456	.762
劣等感の	-.186	-.046	-.333
社交的でない	.239	.757	1.230
自立した	.221	1.314	-.919
賢い	2.615	-1.013	-.086

単語刺激『運動障害者』のイメージ：回答を集計した結果、Table 85 の通りとなった。12 の表現語のうち、『良い』『アクティブな』『利己的な』『自立した』『賢い』『話すのが難しい』は、全体の回答数の 5% に満たなかったため、分析からは除外した。

コレスポンデンス分析の結果、イメージを構成する次元が 5 得られた。このうち、第 1 次元 (29.6%)、第 2 次元 (26.5%)、第 3 次元 (19.5%) までで累積寄与率が 60% に達したため (累積寄与率 75.7%)、本研究ではイメージを構成する次元として第 3 次元までを抽出した。

各次元について、表現語ごとの重み係数をもとに命名作業を行ったところ、次の通りとなった。なお、表現語の後に続く括弧内に重み係数を記載した。

第 1 次元は、『社交的でない』(.796)、『補助具を使う』(.502) といった表現語がプラスの値を示した。対して、マイナスの値を示したのは、『敏感な』(-2.353)、『我慢強い』(-.777) といった表現語であった。プラス側に示されたのは、補助具を使うという工夫をしながら単独で課題解決をする様子であり、対してマイナス側に示されたのは、何らかのストレスをうける様子である。このことから、第 1 次元を『課題解決のための工夫とストレスに関する次元』と命名した。

第 2 次元は、『敏感な』(1.216)、『社交的でない』(.517) がプラスの値を示したのに対し、『我慢強い』(-1.990) がマイナスの値を示した。プラス側に位置しているのは、対人交流上の傷つきやすさや消極的な態度といった困難を示す表現語である。対してマイナス側に示されたのは、困難に耐える様子であることから、第 2 次元を『対人交流上の困難と忍耐に関する次元』と命名した。

第 3 次元は、『社交的でない』(1.374)、『我慢強い』(.730) がプラスの値を示し、『補助具を使う』(-.627)、『運動障害のある』(-.605) がマイナスに位置した。プラス側に示された表現語は、運動障害者が対人交流において消極的であったり、ストレスに対して耐えるという態度をとったりといった、受動的である様子を示している。対して、マイナス側に示されたのは、障害の具体的特徴を表す表現語である。したがって第 3 次元を『対人交流上の受動的態度と障害の具体的特徴に関する次元』と命名した。

女・接触無群による単語刺激『運動障害者』に対するイメージの各次元における対表現語群別重み係数を Table 86 に示した。

Table 85 女・接触無群の単語刺激『運動障害者』に対するイメージの回答数

表現語	回答数	%	網掛け項目除外後の%
運動障害のある	41	24.40	27.33
補助具を使う	32	19.05	21.33
良い	1	0.60	0
アクティブな	1	0.60	0
我慢強い	15	8.93	10.00
劣等感の	32	19.05	21.33
社交的でない	20	11.90	13.33
利己的な	1	0.60	0
敏感な	11	6.55	7.33
自立した	5	2.98	0
賢い	2	1.19	0
話すのが難しい	6	3.57	0

※網掛けは回答数全体の5%に満たなかったため、分析から除外

Table 86 女・接触無群の単語刺激『運動障害者』イメージの各次元の対表現語群別重み係数

表現語群	第1次元	第2次元	第3次元
運動障害のある	.017	-.062	-.605
補助具を使う	.502	-.114	-.627
我慢強い	-.777	-1.994	.730
劣等感の	.152	.387	.154
社交的でない	.796	.517	1.374
敏感な	-2.353	1.216	.140

5) 障害者イメージの適用に影響を与える情報源

障害者に関する情報源がイメージの適用に与える影響について明らかにするために、情報源に触れたことがあるか否かについて、対象者を2群（あり・なし）に分け、コレスポデンス分析で得られた有効回答者ごとの各次元におけるサンプルスコアの平均値をもとに、t検定を行った。

なお、情報源については、「書籍」「事件報道」「ドキュメンタリー番組」「フィクション作品」「授業」の5種が分析対象となるが、対象者群の各項目について人数の分布を確認し、あり・なしのいずれかに90%以上偏った項目については、分析の対象から除外した。

(1) 接触経験のある男子学生の障害者イメージ適用に影響する情報源

Table 87、Table 88 に示す通りの結果が得られた。なお、「事件報道」に関しては、障害者に関する情報源として触れたことが「ある」という回答が94%となったため、分析の対象から除外した。

具体的視覚障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的視覚障害者イメージの適用に情報源が与える影響について、いずれの情報・次元においても有意差はみられなかった。

具体的聴覚障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的聴覚障害者イメージの適用に情報源が与える影響については、「書籍からの情報」において第1次元で ($t=4.058$, $p<.001$)、「授業からの情報」において第2次元で ($t=-2.089$, $p<.05$)、それぞれ有意差がみられた。また、「ドキュメンタリー番組からの情報」において、第1次元で有意傾向がみられた ($t=2.000$, $p<.10$)。このことから、書籍から障害者に関する情報を得ている者、あるいはドキュメンタリー番組から情報を得ていない者は、刺激文中の人物に関して障害の状態や能力評価の低さといったイメージを適用させ、本から障害者に関する情報を得ていない者、またはドキュメンタリー番組から情報を得ていた者は、聴覚障害者に対して、コミュニケーション困難がありながらも交流に必要な能力を有しているイメージを適用させていた。また、授業から障害者に関する情報を得ている者は、聴覚障害者に対して、インドネシアにおいて美德とされるような人当たりの良い性格をもつイメージがあり、授業から障害者に関する情報を得ていない者は、他者とのコミュニケーションに何らかの問題のある状態をイメージとして抱いていた。

具体的知的障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的知的障害者イメージの

適用に情報源が与える影響については、いずれの情報・次元においても有意差はみられなかった。

具体的運動障害者のイメージ適用に影響を与える情報源：具体的運動障害者イメージの適用に情報源が与える影響については、いずれの情報・次元においても有意差はみられなかった。

単語刺激『視覚障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『視覚障害者』イメージの適用に情報源が与える影響については、「ドキュメンタリー番組からの情報」において第2次元で($t=1.938, p<.10$)、また「授業からの情報」において第1次元で($t=1.766, p<.10$) 有意傾向がみられた。すなわち、ドキュメンタリー番組から障害者の情報を得ている者は、視覚障害者を能力が低いというイメージを有しており、ドキュメンタリー番組から障害者の情報を得ていない者は、視覚障害者を能力が高いというイメージを付与していることが示された。また、授業から障害者に関する情報を得ている者は、視覚障害者に対して外界に敏感でストレスを受けやすい様子をイメージとしてもち、授業から障害者に関する情報を得ていない者は、視覚障害者に対して交流上のストレスに何らかの対処をしている様子をイメージとして抱いていた。

単語刺激『聴覚障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『聴覚障害者』イメージの適用に情報源が与える影響については、「授業からの情報」において第2次元で有意差がみられた ($t=-2.869, p<.01$)。すなわち、授業から障害者に関する情報を得ている者は、聴覚障害者に対するイメージとして活動性や障害の具体的特徴を挙げたのに対し、授業から障害者に関する情報を得ていない者は、聴覚障害者に対して対人交流上の性格をイメージとして付与していたことが示された。

単語刺激『知的障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『知的障害者』イメージの適用に情報源が与える影響については、「書籍からの情報」において第4次元で有意傾向がみられ、($t=-1.760, p<.10$)、「ドキュメンタリー番組からの情報」において第4次元、第5次元で有意差がみられた(第4次元 $t=-3.103, p<.01$; 第5次元 $t=2.157, p<.05$)。「フィクション作品からの情報」においては、第1次元と第4次元で有意差がみられた(第1次元 $t=-2.537, p<.05$; 第4次元 $t=-2.051, p<.05$)。すなわち、書籍から障害者の情報を得ている者は、知的障害者に対して他者とのやりとりにみられる状態をイメージとして適用しており、書籍から障害者の情報を得ていない者は、知的障害者単独で課題を解決する様子をイメージとしてもっていた。また、ドキュメンタリー番組から障害

者に関する情報を得ている者は知的障害者に対して他者とのやりとりにみられる状態や自己主張の弱いイメージを適用させており、ドキュメンタリー番組から障害者に関する情報を得ていない者は、知的障害者が単独で課題を解決する様子や、自己主張の強いイメージを適用させた。さらに、フィクション作品から障害者に関する情報を得ている者は、知的障害者に対して能動的なイメージや、他者とのやりとりの状態に関するイメージを適用させており、フィクション作品から障害者の情報を得ていない者は、知的障害者に対して受動的なイメージや、単独で課題を解決するイメージを適用させていることが明らかとなった。

単語刺激『運動障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『運動障害者』イメージの適用に情報源が与える影響については、「授業からの情報」において、第3次元で有意傾向がみられた ($t=-1.956$, $P<.10$)。すなわち、授業から障害者に関する情報を得ている者は、運動障害者に対して他者との交流能力の高いイメージを適用させており、授業から障害者に関する情報を得ていない者は、運動障害者に対して他者との交流の少なさやストレスに耐えるイメージを適用させていることが明らかとなった。

Table 87 男・接触有群の具体的障害者に対するイメージの適用に情報源が与える影響

刺激	情報源	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元		第5次元		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
具体的視覚障害者	書籍からの情報	あり	-.059	.917	-.057	.854						
		なし	.011	.682	.328	.616						
		t 値	-.177		-1.051							
		df	36		36							
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.061	.923	-.038	.840						
		なし	-.012	.774	.118	.818						
		t 値	-.150		-.506							
		df	36		36							
	フィクション作品からの情報	あり	.048	.735	-.145	.810						
		なし	-.181	1.051	.208	.829						
		t 値	.792		-1.315							
		df	36		36							
	授業からの情報	あり	-.088	.940	-.069	.880						
		なし	.080	.857	.238	.605						
		t 値	-.499		-.975							
		df	36		36							
具体的聴覚障害者	書籍からの情報	あり	.111	.893	-.049	.826	.042	.854				
		なし	-.616	.207	.368	1.026	-.239	.552				
		t 値	4.058***		-1.094		.771					
		df	33.993		36		36					
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.157	.874	.142	.870	.009	.888				
		なし	-.455	.684	-.334	.761	-.032	.597				
		t 値	2.000†		1.532		.135					
		df	36		36		36					
	フィクション作品からの情報	あり	.078	.861	.006	.886	-.114	.787				
		なし	-.117	.883	.031	.850	.152	.851				
		t 値	.680		-.088		-.996					
		df	36		36		36					
	授業からの情報	あり	.084	.891	-.138	.811	.034	.708				
		なし	-.288	.744	.517	.861	-.118	1.137				
		t 値	1.135		-2.069*		.483					
		df	36		36		36					
具体的知的障害者	書籍からの情報	あり	-.070	.912	-.0003	.890	.054	.752	-.007	.681	-.058	.724
		なし	.292	.571	.014	.299	-.162	1.000	.065	1.133	.218	.853
		t 値	-.933		-.073		.612		-.150		-.871	
		df	36		24.481		36		5.695		36	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.002	.911	-.098	.836	-.090	.594	.024	.831	-.040	.626
		なし	-.054	.795	.281	.752	.328	1.152	-.048	.485	.058	.950
		t 値	.170		-1.261		-1.097		.254		-.369	
		df	36		36		10.760		36		36	
	フィクション作品からの情報	あり	-.134	.927	.125	.865	-.009	.838	-.132	.852	.024	.680
		なし	.154	.786	-.167	.755	.059	.730	.193	.551	-.068	.773
		t 値	-1.007		1.081		-.261		-1.424		.385	
		df	36		36		36		35.609		36	
	授業からの情報	あり	-.055	.949	.059	.878	.034	.772	-.033	.693	-.008	.695
		なし	.123	.579	-.181	.616	-.028	.870	.126	.946	-.037	.809
		t 値	-.680		.760		.208		-.551		.107	
		df	22.450		36		36		36		36	
具体的運動障害者	書籍からの情報	あり	-.022	.778	.034	.816	.028	.825				
		なし	.101	1.072	-.086	.702	-.005	.511				
		t 値	-.337		.337		.093					
		df	36		36		36					
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.116	.815	-.031	.838	.066	.792				
		なし	-.334	.758	.145	.670	-.099	.767				
		t 値	1.525		-.597		.569					
		df	36		36		36					
	フィクション作品からの情報	あり	.065	.884	.032	.814	-.059	.842				
		なし	-.095	.728	-.008	.786	.135	.692				
		t 値	.590		.149		-.755					
		df	36		36		36					
	授業からの情報	あり	-.053	.777	.085	.739	-.017	.844				
		なし	.162	.960	-.211	.956	.150	.538				
		t 値	-.687		.980		-.559					
		df	36		36		36					

† p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 88 男・接触有群の具体的障害者に対するイメージの適用に情報源が与える影響

刺激	情報源	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元		第5次元		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
単語刺激『視覚障害者』	書籍からの情報	あり	.004	.916	.089	.828	.007	.780				
		なし	-.360	.961	-.302	.653	.148	.657				
		t値	.886		1.091		-.415					
		df	36		36		36					
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.080	.846	.174	.763	-.025	.772				
		なし	-.426	1.059	-.383	.828	.179	.724				
		t値	1.518		1.938†		.472					
		df	36		36		36					
	フィクション作品からの情報	あり	-.029	.838	.051	.843	.048	.852				
		なし	-.086	1.050	-.004	.784	.002	.625				
		t値	.185		.204		.183					
		df	36		36		36					
授業からの情報	あり	.090	.886	.126	.772	.011	.788					
	なし	-.513	.924	-.289	.888	.087	.682					
	t値	1.766†		1.358		-.261						
	df	36		36		36						
単語刺激『聴覚障害者』	書籍からの情報	あり	.050	.942	-.139	.770	.026	.785				
		なし	-.131	.711	.724	.768	.247	.866				
		t値	.445		-2.519*		-.624					
		df	36		36		36					
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.030	.799	.032	.810	.055	.874				
		なし	.166	1.186	-.101	.897	.077	.525				
		t値	-.582		.435		-.075					
		df	36		36		36					
	フィクション作品からの情報	あり	.037	.847	-.062	.882	.131	.801				
		なし	.001	1.003	.079	.755	-.035	.791				
		t値	.119		-.516		.634					
		df	36		36		36					
授業からの情報	あり	.101	.976	-.198	.744	.065	.784					
	なし	-.233	.586	.626	.786	.048	.858					
	t値	.967		-2.869**		.057						
	df	36		36		36						
単語刺激『知的障害者』	書籍からの情報	あり	-.107	.833	-.023	.824	-.050	.785	-.081	.765	-.097	.738
		なし	.459	.940	-.008	1.027	.324	.745	.493	.483	.435	.592
		t値	-1.500		-.039		-1.118		-1.760		-1.660	
		df	36		36		36		36		36	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.006	.819	-.033	.835	.029	.717	-.194	.697	.134	.733
		なし	-.084	1.019	.014	.911	-.047	.979	.581	.617	-.424	.602
		t値	.279		-.150		.261		-3.103		2.157	
		df	36		36		36		36		36	
	フィクション作品からの情報	あり	-.202	.812	.027	.820	-.075	.770	-.124	.775	-.096	.767
		なし	.577	.781	-.176	.948	.280	.798	.441	.497	.255	.587
		t値	-2.537*		.627		-1.199		-2.051*		-1.262	
		df	36		36		36		36		36	
授業からの情報	あり	-.176	.927	-.021	.893	.124	.728	-.114	.789	.053	.712	
	なし	.201	.737	-.021	.799	-.148	.847	.179	.689	-.104	.782	
	t値	-1.344		.002		1.060		-1.192		.642		
	df	36		36		36		36		36		
単語刺激『運動障害者』	書籍からの情報	あり	.021	.863	.034	.762	-.054	.783	-.039	.741		
		なし	-.175	.835	-.063	1.031	.205	.629	.460	.631		
		t値	.511		.269		-.764		-1.543			
		df	36		36		36		36			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.110	.703	-.011	.789	-.001	.794	-.067	.783		
		なし	.271	1.170	.101	.848	-.049	.690	.339	.527		
		t値	-.968		-.377		.169		-1.515			
		df	11.409		36		36		36			
	フィクション作品からの情報	あり	-.120	.832	.124	.604	-.099	.797	-.107	.705		
		なし	-.142	.878	-.126	1.004	.104	.711	.241	.763		
		t値	-.936		.886		-.809		1.451			
		df	36		22.807		36		36			
授業からの情報	あり	.023	.884	.036	.717	-.142	.730	.021	.746			
	なし	-.116	.772	-.037	1.057	.404	.737	.099	.763			
	t値	.423		.237		-1.956†		-.271				
	df	36		36		36		36				

† p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

(2) 接触経験のない男子学生の障害者イメージ適用に影響する情報源

Table 89、Table90 に示す通りの結果が得られた。

具体的視覚障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的視覚障害者イメージの適用に情報が与える影響について、いずれの要因・次元においても有意差はみられなかった。

具体的聴覚障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的聴覚障害者イメージの適用に情報が与える影響について、「ドキュメンタリー番組からの情報」において、第 2 次元で有意傾向がみられた ($t=1.722$, $p<.10$)。すなわち、ドキュメンタリー番組から障害者の情報を得た者は、聴覚障害者が外界のストレスに対して『耐える』などの受動的な対応をとるイメージを適用させ、ドキュメンタリー番組から情報を得ていない者は、他者との交流に対して能動的ながらもやりとりに問題があるイメージを適用させた。

具体的知的障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的知的障害者イメージの適用に情報が与える影響について、「書籍からの情報」において第 4 次元で ($t=2.248$, $p<.05$)、「ドキュメンタリー番組からの情報」において第 3 次元で ($t=2.523$, $p<.05$)、「フィクション作品からの情報」において第 3 次元で ($t=-2.096$, $p<.05$)、それぞれ有意差がみられた。また、「フィクション作品からの情報」において第 1 次元で ($t=-1.776$, $p<.10$)、「授業からの情報」において第 3 次元、第 4 次元で有意傾向がみられた (第 3 次元 $t=1.876$, $p<.10$; 第 4 次元 $t=1.930$, $p<.10$)。すなわち、書籍から障害者に関する情報を得ている者は知的障害者の能力に着目したイメージを適用させるのに対し、書籍から情報を得ていない者は、知的障害者に対して道徳的な人の好きなど、温かさに関するイメージを適用させていた。ドキュメンタリー番組からの情報を得た者は障害の状態に合わせて補助具を使いアクティブに活動する様子を、ドキュメンタリー番組からの情報を得ていない者は利己的な様子を知的障害者イメージとして適用させた。フィクション作品から障害者に関する情報を得ている者は、知的障害者の能動的な対人交流の様子や、利己的な様子をイメージとして適用させた。対して、フィクション作品から障害者に関する情報を得ていない者は、知的障害者の能力の低さや対人交流に積極的でない様子を思い描く一方、補助具を用いて活発に活動するイメージも適用させた。授業から障害者に関する情報を得ている者は、補助具を使いアクティブに活動する様子をイメージとして適用させ、知的障害者の能力に着目するのに対し、授業から障害者に関する情報を得ていない者は、知的障害者の利己的な様子とあわせて、知的障害の状態そのものや、人の好きについてもイメージをもち、それ

を適用させていることが示された。

具体的運動障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的運動障害者イメージの適用に情報源が与える影響について、「事件報道からの情報」において第1次元で($t=1.763$, $p<.10$)、また「授業からの情報」において第1次元で有意傾向がみられた($t=-1.810$, $p<.10$)。すなわち、事件報道から障害者の情報を得ている者や、授業で障害者の情報を得ていない者は、運動障害者の自立した様子に着目したイメージを適用させ、事件報道から障害者の情報を得ていない者や、授業で障害者の情報を得ている者は、運動障害者の具体的な障害の状態や、賢さといった能力に着目したイメージを適用させていることが示された。

単語刺激『視覚障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『視覚障害者』イメージの適用に情報源が与える影響について、「書籍からの情報」において第3次元で有意傾向がみられた ($t=1.933$, $p<.10$)。また、「授業からの情報」において、第2次元で有意差がみられた ($t=2.196$, $p<.05$)。すなわち、書籍から障害者に関する情報を得ている者は、視覚障害者という集団に対して自立したイメージを適用させており、書籍から障害者に関する情報を得ていない者は、視覚障害者の人の良さや道徳的な態度に着目したイメージを適用させていた。また、授業で障害者に関する情報を得ている者は、視覚障害者が対人交流に抵抗をもつ様子をイメージとして適用させているのに対し、授業で障害者に関する情報を得ていない者は、視覚障害者に対して人の良さや能力の高さなど、賞賛される内容のイメージを適用させていることが明らかとなった。

単語刺激『聴覚障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『聴覚障害者』イメージの適用に情報源が与える影響について、「ドキュメンタリー番組からの情報」において、第2次元で有意差がみられた ($t=2.424$, $p<.05$)。また、「授業からの情報」において、第2次元で有意傾向がみられた ($t=-1.769$, $p<.10$)。このことから、ドキュメンタリー番組や授業から障害者に関する情報を得ている者は、聴覚障害者という集団に対して何らかのストレスを受けた後の行動特徴に着目したイメージが適用されており、ドキュメンタリー番組や授業から障害者に関する情報を得ていない者は、聴覚障害者がストレスを受けることそのものに着目したイメージが適用されていた。

単語刺激『知的障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『知的障害者』イメージの適用に情報源が与える要因について、「書籍からの情報」において第2次元で ($t=2.054$, $p<.05$)、また「フィクション作品からの情報」において第1次元で ($t=2.275$, $p<.05$)、それぞれ有意差がみられた。また、「授業からの情報」において、第1次元で有

意傾向がみられた ($t=-1.778$, $p<.10$)。すなわち、書籍から障害者に関する情報を得ている者は、知的障害者に対してコミュニケーション困難があるイメージを適用させており、書籍から障害者に関する情報を得ていない者は、知的障害者自身の何らかの活動性に関するイメージを適用させていた。加えて、フィクション作品から障害者に関する情報を得ている者や、授業から障害者に関する情報を得ていない者は、知的障害者に対して活発な様子や能力の高さ、道徳的な態度などの賞賛されうるイメージを適用させ、フィクション作品から障害者に関する情報を得ていない者や、授業から障害者に関する情報を得ている者は、コミュニケーション上の問題など、知的障害者が有する困難に着目したイメージを適用させた。

単語刺激『運動障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『運動障害者』イメージの適用に情報が与える影響について、いずれの情報・次元においても、有意差はみられなかった。

Table 89 男・接触無群において障害者に関する情報源が具体的障害者へのイメージの適用に及ぼす影響

刺激	情報源	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
具体的視覚障害者	書籍からの情報	あり	-.211	.982	.105	.876				
		なし	.196	.560	-.099	.609				
		t 値								
		df		37		29.684				
	事件報道からの情報	あり	.030	.815	-.048	.679				
		なし	-.113	.765	.230	1.070				
		t 値		.400		-.843				
		df		37		37				
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.069	.819	-.084	.655				
		なし	-.168	.752	.225	.952				
		t 値		.804		-.952				
		df		37		12.076				
	フィクション作品からの情報	あり	-.090	.872	.048	.809				
		なし	.229	.577	-.126	.570				
		t 値		-1.153		.672				
		df		37		37				
	授業からの情報	あり	-.278	1.114	.044	.948				
		なし	.135	.595	-.027	.649				
		t 値		-1.210		.270				
		df		37		37				
具体的聴覚障害者	書籍からの情報	あり	.186	.571	.039	.798	-.027	.728		
		なし	-.169	.993	-.073	.822	-.013	.731		
		t 値		1.392		.431			-.059	
		df		32.685		37			37	
	事件報道からの情報	あり	.041	.819	-.009	.876	.060	.736		
		なし	-.259	.958	-.092	.845	-.458	.451		
		t 値		.805		.230			1.660	
		df		37		37			37	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.097	.865	.105	.816	-.042	.716		
		なし	-.302	.699	-.389	.667	.047	.769		
		t 値		1.315		1.722†			-.332	
		df		37		37			37	
	フィクション作品からの情報	あり	-.014	.783	-.077	.865	-.010	.753		
		なし	.015	.981	.104	.658	-.040	.673		
		t 値		-1.101		-.644			.119	
		df		37		37			37	
	授業からの情報	あり	-.004	.925	-.126	.975	.055	.795		
		なし	-.006	.811	.025	.729	-.052	.698		
		t 値		.005		-.536			.425	
		df		37		37			37	
具体的知的障害者	書籍からの情報	あり	.217	.730	.042	.801	.190	.709	.297	.760
		なし	-.163	.869	.0001	.859	-.155	.806	-.238	.725
		t 値		1.435		.157			1.409	
		df		37		37			37	
	事件報道からの情報	あり	.032	.812	.096	.796	-.051	.812	.056	.749
		なし	-.098	1.034	-.400	.913	.303	.434	-.251	.967
		t 値		.347		1.375			-1.033	
		df		37		37			37	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.001	.874	.115	.820	.202	.626	.026	.816
		なし	.051	.752	-.258	.802	-.571	.897	-.041	.702
		t 値		-1.166		1.247			2.523*	
		df		37		37			12.171	
	フィクション作品からの情報	あり	-.142	.799	.011	.829	-.120	.880	.030	.817
		なし	.359	.844	.038	.843	.285	.324	-.040	.721
		t 値		-1.776†		-.093			-2.096*	
		df		37		37			36.287	
	授業からの情報	あり	.088	.913	-.038	.901	.341	.666	.358	.495
		なし	-.021	.814	.045	.801	-.146	.780	-.146	.839
		t 値		.373		-.289			1.876†	
		df		37		37			37	
具体的運動障害者	書籍からの情報	あり	-.018	.966	-.038	.904	-.163	.766		
		なし	.104	.775	-.095	.546	.148	.659		
		t 値		-.437		.223			-1.361	
		df		37		30.234			37	
	事件報道からの情報	あり	.149	.849	-.107	.779	-.023	.738		
		なし	-.505	.743	.140	.714	.157	.634		
		t 値		1.763†		-.720			-.559	
		df		37		37			37	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.162	.799	.047	.802	.050	.708		
		なし	-.283	.982	-.405	.550	-.126	.770		
		t 値		1.435		1.645			.662	
		df		37		37			37	
	フィクション作品からの情報	あり	.154	.830	-.090	.785	.022	.751		
		なし	-.190	.911	-.021	.751	-.035	.668		
		t 値		1.161		-.258			.228	
		df		37		37			37	
	授業からの情報	あり	-.315	.766	.156	.664	.089	.681		
		なし	.209	.861	-.169	.798	-.033	.743		
		t 値		-1.810		1.230			.486	
		df		37		37			37	

† p<.10, *p<.05

Table90 男・接触無群において障害者に関する情報源が単語刺激『障害者』へのイメージの適用に及ぼす影響

刺激	情報源	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
単語刺激『視覚障害者』	書籍からの情報	あり	-.0001	.860	.116	.924	.251	.822		
		なし	.013	.916	-.107	.706	-.205	.652		
		t値		-.048		.854		1.933		
		df	37		37		37			
	事件報道からの情報	あり	-.082	.886	.001	.783	-.006	.762		
		なし	.496	.714	-.033	1.031	.071	.821		
		t値		-1.507		.092		-2.24		
		df	37		37		37			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.023	.917	-.036	.826	-.052	.748		
		なし	.094	.798	.087	.800	.173	.813		
		t値		-.357		-.408		-.801		
		df	37		37		37			
	フィクション作品からの情報	あり	-.022	.853	-.013	.824	.080	.790		
		なし	.073	.971	.015	.813	-.161	.695		
		t値		-.310		-.101		.909		
	df	37		37		37				
授業からの情報	あり	-.212	1.033	.489	1.060	-.139	.647			
	なし	.105	.804	-.224	.567	.070	.809			
	t値		-1.040		2.196*		-.790			
	df	37		13.884		37				
単語刺激『聴覚障害者』	書籍からの情報	あり	-.237	.885	-.215	.816	.030	.819	-.019	.647
		なし	.126	.816	.194	.768	.017	.823	-.021	.901
		t値		-1.330		-1.612		.049		.008
		df	37		37		37		37	
	事件報道からの情報	あり	.006	.902	-.060	.845	.012	.857	-.043	.811
		なし	-.306	.526	.364	.448	.083	.534	.109	.657
		t値		.817		-1.188		-.196		-.432
		df	37		37		37		37	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.002	.826	-.118	.884	.056	.760	-.104	.731
		なし	-.169	.977	.364	.357	-.072	.980	.224	.916
		t値		.541		-2.424*		.426		-1.148
		df	37		35.804		37		37	
	フィクション作品からの情報	あり	-.010	.927	.038	.837	-.042	.877	.038	.788
		なし	-.114	.705	-.068	.766	-.019	.669	-.151	.791
		t値		.346		.375		.211		.692
	df	37		37		37		37		
授業からの情報	あり	-.057	.742	-.328	.927	.164	.872	-.277	.742	
	なし	-.035	.916	.154	.717	-.039	.791	.094	.788	
	t値		-.075		-1.769†		.718		-1.382	
	df	37		37		37		37		
単語刺激『知的障害者』	書籍からの情報	あり	.219	1.072	.291	.869	-.108	.609	.200	.711
		なし	-.172	.758	-.228	.718	.029	.967	-.167	.753
		t値		1.328		2.045*		-.520		1.556
		df	37		37		37		37	
	事件報道からの情報	あり	.006	.984	-.025	.834	-.048	.820	.065	.762
		なし	.024	.552	.214	.801	.040	.857	-.341	.611
		t値		-.043		-.650		-.240		1.231
		df	37		37		37		37	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.043	1.012	.067	.848	-.062	.767	-.028	.742
		なし	-.091	.642	-.148	.766	.046	.979	.091	.799
		t値		.391		.708		-.357		-.431
		df	37		37		37		37	
	フィクション作品からの情報	あり	.178	1.029	-.009	.849	-.031	.811	.025	.815
		なし	-.372	.479	.059	.798	-.042	.859	-.049	.600
		t値		2.275		-.235		.040		.282
	df	36.838		37		37		37		
授業からの情報	あり	-.294	.489	.017	1.027	-.103	.723	.106	.702	
	なし	.143	1.044	.009	.738	-.004	.863	-.044	.776	
	t値		-1.778†		.027		-.347		.569	
	df	36.796		37		37		37		
単語刺激『運動障害者』	書籍からの情報	あり	-.106	.997	-.239	.868	-.219	.941		
		なし	.016	.948	.068	.967	.188	.849		
		t値		-.392		-1.037		-1.422		
		df	37		37		37			
	事件報道からの情報	あり	-.071	.989	-.058	.928	.057	.949		
		なし	.127	.841	-.158	.984	-.314	.561		
		t値		-.460		.240		.923		
		df	37		37		37			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.046	.974	-.099	.961	.077	.973		
		なし	-.024	.969	-.001	.850	-.224	.656		
		t値		-.061		-.287		.905		
		df	37		37		37			
	フィクション作品からの情報	あり	-.022	1.064	-.229	.968	.083	.980		
		なし	-.082	.711	.275	.739	-.188	.705		
		t値		.177		-1.602		.861		
	df	37		37		37				
授業からの情報	あり	.168	.691	.085	.780	-.001	.727			
	なし	-.133	1.057	-.144	.987	.0004	.985			
	t値		.899		.711		-.003			
	df	37		37		37				

† p<.10, *p<.05

(3) 接触経験のある女子学生の障害者イメージ適用に影響する情報源

Table 91、Table92 に示す通りの結果が得られた。

具体的視覚障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的視覚障害者イメージの適用に情報源が与える影響については、「フィクション作品からの情報」において、第1次元で有意傾向がみられ ($t=-1.716$, $p<.10$)、また「授業からの情報」において、第2次元で有意差がみられた ($t=-2.357$, $p<.05$)。すなわち、フィクション作品から障害者に関する情報を得ている者は、刺激文中の視覚障害者に対して能力が高いイメージを適用させており、フィクション作品から情報を得ていない者は、自立という個人の能力で課題解決を行うイメージを適用させていた。また、授業から障害者に関する情報を得た者は、刺激文中の視覚障害者に対して能力の高さに着目したイメージを適用させ、授業から障害者に関する情報を得ていない者は、人物の温かさに着目したイメージを適用させた。

具体的聴覚障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的聴覚障害者イメージの適用に情報源が与える影響については、「書籍からの情報」において、第2次元で有意傾向がみられた ($t=-1.744$, $p<.10$)。「フィクション作品からの情報」において、第2次元および第3次元で有意傾向がみられた(第2次元 $t=-1.908$, $p<.10$; 第3次元 $t=-1.556$, $p<.10$)。また、「授業からの情報」において、第2次元で有意差がみられた ($t=-2.231$, $p<.05$)。このことから、書籍から障害者に関する情報を得ている者は、刺激文中の聴覚障害者に対して、コミュニケーションスキルの問題に起因する困難というイメージが適用され、書籍から障害者に関する情報を得ていない者は、人物の対人交流上の抵抗感に起因する困難に対するイメージが適用された。また、フィクション作品から障害者に関する情報を得ている者は、聴覚障害者に対してコミュニケーションスキル上の困難や、個人の能力で課題解決を行うイメージを適用させていた。対して、フィクション作品から障害者に関する情報を得ていない者は、対人交流の意欲の低下を含む対人交流困難をイメージとして適用させた。授業から障害者の情報を得ている者は、聴覚障害者のコミュニケーションスキル上の困難を、授業から障害者の情報を得ていない者は、対人交流意欲の低下というイメージを適用させた。

具体的知的障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的知的障害者イメージの適用に情報源が与える影響については、「ドキュメンタリー番組からの情報」において、第3次元で有意差がみられた ($t=-2.102$, $p<.05$)。また、「フィクション作品からの情報」において、第1次元および第3次元で有意差がみられた(第1次元 $t=-2.040$, $p<.05$;

第3次元 $t=-2.079$, $p<.05$)。さらに、「授業からの情報」において、第1次元で有意差がみられた ($t=-2.501$, $p<.05$)。このことから、ドキュメンタリー番組で障害者に関する情報を得た者は、刺激文中の知的障害者に対して日常的に安定してみられる状況のイメージを適用させ、ドキュメンタリー番組で情報を得ていない者は、刺激文中の人物の活動特徴に着目したイメージを適用させていることが示された。また、フィクション作品から障害者の情報を得ている者は、刺激文中の人物に対してその活動性や日常的に安定してみられる状態をイメージとして適用させているのに対し、フィクション作品から障害者の情報を得ていない者は、刺激文中の人物に対して障害の具体的な特徴や敏感な様子、活動の特徴に関するイメージを適用させた。さらに、授業から障害者の情報を得ている者は、刺激文中の人物に対して何らかの活動性に着目したイメージを適用させるのに対し、授業から障害者の情報を得ていない者は、障害の具体的な特徴や敏感な様子をイメージとしていることが示された。

具体的運動障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的運動障害者イメージの適用に情報源が与える影響について、「書籍からの情報」において第1次元で有意差が ($t=2.608$, $p<.05$)、「ドキュメンタリー番組からの情報」において、第1次元で有意傾向がみられた ($t=1.938$, $p<.10$)。また、「フィクション作品からの情報」において、第1次元で有意傾向がみられた ($t=1.744$, $p<.10$)。すなわち、書籍やドキュメンタリー番組、フィクション作品から障害者に関する情報を得ている者は、運動障害者に対して近い存在ではないが賞賛すべき対象とみなすイメージを適用させており、書籍、ドキュメンタリー番組やフィクション作品から障害者に関する情報を得ていない者は、障害者の具体的特徴に関するイメージを適用させていることが示された。

単語刺激『視覚障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『視覚障害者』イメージの適用に情報源が与える影響については、いずれの要因・次元においても有意差はみられなかった。

単語刺激『聴覚障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『聴覚障害者』イメージの適用に情報源が与える影響については、「授業からの情報」において、第4次元で有意傾向がみられた ($t=-1.846$, $p<.10$)。このことから、授業から障害者に関する情報を得ている者は、聴覚障害者に対して安定してみられる性格に関するイメージを適用させ、授業から情報を得ていない者は、障害の具体的特徴に関するイメージを適用させることが示された。

単語刺激『知的障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『知的障害者』イメージの適用に情報源が与える影響については、「書籍からの情報」において第2次元、第3次元で有意差がみられた（第2次元 $t=-2.113$, $p<.05$; 第3次元 $t=-2.953$, $p<.01$ ）。「授業からの情報」において、第2次元で有意差が ($t=-2.055$, $p<.05$)、第3次元で有意傾向がみられた ($t=-2.026$, $p<.10$)。すなわち、書籍や授業から障害者の情報を得ている者は、知的障害者に対して能動性や対人交流の様子をイメージとして適用させ、本や授業から障害者の情報を得ていない者は、知的障害者に対して社会的不利な状況や活動の特徴を適用させることが示された。

単語刺激『運動障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『運動障害者』イメージの適用に情報源が与える影響について、「ドキュメンタリー番組からの情報」において、第1次元および第4次元で有意傾向がみられた（第1次元 $t=-1.819$, $p<.10$; 第4次元 $t=-1.878$, $p<.10$ ）。また、「授業からの情報」において、第4次元で有意傾向がみられた ($t=-1.945$, $p<.10$)。すなわち、ドキュメンタリー番組から障害者の情報を得ている者は、運動障害者に対して有能ではあるがストレスを受けて傷つく様子をイメージとして適用させ、ドキュメンタリー番組で情報を得ていない者は、運動障害者に対して自立のための能力を持ち、かつストレスに耐える様子をイメージとして適用させることが示された。さらに、授業で障害者に関する情報を得ている者は、運動障害者に対して対人交流に着目したイメージを適用させるのに対し、授業で障害者に関する情報を得ていない者は、困難やストレスに対する反応に着目したイメージを適用させた。

Table 91 女・接触有群の具体的障害者に関する情報源が具体的障害者へのイメージの適用に及ぼす影響

刺激	情報源	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
具体的視覚障害者	書籍からの情報	あり	.028	0.811	-0.037	0.706				
		なし	-0.233	0.768	0.049	0.859				
		t 値	0.853		-0.314					
		df	59		59					
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-0.045	0.827	-0.043	0.717				
		なし	0.124	0.737	0.033	0.754				
		t 値	-0.687		-0.344					
		df	59		59					
	フィクション作品からの情報	あり	-0.132	0.885	-0.127	0.739				
		なし	0.234	0.567	0.166	0.659				
		t 値	-1.716†		-1.526					
		df	59		59					
授業からの情報	あり	-.021	.872	-.121	.732					
	なし	.049	.502	.326	.569					
	t 値	-.276		-2.357*						
	df	59		23.945						
具体的聴覚障害者	書籍からの情報	あり	.050	.813	-.080	.799	.027	.740		
		なし	-.280	.957	.433	.565	-.100	.747		
		t 値	1.049		-1.744†		.455			
		df	59		59		59			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.030	.836	.068	.765	-.029	.769		
		なし	.131	.834	-.283	.832	.146	.621		
		t 値	-.631		1.481		-.783			
		df	59		59		59			
	フィクション作品からの情報	あり	.042	.752	-.148	.853	-.094	.786		
		なし	-.060	.982	.248	.581	.210	.597		
		t 値	.417		-1.908†		-1.556			
		df	32.624		59		59			
授業からの情報	あり	.049	.773	-.126	.813	.025	.734			
	なし	-.150	1.041	.407	.523	-.044	.772			
	t 値	.767		-2.231		.300				
	df	59		59		59				
具体的知的障害者	書籍からの情報	あり	-.014	.808	.022	.832	-.065	.838	-.024	.689
		なし	.178	.872	-.217	.738	.242	.573	.073	1.054
		t 値	-.622		.769		-.997		-.251	
		df	59		59		59		7.927	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.069	.849	-.052	.909	-.140	.842	-.034	.683
		なし	.278	.622	.138	.373	.364	.563	.065	.919
		t 値	-1.415		-1.114		-2.102*		-.437	
		df	59		52.888		59		59	
	フィクション作品からの情報	あり	-.139	.805	-.021	.930	-.177	.834	-.003	.636
		なし	.296	.764	.014	.570	.265	.694	-.025	.915
		t 値	-2.040*		-.182		-2.076*		.104	
		df	59		57.420		59		30.440	
授業からの情報	あり	-.084	.862	.011	.882	-.015	.853	-.077	.704	
	なし	.362	.461	-.082	.548	-.061	.662	.234	.829	
	t 値	-2.501*		.363		.183		-1.363		
	df	37.009		59		59		59		
具体的運動障害者	書籍からの情報	あり	.076	.844	.0002	.785	.029	.748	.035	.676
		なし	-.420	.426	.005	.736	-.220	.396	-.269	.834
		t 値	2.608*		-.016		.919		1.147	
		df	16.954		59		59		59	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.100	.859	.025	.810	-.012	.759	.048	.664
		なし	-.290	.589	-.082	.654	.025	.561	-.188	.801
		t 値	1.938†		.451		-.171		1.115	
		df	31.158		59		59		59	
	フィクション作品からの情報	あり	.140	.838	-.050	.813	.037	.847	-.006	.709
		なし	-.237	.731	.098	.700	-.081	.348	-.006	.693
		t 値	1.744†		-.707		.766		.001	
		df	59		59		56.666		59	
授業からの情報	あり	.067	.834	-.055	.824	-.055	.748	-.005	.704	
	なし	-.199	.745	.206	.518	.186	.557	-.011	.704	
	t 値	1.043		-1.082		-1.079		.030		
	df	59		59		59		59		

† p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 92 女・接触有群の単語『障害者』に関する情報源が具体的障害者へのイメージの適用に及ぼす影響

刺激	情報源	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
単語刺激『視覚障害者』	書籍からの情報	あり	-.010	.860	-.012	.842	-.019	.762		
		なし	.059	.831	.119	.583	.069	.668		
		t 値	-.212		-.425		-.307			
		df	59		59		59			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.030	.852	.005	.840	-.010	.760		
		なし	-.106	.863	.004	.726	.003	.720		
		t 値	.525		.004		-.059			
		df	59		59		59			
	フィクション作品からの情報	あり	.089	.844	-.017	.869	-.066	.679		
		なし	-.017	.854	.048	.702	.104	.865		
		t 値	1.148		-.296		-.845			
		df	59		59		59			
授業からの情報	あり	-.035	.875	.004	.830	-.051	.725			
	なし	.124	.766	.007	.762	.155	.828			
	t 値	-.594		-.013		-.881				
	df	59		59		59				
単語刺激『聴覚障害者』	書籍からの情報	あり	.015	.934	.022	.784	-.034	.778	-.041	.714
		なし	.157	.733	-.099	1.007	.046	.446	.125	.783
		t 値	-.412		.391		-.281		.525	
		df	59		59		59		59	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.081	.961	.040	.820	-.047	.790	-.032	.702
		なし	-.127	.696	-.107	.785	.058	.557	.022	.797
		t 値	.753		.596		-.562		-.242	
		df	59		59		30.198		59	
	フィクション作品からの情報	あり	.089	.984	.030	.908	-.063	.780	-.042	.667
		なし	-.073	.762	-.038	.589	.052	.671	.023	.824
		t 値	.662		.351		-.573		-.335	
		df	59		56.180		59		59	
授業からの情報	あり	-.011	.923	.009	.740	.006	.796	-.106	.677	
	なし	.198	.855	-.004	1.058	-.131	.491	.300	.803	
	t 値	-.734		.042		.767		-1.846†		
	df	59		15.321		31.103		59		
単語刺激『知的障害者』	書籍からの情報	あり	-.026	.915	-.092	.789	-.101	.705	.018	.750
		なし	-.093	.492	.540	.779	.775	1.209	-.366	.486
		t 値	-.201		-2.113*		-2.953**		1.397	
		df	59		59		59		59	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.035	.766	-.026	.821	.001	.809	-.060	.754
		なし	-.271	1.151	.049	.802	.055	.932	.060	.657
		t 値	1.160		-.303		-.210		-.537	
		df	59		59		59		59	
	フィクション作品からの情報	あり	-.040	.823	.042	.797	-.064	.895	-.049	.619
		なし	-.026	.970	-.108	.847	.160	.689	-.002	.919
		t 値	-.059		.685		-1.000		-.207	
		df	59		59		59		29.802	
授業からの情報	あり	.010	.854	-.118	.802	-.127	.682	.026	.770	
	なし	-.201	.934	.390	.739	.534	1.123	-.248	.523	
	t 値	.774		-2.055*		-2.026†		1.206		
	df	59		59		14.478		59		
単語刺激『運動障害者』	書籍からの情報	あり	-.056	.905	.006	.789	.014	.775	-.006	.719
		なし	.159	.711	.082	.887	.009	.816	.107	.869
		t 値	-.643		-.248		.017		-.402	
		df	59		59		59		59	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.111	.948	.006	.790	-.031	.788	.103	.682
		なし	.249	.529	.050	.841	.164	.733	-.308	.834
		t 値	-1.819†		-.181		-.825		1.878†	
		df	39.580		59		59		59	
	フィクション作品からの情報	あり	-.073	.962	-.001	.831	.033	.694	.031	.731
		なし	.058	.710	.048	.740	-.024	.925	-.035	.753
		t 値	-.551		-.227		.272		.333	
		df	59		59		59		59	
授業からの情報	あり	-.056	.888	.016	.828	-.020	.801	-.084	.695	
	なし	.075	.875	.016	.692	.137	.679	.352	.796	
	t 値	-.472		.004		-.646		-1.945†		
	df	59		59		59		59		

† p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

(4) 接触経験のない女子学生の障害者イメージ適用に影響する情報源

Table 93、94 に示す通りの結果が得られた。

具体的視覚障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的視覚障害者イメージの適用に情報が与える影響については、「事件報道からの情報」において、第 2 次元で有意傾向がみられた ($t=1.933$, $p<.10$)。すなわち、事件報道から障害者に関する情報を得ている者は、刺激文中の視覚障害者に対して単独で課題を解決できる自立能力をもったイメージを適用させ、事件報道から障害者に関する情報を得ていない者は、刺激文中の人物に対して補助具を使いながら活発に活動するイメージを適用させていることが明らかとなった。

具体的聴覚障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的聴覚障害者イメージの適用に情報が与える影響について、「事件報道からの情報」において第 3 次元で有意差がみられた。 ($t=2.288$, $p<.05$)。また「ドキュメンタリー番組からの情報」において、第 3 次元で有意差がみられた ($t=-2.929$, $p<.01$)。さらに、「フィクション作品からの情報」において、第 2 次元で有意傾向がみられた ($t=1.719$, $p<.10$)。すなわち、事件報道から障害者に関する情報を得ている者、あるいはドキュメンタリー番組で情報を得ていない者は、聴覚障害者に対して、対人交流が少なく、受け身的である様子をイメージとして適用させており、それに対して事件報道から障害者に関する情報を得ていない者、またはドキュメンタリー番組で情報を得ている者は、他者と対人交流を行うイメージを適用させていた。また、フィクション作品から障害者に関する情報を得ている者は、聴覚障害者が劣等感を抱くイメージを適用させ、対してフィクション作品から情報を得ていない者は、聴覚障害者に対して尊敬されうる人物像をイメージとして適用させていることが明らかとなった。

具体的知的障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的知的障害者イメージの適用に情報が与える影響について、「フィクション作品からの情報」において、第 3 次元で有意差がみられた ($t=3.353$, $p<.01$)。すなわち、フィクション作品から障害者に関する何らかの情報を得ている者は、能動的な活動性や敏感な様子をイメージとして適用させ、フィクション作品から障害者に関する情報を得ていない者は、障害の具体的な特徴やそれに伴う困難をイメージとして適用させていることが明らかとなった。

具体的運動障害者イメージの適用に影響を与える情報源：具体的運動障害者イメージの適用に情報が与える影響について、「書籍からの情報」において、第 3 次元で有意傾向が

みられた ($t=2.025$, $p<.10$)。また、「事件報道からの情報」において第 1 次元で有意差がみられた ($t=2.484$, $p<.05$)。さらに、「フィクション作品からの情報」において、第 1 次元で有意傾向がみられた ($t=1.793$, $p<.10$)。このことから、書籍から障害者に関する情報を得ている者は、刺激文中の運動障害者に対して他者とあまり関わらずに補助具を用いて日常生活を送る様子をイメージとして適用させており、書籍から情報を得ていない者は個人の能力で課題を解決するイメージを適用させていることが示された。また、事件報道やフィクション作品から障害者に関する情報を得ている者は、刺激文中の運動障害者に対して、その有能さに着目したイメージを適用させており、事件報道やフィクション作品から障害者に関する情報を得ていない者は、障害の具体的特徴に着目したイメージを適用させていることが示された。

単語刺激『視覚障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『視覚障害者』イメージの適用に情報が与える影響について、「事件報道からの情報」において、第 1 次元及び第 2 次元で有意傾向がみられた(第 1 次元 $t=1.695$, $p<.10$; 第 2 次元 $t=-1.820$, $p<.10$)。すなわち、事件報道から障害者に関する情報を得ている者は、視覚障害者に対して『良い』『我慢強い』などのインドネシアにおいて賞賛される人物特徴や、人物に安定してみられるであろう行動特徴をイメージとして適用させているのに対し、事件報道から障害者に関する情報を得ていない者は、視覚障害者に対して『社交的でない』『劣等感の』といった同情につながるイメージを適用させていることが示された。

単語刺激『聴覚障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『聴覚障害者』イメージの適用に情報が与える影響について、「事件報道からの情報」において、第 1 次元で有意差がみられた ($t=3.353$, $p<.05$)。すなわち、事件報道から障害者に関する情報を得ている者は、聴覚障害者に対して、困難に何らかの対応能力を発揮している様子をイメージとして適用させており、事件報道から障害者に関する情報を得ていない者は、対人交流に積極的でなく、精神的に傷つく様子を適用させていることが示された。

単語刺激『知的障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『知的障害者』イメージの適用に情報が与える影響について、いずれの情報・次元においても、有意差はみられなかった。

単語刺激『運動障害者』イメージの適用に影響を与える情報源：単語刺激『運動障害者』イメージの適用に情報が与える影響について、「書籍からの情報」「事件報道からの情報」において、第 2 次元で有意差がみられた(書籍からの情報 $t=-2.681$, $p<.05$; 事件報道か

らの情報 $t=-2.606$, $p<.05$)。また、「フィクション作品からの情報」において、第 3 次元で有意差がみられた ($t=-2.182$, $p<.05$)。すなわち、書籍や事件報道から障害者に関する情報を得ている者は、運動障害者に対して対人交流上の困難に耐える様子をイメージとして適用させており、書籍や事件報道から障害に関する情報を得ていない者は、運動障害者に対して対人交流に傷つきやすい様子や消極的な様子をイメージとして適用させていた。また、フィクション作品から障害者に関する情報を得ている者は、障害の具体的な特徴を運動障害者イメージとして適用させており、フィクション作品から障害者に関する情報を得ていない者は、運動障害者に対して対人交流に消極的であり、それに耐えるイメージを適用させていることが明らかとなった。

Table 93 女・接触無群において障害者に関する情報源が具体的障害者へのイメージの適用に及ぼす影響

刺激	情報源	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
具体的視覚障害者	書籍からの情報	あり	.051	.1070	.071	.852	-.078	.864		
		なし	-.128	.798	-.068	.683	.011	.759		
		t 値		.715		.678		-.413		
		df	54		54		54			
	事件報道からの情報	あり	.017	.660	.066	.761	.035	.734		
		なし	-.509	2.018	-.513	.551	-.475	1.140		
		t 値		.686		1.933†		1.597		
		df	6.185		54		54			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.058	.933	.081	.766	-.015	.819		
		なし	-.017	.935	-.267	.698	-.070	.772		
		t 値		-.145		1.502		.224		
		df	54		54		54			
	フィクション作品からの情報	あり	-.086	1.068	.039	.905	-.053	.961		
		なし	-.0003	.728	-.063	.539	.001	.560		
		t 値		-.343		.526		-.266		
		df	54		50.072		49.569			
授業からの情報	あり	-.094	1.113	.085	.840	.079	.979			
	なし	-.020	.808	-.061	.713	-.093	.680			
	t 値		-.288		.692		.776			
	df	54		54		54				
具体的聴覚障害者	書籍からの情報	あり	.093	.765	-.121	.816	-.096	.703		
		なし	-.133	.850	.106	.680	.103	.836		
		t 値		1.030		-1.133		-.945		
		df	54		54		54			
	事件報道からの情報	あり	.007	.834	.027	.771	.101	.716		
		なし	-.305	.643	-.151	.546	-.594	.990		
		t 値		.948		.586		2.288*		
		df	54		54		54			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.00002	.810	-.002	.796	-.151	.802		
		なし	-.128	.848	.026	.590	.510	.436		
		t 値		.505		-1.119		-2.929**		
		df	54		54		54			
	フィクション作品からの情報	あり	-.118	.820	.156	.683	.044	.768		
		なし	.075	.809	-.183	.789	-.023	.808		
		t 値		-.883		1.719†		.313		
		df	54		54		54			
授業からの情報	あり	-.152	.765	.121	.644	-.234	.993			
	なし	.040	.844	-.065	.800	.163	.585			
	t 値		-.854		.901		-1.667			
	df	54		54		28.570				
具体的知的障害者	書籍からの情報	あり	.058	.874	-.055	.924	.044	.774	.071	.831
		なし	-.035	.812	.150	.815	-.052	.791	-.005	.771
		t 値		.411		-.883		.456		.354
		df	54		54		54			54
	事件報道からの情報	あり	-.024	.858	.060	.863	-.013	.802	.024	.806
		なし	.221	.651	.047	.938	.024	.636	.061	.746
		t 値		-.726		.038		-.117		-.115
		df	54		54		54			54
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.105	.790	.121	.928	.068	.833	.007	.803
		なし	-.289	.920	-.129	.623	-.240	.543	.093	.783
		t 値		1.554		.938		1.294		-.348
		df	54		54		54			54
	フィクション作品からの情報	あり	-.046	.744	.093	.919	.278	.810	.063	.754
		なし	.072	.944	.017	.806	-.365	.572	-.013	.850
		t 値		-.526		.325		3.353**		.352
		df	45.041		54		54			54
授業からの情報	あり	-.138	.874	.230	.894	-.147	.590	.128	.728	
	なし	.093	.809	-.044	.841	.074	.869	-.030	.832	
	t 値		-1.004		1.150		-1.032		.719	
	df	54		54		54			54	
具体的運動障害者	書籍からの情報	あり	.178	.918	.068	.769	.218	.856		
		なし	-.049	.803	-.097	.745	-.176	.599		
		t 値		.987		.813		1.951†		
		df	54		54		41.518			
	事件報道からの情報	あり	.103	.900	-.051	.757	.029	.738		
		なし	-.299	.260	.173	.754	-.202	.817		
		t 値		2.484*		-.735		.765		
		df	32.380		54		54			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.077	.862	.003	.749	-.020	.746		
		なし	-.021	.799	-.103	.788	.063	.766		
		t 値		.368		.451		-.365		
		df	54		54		54			
	フィクション作品からの情報	あり	.233	.910	-.047	.766	-.078	.773		
		なし	-.171	.741	.005	.752	.097	.712		
		t 値		1.833†		-.255		-.876		
		df	53.991		54		54			
授業からの情報	あり	.090	.818	.116	.807	-.014	.808			
	なし	.030	.889	-.107	.718	.009	.716			
	t 値		.251		1.070		-.110			
	df	54		54		54				

†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table94 女・接触無群において障害者に関する情報源が単語刺激『障害者』へのイメージの適用に及ぼす影響

刺激	情報源	第1次元		第2次元		第3次元		第4次元		
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
単語刺激『視覚障害者』	書籍からの情報	あり	.043	.839	-.056	.885	.102	.825		
		なし	-.080	.841	.028	.710	-.084	.657		
		t 値		.548		-.395		.940		
		df	54		54		54			
	事件報道からの情報	あり	.045	.820	-.080	.782	.017	.760		
		なし	-.517	.827	.486	.673	-.126	.563		
		t 値		1.695†		-1.820†		.475		
		df	54		54		54			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.010	.834	.008	.802	-.049	.707		
		なし	-.131	.861	-.063	.767	.144	.826		
		t 値		.545		.289		-.851		
		df	54		54		54			
	フィクション作品からの情報	あり	-.073	.796	-.057	.748	-.034	.720		
		なし	.035	.893	.050	.844	.040	.768		
		t 値		-.478		-.503		-.374		
		df	54		54		54			
授業からの情報	あり	-.001	.754	.017	.750	.088	.707			
	なし	-.040	.890	-.025	.819	-.054	.756			
	t 値		.168		.193		.698			
	df	54		54		54				
単語刺激『聴覚障害者』	書籍からの情報	あり	.009	1.018	.063	.749	.138	.879	-.056	.770
		なし	-.021	.709	-.007	.854	-.113	.668	.027	.686
		t 値		.130		.322		1.217		-.427
		df	54		54		54		54	
	事件報道からの情報	あり	.059	.888	.044	.844	-.008	.759	-.050	.730
		なし	-.472	.250	-.114	.411	.050	.924	.269	.609
		t 値		3.353**		.484		-.187		-1.099
		df	33.363		54		54		54	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.050	.764	-.008	.828	.012	.777	-.056	.739
		なし	.120	1.099	.120	.740	-.042	.786	.127	.662
		t 値		-.641		-.518		.225		-.820
		df	54		54		54		54	
	フィクション作品からの情報	あり	-.116	.827	.131	.620	-.056	.801	-.026	.754
		なし	.127	.880	-.109	.980	.067	.745	.010	.688
		t 値		-1.063		1.066		-.589		-.183
		df	54		38.739		54		54	
授業からの情報	あり	-.027	.735	-.146	.828	-.217	.663	-.130	.669	
	なし	.004	.926	.126	.781	.129	.813	.062	.747	
	t 値		-.131		-1.231		-1.646		-.965	
	df	54		54		54		54		
単語刺激『知的障害者』	書籍からの情報	あり	.075	.871	.157	.978	-.087	.869	.146	.672
		なし	-.069	.828	-.128	.630	.047	.677	-.070	.770
		t 値		.635		1.266		-.649		1.100
		df	54		39.223		54		54	
	事件報道からの情報	あり	-.012	.881	.036	.827	.019	.782	.008	.749
		なし	.044	.551	-.257	.665	-.238	.620	.154	.610
		t 値		-.160		.895		.833		-.492
		df	54		54		54		54	
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	.019	.830	.053	.864	-.050	.779	.021	.712
		なし	-.075	.909	-.162	.613	.099	.732	.044	.809
		t 値		.359		.861		-.627		-1.03
		df	54		54		54		54	
	フィクション作品からの情報	あり	-.011	.950	.124	.854	.092	.837	.093	.689
		なし	.004	.706	-.156	.737	-.143	.656	-.056	.784
		t 値		-.067		1.293		1.146		.755
		df	54		54		54		54	
授業からの情報	あり	-.111	.728	.164	.933	-.027	.708	.139	.663	
	なし	.059	.909	-.100	.721	-.005	.806	-.041	.768	
	t 値		-.729		1.183		-1.103		.895	
	df	54		54		54		54		
単語刺激『運動障害者』	書籍からの情報	あり	-.120	.759	-.321	.775	.0002	.787		
		なし	.036	.883	.220	.732	-.045	.701		
		t 値		-.698		-2.681*		.227		
		df	54		54		54			
	事件報道からの情報	あり	-.094	.829	-.081	.821	-.042	.712		
		なし	.385	.723	.395	.371	.096	.935		
		t 値		-1.450		-2.606*		-.463		
		df	54		16.326		54			
	ドキュメンタリー番組からの情報	あり	-.045	.769	-.110	.781	-.078	.794		
		なし	.0002	1.011	.245	.795	.135	.507		
		t 値		-.178		-1.465		-1.166		
		df	54		54		35.458			
	フィクション作品からの情報	あり	-.033	.836	-.089	.667	-.211	.710		
		なし	-.035	.832	.063	.933	.206	.711		
		t 値		.012		-.710		-2.182		
		df	54		54		54			
授業からの情報	あり	.122	.773	.021	.840	.031	.776			
	なし	-.127	.854	-.047	.774	-.058	.718			
	t 値		1.094		.309		.440			
	df	54		54		54				

†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

6 考察

1) 具体的障害者と単語刺激『障害者』に対するイメージとの構造上の違い

障害者イメージに関して、具体的人物を刺激文という形で提示した場合と、単語刺激として提示した場合とを比較すると、回答頻度 5%以下となり分析から除外される表現語は、いずれの障害種においても、具体的障害者に対する回答の方が多く、それがそのまま、各障害者イメージの次元数の差に反映されている。

第 2 研究では、対象者となった大学生全体の各種障害者イメージの構造を明らかにしたが、第 3 研究では対象者を属性によって 4 種に分け、対象者群ごとの障害者イメージ構造を明らかにした。よって第 2 研究よりも、さらにミクロな障害者イメージ構造を明らかにした形であるが、第 2 研究では、障害者イメージは障害種別を問わず、主に 2 次元で構成されていた。第 3 研究で対象者群ごとに構造を調べたところ、各種障害者イメージは、大学生全体によるイメージ構造よりも次元数が多く、次元内に位置付けられたイメージの表現をみると、第 2 研究で見出されたような具体性と抽象性という二元論に留まらず、多様な関係性により成り立つことが明らかとなった。

2) 障害者に関する情報源がイメージの適用に及ぼす影響

本研究では、障害者に関する情報源がイメージの適用に及ぼす効果を探るため、サンプルスコアによる比較を行った。ここでは、各要因が、回答者群—イメージ刺激のどの組み合わせに対して影響を及ぼしたかについて検討する。すなわち、「書籍からの情報」「事件報道からの情報」「ドキュメンタリー番組からの情報」「フィクション作品からの情報」「授業からの情報」という 5 つの情報源が障害者に対するイメージ適用に示す影響について検討する。

「書籍からの情報」は 10 種の組み合わせ（男・接触有—具体的聴覚障害者、男・接触有—具体的知的障害者、男・接触無—具体的知的障害者、男・接触無—単語『視覚障害者』、男・接触無—単語『知的障害者』、女・接触有—具体的聴覚障害者、女・接触有—具体的運動障害者、女・接触有—単語『知的障害者』、女・接触無—具体的運動障害者、女・接触無—単語『運動障害者』）において、イメージの適用に有意差がみられた。刺激文中の障害者、単語刺激『障害者』のいずれに対しても、「書籍から障害者の情報を得た」者は、障害者に対して能力の高さまたは交流困難の内容を含むイメージを適用させていた。本研究における「書籍」は専門書を含んでおり、後述の「フィクション作品」に属する物語を含まない。

書籍という情報源は、動画を含まず、障害者に関する一般的な事実を伝えるものである。そのため、「書籍から情報を得た」者は、具体的人物、単語刺激の別に関わらず、書籍から得た知識としての能力や交流困難のイメージを刺激に対して適用させたことが考えられる。

「事件報道からの情報」は7種の組み合わせ（男・接触無—具体的運動障害者、女・接触無—具体的視覚障害者、女・接触無—具体的聴覚障害者、女・接触無—具体的運動障害者、女・接触無—単語『視覚障害者』、女・接触無—単語『聴覚障害者』、女・接触無—単語『運動障害者』）において、イメージの適用に有意差がみられた。「事件報道からの情報」については、女・接触無群が知的障害者以外の身体障害者3種に対するイメージの適用について影響を受けていた。刺激文中の具体的人物と、単語刺激とのイメージの適用の違いに着目すると、「事件報道から情報を得ている」者は、視覚障害者に関しては、単語『視覚障害者』に適用した賞賛に属するイメージと同様のイメージ内容を具体的視覚障害者にも適用させている。聴覚障害者に関しては、単語刺激に対して能力を発揮する様子をイメージとして適用させたのに対し、具体的人物に関しては対人交流が少なく受け身的な様子をイメージとして適用させ、運動障害者に関しては、単語刺激に対して交流困難に耐える様子をイメージとして適用させたのに対し、具体的人物に関しては有能である様子をイメージとして適用させている。また、単語「事件報道から情報を得ていない」者は、単語刺激に対しては3障害のいずれに対しても、社会的不利や同情につながるイメージを適用させたのに対し、具体的人物に対しては能動的な行動や障害の具体的な状態に着目したイメージを適用させている。特に、「事件報道からの情報」は、女・接触無群の身体障害者イメージの適用に影響を与えていた。障害者との直接的接触が無い状態において、一般媒体で情報を得る機会の多い事件報道は、女性にとって障害者イメージの適用に影響を与える要因であることが示されたが、影響の内容に関しては、聴覚障害者である具体的人物に対して対人交流の少なく受け身であるというイメージとして適用させており、障害者の社会参加を促す内容とは言えなかった。坂本（1999）も指摘している通り、実際に出会う障害者に対して、一過性の事件報道による情報に影響されたイメージを適用させないような情報発信上の工夫を模索する必要があるであろう。

「ドキュメンタリー番組からの情報」については、10種の組み合わせ（男・接触有一—具体的聴覚障害者、男・接触有一—単語『視覚障害者』、男・接触有一—単語『知的障害者』、男・接触無—具体的聴覚障害者、男・接触無—具体的知的障害者、男・接触無—単語『聴覚障害者』、女・接触有一—具体的知的障害者、女・接触有一—具体的運動障害者、女・接触有一—具

体的運動障害者、女・接触有一単語『運動障害者』、女・接触無一具体的聴覚障害者)において、イメージの適用に有意差がみられた。10種中7種は、具体的人物への適用の影響であり、ドキュメンタリー番組という、特定の人物の事実を伝える報道という情報の特性がイメージの適用に影響していることが推察された。また、特に、男・接触無群の聴覚障害者に対するイメージの適用と、女・接触有群の運動障害者に対するイメージの適用に関しては、具体的人物および単語刺激の双方に有意差がみられており、内容としてはいずれも、「ドキュメンタリー番組から情報を得ている」者が単語刺激で適用させたイメージに、文中から読み取れる刺激となっている人物の言動を加えた様子をイメージとして適用させており、一般的な障害者集団に対するイメージが、具体的人物に対する認識にも影響することがうかがわれた。

「フィクション作品からの情報」については、11種の組み合わせ（男・接触有一単語刺激『知的障害者』、男・接触無一具体的知的障害者、男・接触無一単語『知的障害者』、女・接触有一具体的視覚障害者、女・接触有一具体的聴覚障害者、女・接触有一具体的知的障害者、女・接触有一具体的運動障害者、女・接触無一具体的聴覚障害者、女・接触無一具体的知的障害者、女・接触無一具体的運動障害者、女・接触無一単語『運動障害者』)において、イメージの適用に有意差がみられた。11種中7種は、具体的人物に対するイメージの適用である。また、11種中8種は女性による適用であり、特に女・接触有群では全ての障害種において、具体的人物に対するイメージの適用に「フィクション作品からの情報」の影響がみられた。適用の内容をみると、何らかの能力の高さや活動性に関するイメージである。フィクション作品に登場する障害者は、障害に起因する何らかの困難がありながらも、何らかの役割をもち活動的に表現されており（大部・鄭，2012）、これらの登場人物のイメージがそのまま具体的人物に対しても適用されている可能性がある。

「授業からの情報」については、15種の組み合わせ（男・接触有一具体的聴覚障害者、男・接触有一単語『視覚障害者』、男・接触有一単語『聴覚障害者』、男・接触有一単語『運動障害者』、男・接触無一具体的聴覚障害者、男・接触無一具体的運動障害者、男・接触無一単語『視覚障害者』、男・接触無一単語『聴覚障害者』、男・接触無一単語『知的障害者』、女・接触有一具体的視覚障害者、女・接触有一具体的知的障害者、女・接触有一単語『聴覚障害者』、女・接触有一単語『知的障害者』、女・接触有一単語『運動障害者』)において、イメージの適用に有意差がみられた。イメージの内容に関しては、具体的人物に関するイメージの適用について、女・接触有一具体的聴覚障害者が、授業から情報を得ている者が

刺激文中の人物にコミュニケーション困難のイメージを適用させていることを除いて、「授業から障害者に関する情報を得ている」者は、人当たりの良さや能力の高さ、活動性といった、社会的受容につながるイメージを刺激文中の人物に対して適用させている点が共通している。対して、単語刺激に対する適用については、「授業から障害者に関する情報を得ている」者は、障害の具体的特徴や、対人交流に対する抵抗困難、また安定してみられる性格といったより幅のあるイメージを適用させていた。インドネシアにおける授業という情報伝達状況の性質としては、個々の障害者を取りあげてその状況を伝えるというよりも、書籍と同様、障害に関する一般的な事実を伝えるものであることから、具体的人物に関しては一般的な情報が必ずしも当てはまらず、人物の行動にみられる特徴をイメージとして適用させたものと推察される。また、単語刺激に関しては、得られた情報をそのまま適用させた結果として障害の具体的な状況や困難が表出されたと考えられる。

なお、第2研究において、唯一、分析的認知傾向がみられた男性の視覚障害者イメージについて、情報源によって適用されたイメージの違いを検討したところ、具体的視覚障害者に対するイメージの適用については、いずれの情報源も影響を及ぼしていなかった。単語刺激『視覚障害者』に関しては、書籍、ドキュメンタリー番組、授業がイメージの適用に影響を及ぼしていたが、特にそのうち、ドキュメンタリー番組や授業から情報を得た者は、視覚障害者の能力の低さやストレスにさらされている状態といった、視覚障害者の社会参加を阻みうるイメージを適用させていた。個別の情報内容を本研究では得ていないが、直接の接触経験でないこれらの情報源に関しても、接触経験と同様、形態や内容によっては、視覚障害者イメージのうち否定的な内容を適用させる可能性があることが示唆された。

7 今後の課題

本研究では4種の障害者に関するイメージの適用について検討したが、具体的視覚障害者に対する適用については情報源のいずれも影響がみられなかった。本研究で扱った要因以外に、障害者イメージの適用に影響しうる要因として考えられる項目は多様であるが、序章でとりあげた要因のなかで質問紙調査に含めていないものとして、対象者の出身地域や宗教が挙げられる。序章において、文化人類学分野における研究成果として、ボルネオ島のプナンバや、バリ島において、特徴的な障害者の生活の様子が伝えられていること（中村・山口監訳，2006；Branson, Don, I Gede Marsaja, & I Wayan Negara, 1996）、また多くのインドネシア人のもつ宗教であるイスラム教における障害者に対する解釈性の観

点 (Vardit Rispler-Chaim, 2007) から、これらの要因が障害者イメージの適用に与える影響も、今後検討される必要があるであろう。

結論

第7章 本研究のまとめ

インドネシアでは、障害者の教育参加、社会参加を阻む障害者イメージに起因する問題があり、これまでマスメディアを通じた啓発活動が行われてきているものの、問題解決はみられない。そこで本研究では、インドネシアにおける障害者イメージの内容、構造、適用について、大学生を対象として質問紙調査を行った。

障害者イメージの内容と構造を明らかにするために、イメージ連想テストにより『視覚障害者』『聴覚障害者』『知的障害者』『運動障害者』の4つの言語刺激に対するイメージを、動詞または形容詞で回答を求めた。

結果として、障害者イメージの内容について、いずれの障害者イメージに対しても、障害者の能力や人柄の良さを賞賛する内容と、能力の低さや利己的な態度を指摘する内容が共存していた。視覚障害者イメージにおける『敏感な』、知的障害者イメージにおける『利己的な』、運動障害者イメージにおける『運動障害のある』『劣等感の』は対象者群全体で回答における出現頻度が10%以上となっており、これらのイメージは視覚障害者、知的障害者、運動障害者に対する代表的なイメージと言えるであろう。

障害者イメージの構造を明らかにするために、イメージ連想テストで得られた回答のカテゴリと回答者群からなるクロス集計表に対してコレスポンデンス分析を実施した。結果として、4種の障害者イメージ共に、主に第2次元まででイメージ全体の60%が説明可能な状態であり、第1次元では『性格』と『障害の具体的特徴』で構成されていた。こうした構造は言語カテゴリーモデル (Semin & Fielder, 1988) の抽象性・具体性という人物の傾性の説明に類似している点がみられた。また、女子学生の抱く障害者イメージに関して、接触経験のある者はない者と比較して、障害種別にかかわらず、障害者に対する具体的特徴に着目することが示された。これは、言語カテゴリーモデルが示す記述的行為動詞という言語的抽象度が最も低い状態を示しており、こうした傾性は、イメージの対象集団に関する情報を多く得ることで知覚される (唐沢, 2010)。このことから、障害者との接触経験をもつ女子学生は、その経験から障害者の行動傾向に関する情報を多く得ることにより、障害者に対する具体的特徴に着目するに至る可能性が考えられる。また、男子学生に関しては、接触経験の有無によりイメージの着目点は異なる結果となった。また、視覚障害者イメージに関しては、他の障害種別と異なり、接触経験を有する者は、性格という、人物に安定してみられる傾性に着目するという、分析的認知の傾向がみられた。対して、女子学生は、いずれの障害者イメージにおいても、未接触の者は交流困難や交流を避

ける様子といった、対人交流上の問題に着目しているが、聴覚障害者イメージ以外の3種に関しては、接触経験のある者の抱くイメージの中に対人交流上の問題への着目傾向はみられなかった。

第3研究では、障害者イメージの適用について明らかにするために、刺激文中に示された障害のある具体的人物4種と、『視覚障害者』『聴覚障害者』『知的障害者』『運動障害者』という単語刺激に対するイメージを問う質問紙調査を実施し、性別及び接触経験によって分けられた対象者4群の回答について障害者イメージ構造をそれぞれ明らかにした上で、障害者に関する情報源5種について、イメージを適用させるうえでの影響について検討した。結果として、有効回答者群4群共通して、全ての障害種においてに具体的人物に対するイメージの適用の方が、単語刺激に対するイメージの適用よりも選択される表現語が制限され、選ばれた表現語に対する回答数が多く、特定の表現語によるイメージが対象者群内において多くの者に共有されていることが示された。また、障害者に関する情報源がイメージの適用に及ぼす影響については、①「書籍」や「授業」といった、一般的な事実を伝える情報源に関しては、障害の具体的特徴や困難について得られた情報をそのまま単語刺激に対してイメージを適用させる可能性があるが、書籍からの情報は具体的人物に対しても適用に影響するのに対して、授業からの情報は具体的人物には影響しないこと、②「事件報道」「ドキュメンタリー番組」「フィクション作品」に関しては具体的人物に対するイメージの適用により多く影響がみられるが、そのうち特に「事件報道」は女・接触無群の身体障害者に対するイメージの適用に、「フィクション作品」は女・接触有群の具体的障害者に対するイメージの適用に影響を及ぼしていた。なお、第2研究において唯一、男・接触有群において分析的認知傾向のみられた、視覚障害者イメージに関しては、具体的視覚障害者に対するイメージに影響を及ぼしていた情報源はみあたらず、本研究で扱った要因以外にも、視覚障害者イメージを変容させる要因検討の必要性が示唆された。また、単語刺激『視覚障害者』に関しては、書籍、ドキュメンタリー番組、授業といった情報源が影響していた。男・接触有群に関しては、ドキュメンタリー番組や授業から情報を得ている場合、視覚障害者に対して能力の低さやストレスにさらされた状態をはじめ、視覚障害者の社会参加を妨げうるイメージが適用されていることが示された。

第8章 総合考察

問題の所在で指摘されていた障害者イメージに起因する問題に関連しているとみられる

『劣等感の』『利己的な』といった社会的不利に関わる表現は、研究全体に一貫してみられたイメージであったが、身体障害者（視覚障害者、聴覚障害者、運動障害者）のイメージ内容においては一定以上の頻度で出現はしたが最も多い回答にはならなかったのに対して、知的障害者のイメージ内容において全ての有効回答者群で『利己的な』が回答数最多の表現語であった。身体障害者と知的障害者という刺激の違いとしては、障害の可視性が挙げられる。視覚障害者や運動障害者に関しては、身体的特徴に加え、白杖や車いすといった補助具によっても障害が認識される。聴覚障害者については、身体的特徴はないものの、手話という視覚的なコミュニケーション手段がある点、またインドネシアにおいては補聴器が現時点では比較的珍しいものであり、聴覚障害者自身によって、補聴器をみられることは恥ずかしいという認識が語られている（大竹，2004；スクマラ，2003）ことから、インドネシアにおいては可視性の障害といえるであろう。対して、知的障害はコミュニケーションを通じて、もしくは特徴的な振る舞いを見て、初めて認識される障害である。こうした、障害の可視性が障害者イメージに及ぼす影響は、これまで多くの研究において触れられてきたところであるが、障害者イメージに対する影響の有無に関しては一定の見解は得られていない（河内，2003；Gething，1991；Westbrook，Adamson，& Westbrook，1988）。しかし、少なくとも本研究においてみられた障害種別による障害者イメージの内容と適用の違いは、インドネシア人に特徴としてみられる視点に基づく可視性の影響の可能性が考えられるため、今後は言語のみによる刺激だけでなく、図や写真といった視覚的な刺激を活用した研究も検討される必要があるだろう。

また、特に『利己的な』の含むインドネシア特有の“甘え”や、『劣等感の』という能力の低さを表す固定的概念が、当該国の障害者の施設化を正当化する可能性があるという点は、すでに指摘した通りである。しかし同時に、こうしたイメージはインドネシアにおける伝統的な概念であること、さらに特殊学校という場が、就学期間を超えて障害者の居場所という受け皿として機能している（Komardjaja，2005）ことから、国内の社会システムもこうした伝統的な“甘え”のイメージにマッチしたものとなっていると考えられる。このようなインドネシア社会において、例えば西欧の人権という文脈から障害者の社会参加を単純に訴えても、概念の多様性を認める寛容さから理解はされても、共生社会実現のための具体的施策には結びつかない可能性がある。インドネシア人障害者が当事者の立場から障害者イメージに起因する問題を指摘していること（サイダ，2003；スクマラ 2003）、また教育参加や社会参加に対する障害者イメージの問題を研究者の立場から指摘している

(Sujarwanto, 2003 ; 大部・鄭・野呂, 2010) ことから、障害者イメージの抑制、解消は求められるが、障害者が社会参加可能な状況を作り出すためには、啓発活動によって障害者に対する認知に働きかけるだけでなく、新たな障害者認識にマッチするような、障害者が暮らしやすい場の創設も、同時にすすめられる必要があると考えられる。

なお、序章において、現状提唱されているイメージの適用を抑制する手段について、『脱カテゴリー化』『再カテゴリー化』『下位カテゴリー化』『交差カテゴリー化』『良心の呵責や罪悪感の利用』がこれまで検討されていることを述べた。そこで、本研究の結果から、これらの方策の有効性について検討する。

まず、『脱カテゴリー化』に関しては、第 2 研究において障害者との接触経験を有する男子学生の視覚障害者イメージ構造を除き、接触経験によって障害者の具体的特徴に着目する様子がみられたことから、直接障害者と接した経験が包括的認知を適用させ、対象者に障害者という集団に属する人々が個別に異なる性質をもつことを認識させることで、結果として障害者集団に対する性格特性のイメージを抑制したと考えられる。しかし、視覚障害者イメージに関しては、接触経験を有する者は性格特性に着目していることが示されたことについて、個人の友好関係が成立しても認知の変容はその個人に対するものにとどまる可能性がある、という脱カテゴリー化の問題点に関連する知見が得られており、一般的な視覚障害者の社会参加実現には寄与しないことが推察される。

『再カテゴリー化』『下位カテゴリー化』は、いずれも 2 集団（本研究の場合には、障害者と障害のない者）が 1 つの目標達成に向けて協力するような意図的な場面設定を要する方策である。接触経験を有する者が多くの場合、障害の具体的特徴への着目を示すことは、先に述べた通りであるが、同時に、本研究の中では伝統的な観念と結びついた障害者イメージが、障害者の社会参加を阻む現存の社会システムへの認識を正当化するものであることから、活動の中で両者がどのような役割を担うかを、本研究の知見で得られたイメージの内容と照らして検討する必要がある。

また、『交差カテゴリー化』に関しては、現状の障害者と障害のない者との社会的カテゴリーが交差しうるか否かについて検討の余地があると同時に、各々のカテゴリーがある程度等価である認識を要するため、この方策に関しては、ある程度障害者啓発活動と同時に、具体的な社会参加システムを運用し、障害者の社会参加をあるものにした状態から検討しうるものであると考えられる。

最後に、良心の呵責や罪悪感を障害者イメージ抑制の動機付けとして利用する方法につ

いては、本研究で明らかにされた障害者の社会参加を阻むイメージの内容は、障害者を『保護すべき存在』として認識し、良心の呵責や罪悪感によって施設化という現状のシステムを正当化するものであるため、インドネシアの障害者イメージ抑制の方策としては、活用しづらいものであると考える。

上記のカテゴリー化等によるイメージ適用の抑制は、主に接触経験によってなし得る方策であるが、当該国の地理的条件を考慮すれば、マスメディアを含む情報源の存在は有効活用しうる資源である。本研究においては、5種の情報源に関して、イメージの適用に対する影響を探ったが、その中で、情報源の影響に対する性差がみられている。すなわち、男子学生に対しては、「事件報道」および「フィクション作品」は、障害者イメージに対する影響は比較的少ない傾向がみられた。他方、女子学生に関しては、障害者との接触経験の有無によっても情報源による影響に違いがみられており、接触経験を有する女子学生は、「事件報道」からはイメージ適用に対して影響を受けておらず、接触経験をもたない女子学生は、「授業」からはいずれの障害種別においてもそのイメージに対する影響はみられなかった。こうした、性別による、障害者イメージの情報源からの影響の違いは、今後啓発活動を行う対象者の属性と照らしあわせて活用することが重要となろう。

以上、本研究において得られた知見から、インドネシアにおける障害者の教育参加、社会参加を妨げるイメージの抑制、解消のためには、活動の対象者が、①脱カテゴリー化に向けて障害者とある程度の間人関係を構築しうる接触経験を得ること、②一連の障害者啓発活動を推進すると同時に、インドネシアの文化文脈と共存しうる社会参加システムの運用を目指すこと、が求められる。また、性別及び障害者に関する情報源の観点から、③一般化された障害者という集団に、障害者の社会参加に影響を及ぼすと考えられる障害者イメージを適用させないために、書籍や授業によって、障害に関する具体的特徴についての知識を伝えること、④対象者の性別と情報源の組み合わせ次第では否定的な障害者イメージの抑制や解消に効果が得られない可能性があるため、啓発活動の対象者の性別によって情報源を使い分けること、が有効であると考えられる。

第9章 今後の課題

本研究は、インドネシアにおける障害者イメージ研究の基礎知見を得ることに焦点を当てて構成された。当該国の大学における施設・設備状況を含め、実現可能性を考慮し今回は質問紙調査という方法をとったが、社会的望ましさが回答に含まれている可能性もある。

イメージ研究においては、質問紙調査以外にも、生理学・神経科学的手法によって認知の側面から明らかにする方法も存在し（栗田・楠見，2014）、環境整備の条件が今後整えられる場合には、複数のアプローチで障害者イメージを明らかにしていく必要があるであろう。

本研究で得られた、障害者イメージの内容・構造・適用に関する知見は、今後のインドネシア国内における障害者啓発活動につなげるためのものである。特にイメージの適用に関する研究においては、性別、接触経験、障害者に関する情報源といった要因によって、イメージの適用に与える影響が異なることが示されており、これらの知見をもとに、対象の属性を理解したうえでの障害者の社会参加に貢献する啓発活動プログラムの開発を今後検討していくべきであろう。

文献

青野篤子（1994）15 章 女性と男性. 藤原武弘・高橋超編著（1994）チャートで知る社会心理学. 福村出版.

Arbour K. P., Latimer A. E., Martin Ginis K. A., & Jung M. E. (2007) Moving beyond the stigma: The impression formation benefits of exercise for individuals with a physical disability. *Adapted physical activity quarterly*, 24, 114-159.

Allport, G. W. (1954) *The nature of prejudice*. Cambridge, Mass: Addison-Wesley. (オールポート, G. W. 著, 原谷達夫・野村昭訳 (1968) 偏見の心理. 培風館.)

Badan pusat statistics (2014) Indikator sosial budaya 2003, 2006, 2009, dan 2012. http://www.bps.go.id/tab_sub/view.php?kat=1&tabel=1&daftar=1&id_subyek=27&no_tab=36 最終閲覧日：2014 年 1 月 9 日

Bailey J.W. (1991) Evaluation of a task partner who does or does not have a physical disability: Response amplification or sympathy effect? *Rehabilitation psychology*, 36, 99-110.

ベイ・アリフィン著・奥源造編訳（1975）インドネシアのこころ. めこん.

Branson J., Don M., I Gede Marsaja, & I Wayan Negara (1996) Everyone here speaks sign language too: A deaf village in Bali, Indonesia. In: Lucas, Ceil, ed. (1996) : *Multicultural aspects of sociolinguistics in deaf communities*, 39-57. Washington, D.C.: Gallaudet University press.

Burgess D., & Borgida E. (1999) Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, public, policy and law*, 5, 665-692.

Departmen pendidikan nasional (2010) *Daftar table data pendidikan luar biasa (PBL) Tahun 2008/2009*. Departmen pendidikan nasional.

Departmen pendidikan nasional (2009) *Daftar table data pendidikan luar biasa 2007/2008*. Departmen pendidikan nasional.

Devine P. G., Monteith M. J., Zuwerink J. R., & Elliot A. J. (1991) Prejudice with and without compunction. *Journal of personality & social psychology*, 60, 817-830.

Dipoyono Bonokamsi (1972) *Jawanese mystical groups*.

Direktrat pembinaan sekolah luar biasa (2002) *Kamus sistem isyarat bahasa*

Indonesia. Direktorat pembinaan sekolah luar biasa.

遠藤由美 (1998) 第 12 章 文化と人間. 池上知子・遠藤由美 (1998) グラフィック 社会心理学. サイエンス社.

Fiske S. T., Cuddy A. J., & Glick P. (2006) Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in cognitive science*, 11, 75-83.

Fiske S. T., Cuddy A. J., Glick P., & Xu J. (2002) A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of personality and social psychology*, 82, 878-902.

Fiske S. T. & Taylor S. E. (1984) *Social Cognition*. Random House.

Gardner, R. C. (1994) Stereotype as consensual beliefs. In P. Zanna Mark, M. Olson Jame, *The Psychology of prejudice. Lawrence erlbaum associates, The Ontario symposium v. 7*, 1-31.

Gething, Lindsay (1991) Generality vs. specificity of attitudes towards people with disabilities. *British journal of medical psychology*, 64 (1), 55-64.

Hoffman C., Lau I., & Johnson D. R. (1986) The linguistic relativity of person cognition: An English-Chinese comparison. *Journal of personality and social psychology*, 51, 1097-1105.

今中比呂志 (2000) インドネシアの大学生の対日意識—ディポネゴロ大学の調査報告—. 金城学院大学人文・社会科学研究所紀要, 4, 29-56.

石崎喜治 (2004) インドネシアにおける視覚障害者教育. 中田英雄 (研究代表) (2004) インドネシアにおける障害児教育開発の国際協力に関する研究. 平成 15 年度科学研究費補助金 [基盤研究 (B) (1)] (課題番号 15401041) 研究成果報告書(中間報告).

外務省 (2011) わかる! 国際情勢 Vol.76 インドネシアという国.

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol76/index.html> (最終閲覧日: 2014 年 9 月 28 日)

上瀬由美子 (2002) イメージの社会心理学—偏見の解消に向けて—. サイエンス社.

上瀬由美子 (2001) 視覚障害者一般に対する態度: 測定尺度の作成と接触経験・能力認知との関連. *情報と社会*, 11, 27-36.

上瀬由美子 (1999) 偏見・ステレオタイプの解消のメカニズム—集団間接触. *現代のエスプリ*, 195-203.

- 唐沢譲 (2010) 第 11 章 認知の社会的共有とコミュニケーション. 村田光二編 (2010) 現代の認知心理学 6 社会と感情. 北大路書房.
- Kashima Y., Kashima E. S., Kim U., & Gelfand M. (2006) Describing the social world: How is a person, a group, and a relationship described in the East and West? *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 388-396.
- 河合康 (2007) インドネシアにおける特別支援教育の枠組みと現況. 中田英雄 (2007) 途上国における特別支援教育開発の国際協力に関する研究. 平成 18 年度科学研究費補助金[基盤研究 A] (課題番号 17252010) 研究成果報告書.
- 河合康 (2004) インドネシアの障害児教育と国際教育協力. 上越教育大学障害児教育実践センター紀要, 10, 51-56.
- 河内清彦 (2003) 「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度」の妥当性の検討: 聴覚障害および視覚障害条件の影響について. *特殊教育学研究*, 40 (5), 451-461.
- 河内清彦 (2002) 視覚障害学生の学業支援サービスに対する大学生の意識構造—自己効力感、視覚障害者感、ボランティアイメージおよび支援に欲との関連—. *特殊教育学研究*, 39 (4), 33-45.
- 河内清彦 (2001) 視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造—性及び専攻学科との関連—. *教育心理学研究*, 49, 81-90.
- 君山由良 (2002) コレスポンデンス分析と因子分析によるイメージの測定法. データ分析研究所.
- 北村博幸 (2004) インドネシアにおける知的障害教育. 中田英雄 (研究代表) (2004) インドネシアにおける障害児教育開発の国際協力に関する研究. 平成 15 年度科学研究費補助金 [基盤研究 (B) (1)] (課題番号 15401041) 研究成果報告書 (中間報告).
- 国際協力事業団 企画・評価部 (2002) 国別障害関連情報 インドネシア.
http://www.jica.go.jp/activities/issues/social_sec/pdf/ind_jap.pdf 最終閲覧日: 2014 年 1 月 6 日.
- Komardjaja I. (2005) The place of people with intellectual disabilities in Bandung, Indonesia. *Health & place*, 11, 117-120.
- 久保田健市 (2004) 第 6 章 イメージと集団認知. 大島尚・北村英哉編著 (2004) 認知の社会心理学. 北樹出版.
- 工藤恵理子 (2004) 第 10 章 社会的認知と進化. 大島尚・北村英哉編著 (2004) 認知の

社会心理学. 北樹出版.

久野研二 (1996) ワールド・ナウ インドネシア CBR を支える障害者たち. ノーマライゼーション 障害者の福祉, 16, 68-69.

栗田季佳・楠見孝 (2014) 障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望. 教育心理学研究, 62, 64-80.

栗田季佳・楠見孝 (2012) 障害者の両面価値的態度の構造—能力・人柄に関する潜在的—顕在的イメージ. 特殊教育学研究, 49 (5), 481-491.

栗田季佳・楠見隆 (2010) 「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果—接触経験との関連から—. 教育心理学研究, 58, 129-139.

Kurzban, R. & Leary, M. R. (2001) Evolutionary origins of stigmatization: The functions of social exclusion. *Psychological Bulletin*, 127, 187-208.

Maass A., Karasawa M., Politi F., & Suga S. (2006) Do verbs and adjectives play different roles in different cultures? A cross-linguistic analysis of person representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 734-750.

Manton G. K., Dowd E. J. & Woodbury A. M. (1986) Conceptual and measurement issues in assessing disability cross nationally: Analysis of a WHO-sponsored survey of the Disablement process in Indonesia. *Journal of Cross-Cultural Gerontology I*, 339-362.

松本耕二・田引俊和 (2009) 障がい者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度. 山口県立大学学術情報, 2, 27-38.

McEwan L., Taylor J., Casswell M., Entwistle R., Jacoby K., Gorry J., Jacoby A., & Baker G. A. (2007) Knowledge of and attitudes expressed toward epilepsy by carers of people with epilepsy : A UK perspective. *Epilepsy and Behavior*, 11, 13-19.

Mehrabian A. & Epstein N. (1972) A measure of emotional empathy. *Journal of personality*, 40 (4), 525-543.

百瀬侑子 (2003) 知っておきたい戦争の歴史—日本占領下インドネシアの教育. つくばね舎.

毛呂裕子・島谷まき子 (2010) 精神障害者に対する社会的態度—精神障害に関する知識・経験・その他の要因からの検討—. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 12, 87-97.

村上嘉彦 (1999) 発展途上国、とくにインドネシアにおける難聴予防・医療の現状と医学

- 教育上の問題点. 公益財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団報告書.
- 村本由紀子 (2004) 社会的認知と文化. 岡隆 (2004) 社会的認知研究のパースペクティブ
心と社会のインターフェイス. 培風館.
- 中村満紀男・山口恵里子監訳, ベネディクト・イングスタッド, スーザン・レイノルド・
ホワイト編著 (2006) 障害と文化—日欧米世界からの障害観の問いなおし. 明石書店.
- ニノミヤ・アキエ・ヘンリー (1999) アジアの障害者と国際 NGO—障害者インターナ
ショナルと国連アジア太平洋障害者の 10 年. 明石書店
- Nisbett R. E., Peng K., Choi I., & Norenzayan A. (2001) Culture and systems of thought:
Holistic versus analytic cognition. *Psychological review*, 108, 291-340.
- 大橋英寿編著 (2004) フィールド社会心理学. 報道大学教育振興会.
- 大部令絵・鄭仁豪 (2013) インドネシア大学生の聴覚障害者に対するイメージ. *言語聴覚
障害*, 41 (2), 55-64.
- 大部令絵・鄭仁豪 (2012) インドネシアの大学生における視覚障害者イメージの研究—イ
メージの構造とその影響要因の検討—. *福祉心理学研究*, 9 (1), 17-27.
- 大部令絵・鄭仁豪 (2012) インドネシアの民話に登場する身体障害者—民話から障害者イ
メージを探る—. *日本特殊教育学会第 50 回大会 プログラム・発表論文集*, 168.
- 大部令絵 (2011) インドネシアの聴覚障害教育に関する実態調査. 筑波大学 2010 年度国
際研究プロジェクト報告書.
- Obu N. (2011) The semantic structure of images to people with visual impairment of
college students in Indonesia. The 10th International Conference on Low Vision,
No.17.3, Kuala Lumpur, Malaysia.
- Obu N. & Chung I. (2010) The curriculum and teaching models for hearing-impaired
children in Indonesia. the 21st International congress on the educational of the deaf,
PO4.2, Vancouver, Canada.
- 大部令絵・鄭仁豪・野呂文行 (2010) インドネシアにおける自閉症児教育の実態と課題に
関する研究—西ジャワ州都市部教員のインタビュー調査を通して—. *障害科学研究*, 34,
205-220.
- 大部令絵翻訳 (2008) インドネシア共和国の特殊教育における「学習指導要領」Standar
Kompetensi dan kompetensi dasar sekolah luar biasa tunarungu (SDLB-B)「能力の
基準と基礎能力 聴覚障害特殊学校小学部」(日本語訳). 中田英雄 (研究代表) (2008)

- 途上国における特別支援教育開発の国際協力に関する研究. 平成 19 年度科学研究費補助金[基盤研究 (A)] (課題番号 17252010) 研究成果報告書 (中間報告).
- 大久保好純・金崎良一・藤木卓・糸山景大 (1996) 連想調査による授業の情意的側面の表現. 教育工学, 96 (16), 7-14.
- 大澤論樹彦 (2007) インドネシア中部ジャワにおける community-based rehabilitation (CBR) の停止要因—1994 年から 2004 年までの活動推移の分析から—. 秋田大学医学部保健学科紀要, 15 (2), 7-15.
- 大竹一成 (2004) インドネシアの聴覚障害教育. 聴覚障害, 635.
- Parette P. & Scherer M. (2004) Assistive Technology Use and Stigma. Education and training in developmental disabilities, 39 (3), 217-226.
- Peeters G. (2002) From good and bad to can and must: Subjective necessity of acts associated with positively and negatively valued stimuli. *European journal of social psychology*, 32, 125-136.
- Petty R. E. & Cacioppo J. T. (1986) Communication and persuasion : Central and peripheral routes to attitude change. Springer-Verlag.
- 岡本春雄 (2009) メディアと人間 認知的社会臨床心理学からのアプローチ. 金子書房.
- Rahardja Djadja (2006) *Pengantar pendidikan luar biasa (Introduction to special education)*. Center for research on international cooperation in educational development. University of Tsukuba, Tsukuba, Japan. (in Indonesian) .
- Reksohadiprojo M. S. (1973) The inner life of the Javanese. *The Indonesian quarterly*, 2(1), 17-23.
- Rosenberg. H. J. & Hovland C. I. (1960) Cognitive, affective, and behavioral components of attitudes. In Rosenberg M. J., Hovland C. I. et al., Attitude organization and change. Yale University Press, 1-14.
- Rosenberg S., Nelson C., & Vivekananthan P. S. (1968) Multidimensional approach to the structure of personality impression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 283-294.
- サイダ・チュチュ (2003) インドネシア 仲間を作ろう!! . ノーマライゼーション, 23, (9), 66-67.
- 坂本真士 (1999) 精神疾患患者と身体疾患患者のイメージ. 現代のエスプリ, 162-171.

- 佐藤孝二 (2004) インドネシアにおける肢体不自由教育. 中田英雄 (研究代表) (2004) インドネシアにおける障害児教育開発の国際協力に関する研究. 平成 15 年度科学研究費補助金 [基盤研究 (B) (1)] (課題番号 15401041) 研究成果報告書 (中間報告).
- 澤江幸則・齊藤まゆみ (2010) 「障害のある子どものための身体活動」への関心についての研究—障害に関する知識との関連に着目して—. 筑波大学体育科学系紀要, 33, 87-98.
- Semiawan Conny (1994) Indonesia. In Mazurek K. & Winzer M. A. edit (1994) Semin, G. & Fiedler, K. (1988) The cognitive functions of linguistic categories in describing persons : Social cognition and language. *Journal of personality & social psychology*, 54, 558-568.
- Soeharso D. (1983) 特集/アジア・太平洋地域のリハビリテーション インドネシア. リハビリテーション研究, 44, 11-14.
- ソロ身体障害者リハビリテーションセンタープロジェクト (1998) インドネシア障害者法 (仮訳). 福祉労働, 78, 154 - 161.
- Stroebe, W. & Insko, C. A. (1989) Stereotype, prejudice, and discrimination : Changing conceptions in theory and research. In D. Bar-Tal, C. F. Graumann, A. W. Kruglanski, & W. Stroebe (Eds.) *Stereotype and prejudice : Changing conceptions*. Springer-verlag, New York, USA.
- スクマラ・ガル (2003) インドネシア、ジョグジャカルタでの草の根活動 ひろがれ！AP ネットワーク. ノーマライゼーション, 23 (9), 64-65.
- 菅さやか・唐沢穰 (2006) 人物の属性表現にみられる社会的イメージの影響. 社会心理学研究, 22 (2), 180-188.
- Sujarwanto (2004) *Inclusive education in Indonesia: Lessons from Japanese special education models*. Center for research on international cooperation in educational development, University of Tsukuba.
- 豊村和馬・菊池麻里 (2007) 視覚・聴覚障害学生に対するイメージの意味構造—中学生・高校生・大学生についての検討—. 北星論集, 44, 1-14.
- 塚本恵信 (1998) 知的障害者への偏見に関するセルフ・ディスクレパンシーの効果. 日本グループ・ダイナミックス学会第 46 回大会発表論文集, 212-213.
- 上野徳美 (1994) 7 章 態度形成と変容. 藤原武弘・高橋超編 (1994) チャートで知る社会心理学. 福村出版.

United nations (2014) Chapter IV Human rights 15. Convention on the rights of persons with disabilities.

https://treaties.un.org/Pages/ViewDetails.aspx?src=TREATY&mtdsg_no=IV-15&chapter=4&lang=en 最終閲覧日：2014年1月14日

Vardit Rispler-Chaim (2007) Disability in Islamic Law. Springer.

Vinacke, W. E. (1957) Stereotypes as social concepts. *Journal of social psychology*, 46, 229-243.

Westbrook M. T., Adomson B. J, & Westbrook J. I. (1988) Health science students' images of disabled people. *Community health studies*, 12 (3), 304-313.

山内隆久 (1996) 対人接触による障害者に対する偏見解消. 日本社会精神医学会雑誌, 5 (1), 205-215.

横山勝樹・野村みどり (1999) 視覚障害者の空間表象に関する研究—経路口述におけるイメージの抽出—. 日本建築学会計画系論文集, 522, 195-200.

Penjelasan tentang penelitian ini

1. Pemandangan tentang penelitian ini

Penelitian ini bertujuan untuk menerangkan bagaimana struktur perilaku terhadap suatu objek, dan berusaha menjelaskan korelasi kedua faktor tersebut. Mohon ekspresi perilaku tentang objek yang ada di halaman dari ke-4 sampai selesai dengan cara menuliskan kata sifat atau kata kerja. Waktu untuk mengisi angket kira-kira 20 munit.

2. Cara mengisi penelitian ini

Penelitian ini dilakukan dengan cara yang menjawab pertanyaan yang ada pada halaman 2. Mulai halaman 1 sampai halaman terakhir, tersedia kertas untuk menjawab beberapa objek untuk menuliskan ekspresi perilaku tersebut. Silahkan menulis perilaku ~~nya~~ dengan kata sifat atau kata kerja di lembar jawaban yang telah tersedia.

Anda bisa berhenti menjawab angket ini kapan saja. Anda diberikan kebebasan mengikuti penelitian ini atau tidak. Tidak ada paksaan untuk mengikuti penelitian ini.

3. Managemen data

Informasi pribadi anda tidak akan diketahui orang yang lain. Data yang didapat dalam penelitian ini, digunakan dengan format yang tidak bisa dipahami pesertanya siapa oleh orang lain. Data tersebut dikelola dan tersimpan aman dengan penuh tanggungjawab, dan datanya tidak digunakan untuk tujuan lain. Sesudah penelitian selesai, data tersebut dihancurkan supaya tidak digunakan oleh orang lain.

Angket yang anda isi, berarti anda setuju untuk membantu penelitian ini.

Mohon maaf kami telah merepotkan anda.

Penjelas/Pelaksana/Partaker: Norie Obu

Mahasiswi S3 tingkat 2, Jurusan Kelainan, Fakultas Ilmu Komprehensif, Universitas Tsukuba Jepang

Penelitian ini telah dapat sambutan dari panitia etik penelitian dalam pascasarjana ilmu manusia komprehensif, sekolah pascasarjana universitas Tsukuba, dan dilakukan dengan memperhatikan penuh, supaya jangan menjadikan beban kepada pesertayang akan mengisi angket penelitian ini. Peserta bisa membatalkan menjadi peserta penelitian ini kapan saja tanpa adanya sanksi.

Kalau ada pendapat atau pertanyaan tentang isi penelitian ini, silahkan langsung bertanya kepada Pelaksana atau Penanggungjawab penelitian ini.

Penjelas/Pelaksana/Partaker penelitian ini: Norie Obu, Jurusan ilmu kelainan, Fakultas Ilmu Manusia Komprehensif, program Pascasarjana Universitas Tsukuba, Jepang
e-mail: norie83@human.tsukuba.ac.jp

Penanggungjawab terhadap penelitian ini: Inho Chung, Proffesor asosiate, Fakultas Ilmu Manusia Komprehensif, program Pascasarjana Universitas Tsukuba

TEL/FAX: 81-29-853-4883 e-mail: ichung@human.tsukuba.ac.jp

Bila ada permasalahan etik tentang penelitian ini, silahkan menghubungi panitia etik penelitian dalam program Pascasarjana Ilmu Manusia Komprehensif, program Pascasarjana Universitas Tsukuba.

Bagian tata usaha, ruang bantu untuk institut ilmu manusia

TEL : 81-29-853-5605 e-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

Terima kasih atas kerjasama anda pada penelitian ini.

Silahkan jawab pertanyaan yang ada di bawah ini.

1. Jenis Kelamin (laki-laki perempuan)

2. Umur ()

3. Jurusan ()

4. Agama ()

5. Berilah tanda o pada jawaban dari pertanyaan dibawah ini.

①Apakah ada anggota keluarga yang menyandang kelainan? (ya tidak)

Silahkan beritahu jenis kelainan tersebut.

(tunanetra, tunarunggu, tunagrahita, tunadaksa, lain-lain())

②Apakah ada teman anda yang menyandang kelainan? (ya tidak)

Silahkan beritahu jenis kelainan teman anda tersebut.

(tunanetra, tunarunggu, tunagrahita, tunadaksa, lain-lain())

③Apakah anda pernah bertemu dan berbicara dengan penyandang cacat?

(pernah belum pernah)

④Apakah anda pernah ikut volunteer menolong penyandang cacat?

(pernah belum pernah)

⑤Apakah anda pernah dapat informasi tentang penyandang cacat dari media?(misalnya

TV, Koran, atau Internet, dll)

(pernah belum pernah)

6. Apakah anda pernah mengetahui tentang penyandang cacat dari media berikut?

①buku, termasuk buku khusus tentang orang luar biasa

(pernah belum pernah)

②berita kejadian(pernah belum pernah)

③berita dokumenter(pernah belum pernah)

④karya fiksi (pernah belum pernah)

⑤pelajaran / mata kuliah di kampus(pernah belum pernah)

Halaman berikutnya

Angket tentang perilaku seseorang

Tulislah perilaku tentang seseorang pada angket berikut ini dengan menggunakan kata sifat atau kata kerja.

(1) Orang tunanetra

① _____

② _____

③ _____

④ _____

⑤ _____

⑥ _____

⑦ _____

⑧ _____

⑨ _____

⑩ _____

Kalau ada kata sifat atau kata kerja yang mengekspresikan perilaku di atas, silahkan tulis di bawah ini.

(2) Orang tunarunggu

① _____

② _____

③ _____

④ _____

⑤ _____

⑥ _____

⑦ _____

⑧ _____

⑨ _____

⑩ _____

Kalau ada kata sifat atau kata kerja yang mengekspresikan perilaku di atas, silahkan tulis di bawah ini.

(3) Orang tunagrahita / Orang cacat mental

① _____

② _____

③ _____

④ _____

⑤ _____

⑥ _____

⑦ _____

⑧ _____

⑨ _____

⑩ _____

Kalau ada kata sifat atau kata kerja yang mengekspresikan perilaku di atas, silahkan tulis di bawah ini.

(4) Orang tunadaksa / Orang cacat motorik

① _____

② _____

③ _____

④ _____

⑤ _____

⑥ _____

⑦ _____

⑧ _____

⑨ _____

⑩ _____

Kalau ada kata sifat atau kata kerja yang mengekspresikan perilaku di atas, silahkan tulis di bawah ini.

Terima kasih atas kerjasamanya

本研究の説明

1. 本研究の目的

本研究の目的は、ある対象に対してどのようなイメージを抱くかを明らかにすることで、対象と印象の関連性を検討しようとするものです。4 ページから最後までにある対象について、形容詞または動詞でイメージを表現してください。質問紙回答にかかる時間は、およそ 20 分です。

2. 回答方法

本研究ではまず、2 ページにある質問に答えます。最初から最後まで、いくつかの対象に対してイメージ表現をこたえる質問が掲載されています。記入する場所に形容詞または動詞でイメージをお答えください。

あなたは、いつでも質問紙回答をやめることができます。本研究にあなたが参加するか否かは、自由に決めることができます。本研究への参加は強制されていません。

3. データ管理

あなたの個人情報、他者には知られません。本研究で得られたデータは、本人が特定されない形で活用されます。データは責任をもって管理し、目的以外のことには使用しません。研究終了後には、データは他者に利用されない方法で破棄いたします。

質問紙への回答をもって、本研究への協力に同意したものとみなします。

お手数をおかけいたしますが、よろしくお願ひいたします。

説明者/調査実施者 大部令絵

日本 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 障害科学専攻 博士後期第 2 学年

本研究は筑波大学大学院人間総合科学研究科倫理委員会によって、質問紙回答者に対して不利益がないよう、十分に審査されました。回答者は、いつでも実施者の許可なく本研究への参加をとりやめることができます。

本研究に対して、ご意見、ご質問がある場合は、本研究の実施者または責任者にお問い合わせ下さい

説明者/調査実施者：大部令絵 日本 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 障害科学専攻

e-mail:norie83@human.tsukuba.ac.jp

本研究の責任者：鄭仁豪 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 准教授

TEL/FAX: 81-29-853-4883 e-mail: ichung@human.tsukuba.ac.jp

もし本研究の倫理に問題があれば、筑波大学大学院 人間総合科学研究科 倫理委員会までご一報ください。

窓口 人間系支援室

TEL : 81-29-853-5605 e-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

本研究へのご協力、まことにありがとうございます。

以下の問いにお答えください。

1. 性別 (男性 女性)
2. 年齢 ()
3. 専攻 ()
4. 宗教 ()
5. 下記の問いに当てはまる答えに丸を付けてください。

①障害のある家族はいますか？ (はい いいえ)

障害種別についてお答えください。

(視覚障害, 聴覚障害, 知的障害, 運動障害, その他())

②障害のある友人はいますか？ (はい いいえ)

障害種別についてお答えください。

(視覚障害, 聴覚障害, 知的障害, 運動障害, その他())

③障害のある人に会って話をしたことはありますか？

(はい いいえ)

④障害のある人に対するボランティア活動をしたことがありますか？

(はい いいえ)

⑤あなたはメディアから障害者に関する情報を得たことがありますか？ (例えば、テレビ、新聞、インターネットなど)

(はい いいえ)

6. あなたは以下のメディアから障害者に関する情報を得たことがありますか？

①書籍、障害者に関する専門書を含む

(はい いいえ)

②事件報道(はい いいえ)

③ドキュメンタリー番組(はい いいえ)

④フィクション作品(はい いいえ)

⑤授業/大学での講義(はい いいえ)

次ページへ

人に関するイメージの質問

人に対するイメージを、形容詞または動詞でお書きください。

(1) 視覚障害者

① _____

② _____

③ _____

④ _____

⑤ _____

⑥ _____

⑦ _____

⑧ _____

⑨ _____

⑩ _____

上記以外の形容詞または動詞で表現があれば、以下にお書きください。

Blank area for writing additional adjectives or verbs.

(2) 聴覚障害者

① _____

② _____

③ _____

④ _____

⑤ _____

⑥ _____

⑦ _____

⑧ _____

⑨ _____

⑩ _____

上記以外の形容詞または動詞で表現があれば、以下にお書きください。

(3) 知的障害者

① _____

② _____

③ _____

④ _____

⑤ _____

⑥ _____

⑦ _____

⑧ _____

⑨ _____

⑩ _____

上記以外の形容詞または動詞で表現があれば、以下にお書きください。

Blank area for writing additional adjectives or verbs.

(4) 運動障害者

① _____

② _____

③ _____

④ _____

⑤ _____

⑥ _____

⑦ _____

⑧ _____

⑨ _____

⑩ _____

上記以外の形容詞または動詞で表現があれば、以下にお書きください。

ご協力ありがとうございました

Penjelasan Tentang Penelitian/ Angket Ini

1. Latar Belakang Penelitian

Penelitian ini bertujuan untuk menjelaskan bagaimana struktur perilaku terhadap suatu objek, dan berusaha menjelaskan korelasi antara kedua faktor tersebut. Mohon ekspresi perilaku tentang suatu objek yang ada pada halaman 3 sampai akhir, dengan cara memberi tanda ○ pada jawaban pada pertanyaan dibawahnya. Waktu untuk mengisi angket kira-kira 20 menit.

2. Cara mengisi penelitian / angket ini

Penelitian ini dilakukan dengan cara menjawab pertanyaan pada halaman 2. Dimulai pada halaman 3 sampai. Pada halaman tersebut telah tersedia kertas untuk menjawab beberapa objek, dan diminta untuk memilih kata-kata yang menjelaskan ekspresi seseorang dengan dijelaskan dalam kalimat.

Anda bisa berhenti menjawab, kapan saja. Anda diberi kebebasan mengikuti penelitian ini. Walaupun anda berhenti mengisi angket ini, selanjutnya tidak ada terdapat paksaan untuk melanjutkannya.

3. Managemen data

Informasi pribadi tidak akan diketahui oleh orang lain. Data yang diperoleh pada penelitian ini, digunakan dengan format yang tidak bisa dipahami pesertanya siapa oleh orang lain. Data tersebut dikelola dan tersimpan aman dengan penuh tanggungjawab, dan datanya tidak digunakan untuk tujuan lain. Sesudah penelitian selesai, data tersebut akan dihancurkan supaya tidak digunakan oleh orang lain.

Pengajuan angket berarti kesetujuan dalam membantu penelitian ini.

Sebelumnya kami mohon maaf karena telah merepotkan Anda.

Penjelas/Pelaksana/Partaker: Norie Obu

tingkat 2, ilmu kelainan, pascasarjana ilmu manusia komprehensif, sekolah pascasarjana universitas Tsukuba, Jepang

Penelitian ini telah dapat sambutan dari panitia etik penelitian dalam pascasarjana ilmu manusia komprehensif, sekolah pascasarjana universitas Tsukuba, dan dilakukan dengan memperhatikan supaya jangan menjadikan beban kepada peserta penelitian ini. Peserta bisa membatalkan menjadi peserta penelitian ini kapan saja tanpa adanya sanksi.

Kalau ada pendapat atau pertanyaan tentang isi penelitian ini, silahkan bertanya langsung kepada Pelaksana atau Penanggungjawab penelitian ini.

Penjelas/Pelaksana/Partaker penelitian ini: Norie Obu, ilmu kelainan, pascasarjana ilmu manusia komprehensif, program pascasarjana Universitas Tsukuba, Jepang

e-mail: oobu-norie@spu.ac.jp

Penanggungjawab pelakuan penelitian ini: Inho Chung, Profesor asosiate, ilmu manusia komprehensif, program pascasarjana Universitas Tsukuba

TEL/FAX: 81-29-853-4883 e-mail: ichung@human.tsukuba.ac.jp

Kalau ada permasalahan etik tentang penelitian ini, silahkan merundingkannya kepada panitia etik penelitian dalam program pascasarjana ilmu manusia komprehensif, program pascasarjana Universitas Tsukuba.

Bagian tata usaha, ruang bantu untuk institut ilmu manusia

TEL : 81-29-853-5605 e-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

Terima kasih atas kerjasama Anda pada penelitian ini.

Silahkan jawab pertanyaan yang ada di bawah ini.

- 1 . Jenis Kelamin (laki-laki perempuan)
- 2 . Umur ()
- 3 . Jurusan ()
- 4 . Agama ()
- 5 . Berilah tanda pada jawaban pada pertanyaan dibawah berikut ini.
 - ①Apakah ada anggota keluarga yang menyandang kelainan? (ya tidak)
Silahkan beritahu jenis kelainan tersebut.
(tunanetra, tunarunggu, tunagrahita, tunadaksa, lain-lain())
 - ②Apakah ada teman anda yang menyandang kelainan? (ya tidak)
Silahkan beritahu jenis kelainan teman anda tersebut.
(tunanetra, tunarunggu, tunagrahita, tunadaksa, lain-lain())
 - ③Apakah anda pernah bertemu dan berbicara dengan penyandang cacat?
(pernah belum pernah)
 - ④Apakah anda pernah ikut sebagai volunteer menolong penyandang cacat?
(pernah belum pernah)
 - ⑤ Apakah anda pernah mendapat informasi tentang penyandang cacat dari media?(misalnya TV, Koran, atau Internet, dll)
(pernah belum pernah)
- 6 . Apakah anda pernah mengetahui tentang penyandang cacat dari media berikut?
 - ①buku, termasuk buku khusus tentang orang luar biasa
(pernah belum pernah)
 - ②berita kejadian(pernah belum pernah)
 - ③berita dokumenter(pernah belum pernah)
 - ④karya fiksi (pernah belum pernah)
 - ⑤pelajaran / mata kuliah di kampus(pernah belum pernah)

[Cerita pertama]

Dani tidak bisa melihat. Dia membaca braille.

Dia berasal dari Sulawesi, sekarang dia bekerja sebagai tukang pijat untuk wisatawan di Bali. Dia lancar berbahasa Inggris dengan orang asing.

Kadang-kadang dia memijat orang miskin yang tinggal di sekitar tempat prakteknya dengan gratis.

Dia tidak begitu banyak berbicara dengan tamu di tempat prakteknya. Beberapa wisatawan ada yang kabur tanpa membayar uang sesudah dipijat. Dia sering merasa sedih tetapi dia tidak pernah marah. Dia pikir mungkin mereka tidak membayar karena pijatannya tidak cukup memuaskan untuk mereka.

Dia meminta bantuan kepada orang tuanya untuk mengantar dan menjemput dari rumah sampai ke tempat prakteknya dan mengerjakan semua pekerjaan rumahnya.

[Pertanyaan pertama]

Silahkan pilih 3 kata-kata yang sesuai dengan Dani.

Berilah tanda pada jawaban dari pertanyaan tersebut.

tidak bisa melihat	menggunakan alat bantu	baik
Aktif	sabar	minder
jarang bergaul	egois	sensitif
mandiri	pintar	susah berbicara

[Cerita ke-2]

Dina tidak bisa mendengar. Pada saat berkomunikasi, dia tidak begitu banyak berbicara, tetapi lebih sering menggunakan bahasa isyarat.

Dia menjual gorengan di warung di depan SD. Dia mulai menjual gorengannya pada saat pulang sekolah.jualannya tidak setiap hari laku, tetapi sering juga habis terjual.

Bulan depan, dia bermaksud menjual gorengannya di sekolah lain juga. Dia seandainya memutuskan untuk menyerahkan warungnya yang sekarang kepada saudaranya, walaupun saudaranya tidak mau.

Gorengan yang tidak laku terjual dia berikan kepada orang miskin. Dia hanya bicara pada saat berjualan dan pada saat memberikan gorengan yang tidak laku kepada orang miskin.

Karena dia tunarungu, beberapa pembeli ada yang sengaja mengurangi bayarannya, tetapi dia diam saja. Karena dia merasa terlalu bodoh dalam berhitung. Sebaliknya jika ada yang memberikan uang lebih, dia tersinggung karena merasa dikasihani.

[Pertanyaan ke-2]

Silahkan pilih 3 kata-kata yang sesuai dengan Dina.

Berilah tanda pada jawaban dari pertanyaan tersebut.

Tidak bias mendengar	menggunakan alat bantu	baik
Aktif	sabar	Minder
jarang bergaul	egois	Sensitive
mandiri	pintar	susah berbicara

[Cerita ke-3]

Eri mempunyai keterbelakangan mental. Pada saat berkomunikasi, dia tidak begitu sering berbicara, tetapi lebih sering menggunakan kartu gambar.

Pada saat melihat orang tua yang akan menyeberang jalan, dia segera menggandeng tangan orang tua tersebut dan menuntunnya menyeberang jalan. Setelah sampai di seberang jalan, dia pergi begitu saja tanpa berbicara sepatah kata pun walaupun orang tua tersebut mengajaknya berbicara.

Dia bekerja sebagai tukang bersih-bersih di SLB. Pada saat istirahat, dia selalu menggambar ikan, dan bila ada orang yang mencoba melihat gambarnya, dia menyembunyikannya, karena dia pikir gambarnya tidak bagus. Sebelum gambarnya selesai dia tidak akan memulai bersih-bersih. Karena itu, kadang-kadang guru di SLB menegurnya. Hal itu membuat dia sedih, namun dia tetap tidak mengerti mengapa dia ditegur.

[Pertanyaan ke-3]

Silahkan pilih-3 kata-kata yang sesuai dengan Eri.

Berilah tanda pada jawaban dari pertanyaan tersebut.

ada cacat intelektual	menggunakan alat bantu	baik
Aktif	sabar	minder
jarang bergaul	egois	sensitif
mandiri	pintar	susah berbicara

[Cerita ke-4]

Ari tidak memiliki kaki kanan. Dia menggunakan tongkat untuk berjalan.

Dia Berasal dari Sumatera, sekarang dia bekerja sebagai programmer komputer di Jakarta.

Dia membayar uang sekolah adiknya dari gajinya sendiri.

Dia tidak begitu banyak berbicara dengan orang lain di perusahaan.

Setiap pembagian tugas dalam proyek, dia selalu memiliki pekerjaan yang hanya memasukan data ke computer saja, karena dia pikir bukan dia yang mengusulkannya.

Akan tetapi, dia juga tidak pernah mengusulkan ide proyek karena dia pikir idenya kurang bagus.

[Pertanyaan ke-4]

Silahkan pilih 3 kata-kata yang sesuai dengan Ari.

Berilah tanda pada jawaban dari pertanyaan tersebut.

fisiknya ada gangguan	menggunakan alat bantu	baik
Aktif	sabar	minder
jarang bergaul	egois	sensitif
mandiri	pintar	susah berbicara

[Pertanyaan ke-5]

Silahkan pilih 3 kata-kata yang sesuai dengan “Orang tunanetra”.

Berilah tanda pada jawaban dari pertanyaan yang tersebut.

tidak bisa melihat	menggunakan alat bantu	baik
Aktif	sabar	minder
jarang bergaul	egois	sensitif
mandiri	pintar	susah berbicara

[Pertanyaan ke-6]

Silahkan pilih 3 kata-kata yang sesuai dengan “Orang tunarungu”.

Berilah tanda pada jawaban dari pertanyaan yang tersebut.

Tidak bias mendengar	menggunakan alat bantu	baik
Aktif	sabar	Minder
jarang bergaul	egois	Sensitive
mandiri	pintar	susah berbicara

[Pertanyaan ke-7]

Silahkan pilih 3 kata-kata yang sesuai dengan “Orang tunagrahita (Orang cacat intelektual).

Berilah tanda pada jawaban dari pertanyaan yang tersebut.

ada cacat intelektual	menggunakan alat bantu	baik
Aktif	sabar	minder
jarang bergaul	egois	sensitif
mandiri	pintar	susah berbicara

[Pertanyaan ke-8]

Silahkan pilih 3 kata-kata yang sesuai dengan “Orang tunadaksa (Orang cacat motoric)”.
Berilah tanda pada jawaban dari pertanyaan yang tersebut.

fisiknya ada gangguan	menggunakan alat bantu	baik
Aktif	sabar	minder
jarang bergaul	egois	sensitif
mandiri	pintar	susah berbicara

Terima kasih atas kerjasama anda.

本研究/質問紙に関する説明

1. 本研究の背景

本研究は、ある対象に対するイメージがどのような構造をしているのか、そしてイメージと対象との関連について明らかにするという目的で行われます。3 ページから最後までに示されている対象のイメージを、当てはまるものに丸をつけるという方法で表現してください。回答の所要時間はおよそ 20 分です。

2. 本研究/質問紙調査の方法

本研究は行われます。2 ページにある質問にお答えいただくところから始まります。3 ページからは、いくつかの対象が登場します。文章中で説明されている人物の印象を説明している言葉を選んでください。

あなたは、いつでも回答をやめることができます。本研究への参加は任意です。質問紙への回答をやめても、強制的につづけさせられることはありません。

3. データ管理

個人情報 that 他者に知られることはありません。本研究で得られたデータは、他者に理解されない形で扱われます。データは責任をもって安全に保管され、本研究の他の目的で使用されることはありません。研究終了後は、データは他者に利用されないように破棄されます。

質問紙への回答をもって、本研究への参加の同意とみなします。

お手数おかけし恐縮ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

説明者/研究実施者：大部令絵

日本 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 障害科学専攻 博士後期第 2 学年

本研究は筑波大学大学院人間総合科学研究科倫理委員会によって、質問紙回答者に対して不利益がないよう、十分に審査されました。回答者は、いつでも実施者の許可なく本研究への参加をとりやめることができます。

本研究に対して、ご意見、ご質問がある場合は、本研究の実施者または責任者にお問い合わせください。

説明者/調査実施者：大部令絵 日本 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 障害科学専攻
e-mail: norie83@human.tsukuba.ac.jp

本研究の責任者：鄭仁豪 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 准教授
TEL/FAX: 81-29-853-4883 e-mail: ichung@human.tsukuba.ac.jp

もし本研究の倫理に問題があれば、筑波大学大学院 人間総合科学研究科 倫理委員会までご一報ください。

窓口 人間系支援室

TEL : 81-29-853-5605 e-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

本研究へのご協力、まことにありがとうございます。

Bagian tata usaha, ruang bantu untuk institut ilmu manusia

TEL : 81-29-853-5605 e-mail: hitorinri@un.tsukuba.ac.jp

Terima kasih atas kerjasama Anda pada penelitian ini.

以下の問いにお答えください。

1. 性別 (男性 女性)
2. 年齢 ()
3. 専攻 ()
4. 宗教 ()
5. 下記の問いに当てはまる答えに丸を付けてください。

①障害のある家族はいますか？ (はい いいえ)

障害種別についてお答えください。

(視覚障害, 聴覚障害, 知的障害, 運動障害, その他())

②障害のある友人はいますか？ (はい いいえ)

障害種別についてお答えください。

(視覚障害, 聴覚障害, 知的障害, 運動障害, その他())

③障害のある人に会って話をしたことはありますか？

(はい いいえ)

④障害のある人に対するボランティア活動をしたことがありますか？

(はい いいえ)

⑤あなたはメディアから障害者に関する情報を得たことがありますか？ (例えば、テレビ、新聞、インターネットなど)

(はい いいえ)

6. あなたは以下のメディアから障害者に関する情報を得たことがありますか？

①書籍、障害者に関する専門書を含む

(はい いいえ)

②事件報道(はい いいえ)

③ドキュメンタリー番組(はい いいえ)

④フィクション作品(はい いいえ)

⑤授業/大学での講義(はい いいえ)

次ページへ

[物語 1]

ダニは目が見えない。彼/彼女は点字を読む

彼/彼女はスラウェシ出身で、現在はバリで観光客相手にマッサージをする仕事をしている。

彼/彼女は外国人に流暢に英語をしゃべる。

時々、彼/彼女は自分のお店のまわりにいる貧しい人に対して無料でマッサージをする。

彼/彼女は、お店でお客さんに対してあまり多くはおしゃべりをしない。観光客の中には、マッサージの後にお金を少なく支払う人もいる。彼/彼女は悲しいと感じるが、彼は怒ったことがない。

彼/彼女は、お金を少なく払う人は、自分のマッサージが十分でなかったのだろうと感じる。

彼/彼女はお店からの往復の移動について、両親に手伝ってもらい、家事のことはすべて教員に任せている。

[質問 1]

“ダニ”にあてはまる3つの言葉を下記から選んでください。

質問に対して選んだ答えには○をつけてください。

視覚障害のある	補助具を使う	良い
アクティブな	我慢強い	劣等感の
社交的でない	利己的な	敏感な
自立した	賢い	話すのが難しい

[Cerita ke-2]

ディナは耳が聞こえない。コミュニケーションをするとき、彼/彼女はあまりしゃべらず、手話を使う。

彼/彼女は、小学校の前の屋台で揚げ物を売っている。彼/彼女はその学校の下校時刻から揚げ物を売り始める。毎日ではないが、売り切れることもある。先月、彼/彼女はほかの学校でも揚げ物を売り始めた。彼/彼女は、自分の兄弟がやりたいか、やりたくないかにかかわらず、今の屋台を継いでもらおうとしている。

売れ残った揚げ物を、彼/彼女は貧しい人にあげている。彼/彼女はうっているときや、貧しい人に売れ残りをあげるときに、あまりしゃべらない。

聴覚障害であることから、客のなかには少なく支払うものもいるが、彼/彼女は何も言わない。なぜなら彼/彼女は相手が数を数えられないと思われているのではないかと感じるからである。逆に多くお金を払われるときには、彼は自分が憐れまれていると感じる。

[質問 2]

“ディナ”に当てはまる言葉を3つ選んでください。

以下の選択肢から○をつけてください。

聴覚障害のある	補助具を使う	よい
アクティブな	我慢強い	劣等感の
社交的でない	利己的な	敏感な
自立した	賢い	話すのが難しい

[物語 3]

エリには知的障害がある。コミュニケーションをとるとき、彼/彼女はあまりしゃべらず、絵カードを多く使う。

彼/彼女は、高齢者が道を渡ろうとしているのをみると、すぐにその人の手をひいて道をわたる。道を渡り終わると、彼/彼女は、その高齢者が話しかけようとしても、まったくしゃべらずに立ち去る。

彼/彼女は、特殊学校で清掃員として働いている。休憩のときには、彼/彼女はいつも魚の絵を描いている。誰かがその絵を見ようとする、と、彼/彼女はそれを隠してしまう。なぜなら、自分の絵があまり上手ではないと考えているからである。絵が完成するまで、彼/彼女は掃除をしようとしなない。そのため、時々特殊学校の教員に怒られる。そのことで彼/彼女は悲しくなるが、なぜ自分が怒られているのかがわからない。

[質問 3]

“エリ”に当てはまる言葉を3つ選んでください。

以下の選択肢から○をつけてください。

知的障害のある	補助具を使う	よい
アクティブな	我慢強い	劣等感の
社交的でない	利己的な	敏感な
自立した	賢い	話すのが難しい

[物語 4]

アリには右足がない。彼/彼女は歩行に杖を使う。

彼/彼女はスマトラ出身で、現在ジャカルタでコンピュータープログラマーをしている。

彼/彼女は自分の給料から、自分の弟/妹の学費を支払っている。

彼/彼女は仕事で他者とあまり話さない。

彼/彼女は、いつもプロジェクトの仕事の中で、データ入力の仕事だけを担当している。彼

/彼女は自分がそのプロジェクトに不満があるからである。

しかし、彼/彼女は、プロジェクトに対する自分の意見があまりいいものではないと思っているので、自分の意見を提案として出したことがない。

[質問 4]

“アリ”に当てはまる言葉を3つ選んでください。

以下の選択肢から○をつけてください。

運動障害のある	補助具を使う	よい
アクティブな	我慢強い	劣等感の
社交的でない	利己的な	敏感な
自立した	賢い	話すのが難しい

[質問 5]

“視覚障害者” に当てはまる言葉を3つ選んでください。

以下の選択肢から○をつけてください。

視覚障害のある	補助具を使う	良い
アクティブな	我慢強い	劣等感の
社交的でない	利己的な	敏感な
自立した	賢い	話すのが難しい

[質問 6]

“聴覚障害者” に当てはまる言葉を3つ選んでください。

以下の選択肢から○をつけてください。

聴覚障害のある	補助具を使う	よい
アクティブな	我慢強い	劣等感の
社交的でない	利己的な	敏感な
自立した	賢い	話すのが難しい

[質問 7]

“知的障害者（知的に障害のある人）”に当てはまる言葉を3つ選んでください。

以下の選択肢から○をつけてください。

知的障害のある	補助具を使う	よい
アクティブな	我慢強い	劣等感の
社会的でない	利己的な	敏感な
自立した	賢い	話すのが難しい

[質問 8]

“運動障害者（運動に障害のある人）”に当てはまる言葉を3つ選んでください。

以下の選択肢から○をつけてください。

運動障害のある	補助具を使う	よい
アクティブな	我慢強い	劣等感の
社会的でない	利己的な	敏感な
自立した	賢い	話すのが難しい

ご協力ありがとうございました

謝辞

本研究を行うにあたり、日本、インドネシアの多くの方々にご協力、ご支援賜りました。

指導教員の鄭仁豪先生には、博士後期課程進学の前から長きにわたりご指導、ご鞭撻を賜りました。障害科学分野において海外をフィールドとした研究を快く受け入れてくださったこと、本研究を遂行するにあたっての研究者としての心構えから研究手法、論文執筆まで、きめ細やかなご指導をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

副指導教員の柿澤敏文先生、岡典子先生には研究全体に貴重なご指摘、ご指摘をいただきました。野呂文行先生には、修士論文の指導教員をご担当いただき、博士後期課程進学にあたってのアドバイスもいただきました。また、河内清彦先生には障害者の態度研究の歴史や手法につきまして、中田英雄先生にはインドネシアにおける特殊教育分野の研究および現地調査の実施につきまして、多くのご指導をいただきました。

インドネシアにおける現地調査、また翻訳・インドネシア文化の理解に関しまして、つくばインドネシア語勉強会の皆様に多大なるご協力をいただきました。篤く御礼申し上げます。

インドネシア国内での調査実施に際しましては、現地大学の多くの先生方にご協力をいただきました。特に、インドネシア教育大学 ジャジャ・ラハルジャ先生、ジャカルタ国立大学 ララン・エルラニ先生、ジョグジャカルタ日本語学校のルッシー・リドゥワン校長には、現地調査のみならず、現地での生活にもご支援いただきましたこと、感謝申し上げます。さらに、3大学において質問紙調査にご協力くださった学生の皆様にも、御礼申し上げます。

また、博士論文の執筆と並行して業務を遂行することを快く受け入れてくださったばかりでなく、背中を押して激励くださった、埼玉県立大学 萱場一則副学長、田口孝行教授、新井利民准教授、藤川あや准教授、彩の国連携力育成プロジェクトの皆様方に、感謝いたします。

上記のように、国境を超えて多くの方々にご支援をいただいた本研究の成果を、障害者イメージの解消に、ひいては障害の有無に関係なくインドネシアの障害者の教育・社会参加につながられるよう、今後も研究活動に尽力してまいります。本当にありがとうございました。

Terima kasih banyak atas semua kerjasama untuk perhasilan disertasi s3 saya.

平成 26 年 12 月 吉日

大部令絵